熊本県文化財調査報告第198集

岩瀬・木柑子遺跡

花房中央地区県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財調査

2001.3

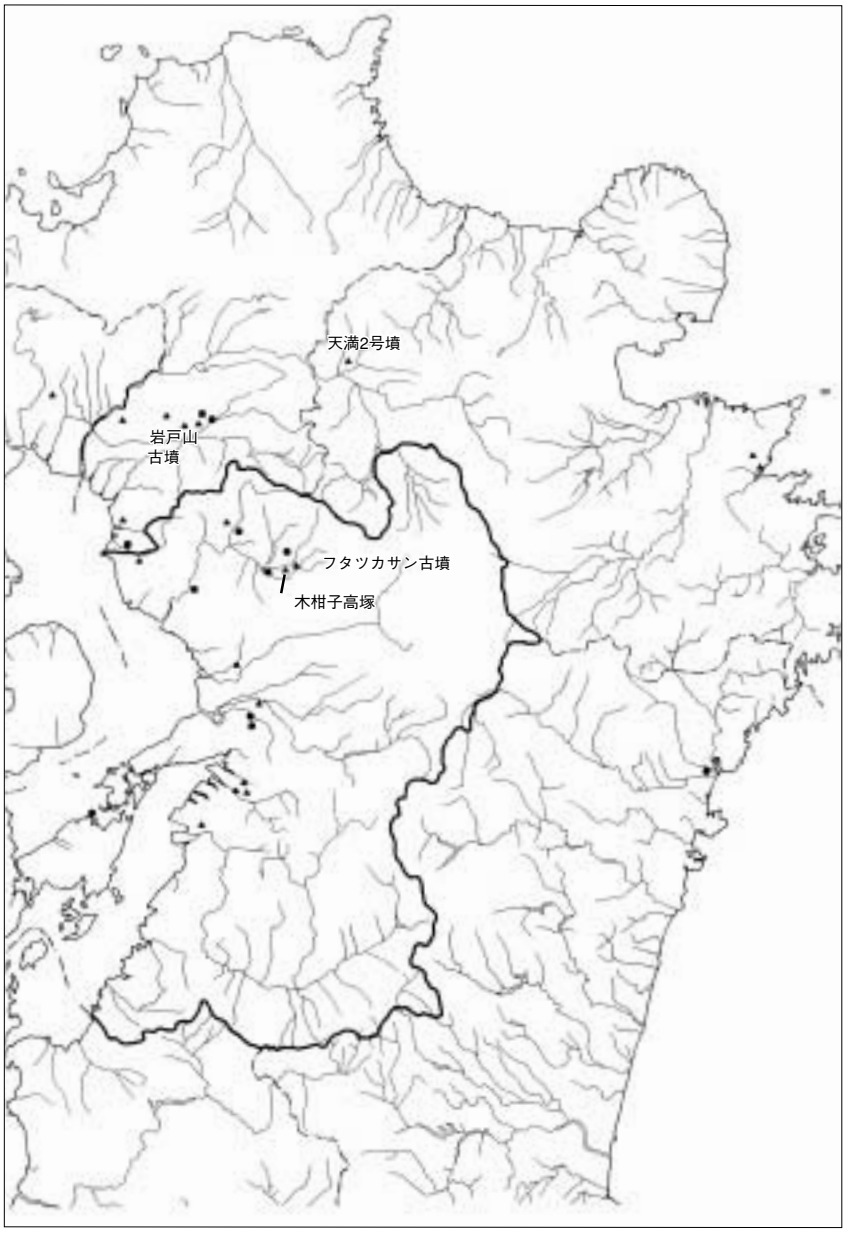
熊本県教育委員会

Copyright by Board of Education, Kumamoto Prefectural Office

いわせ・きこうじいせき

岩瀬・木柑子遺跡

－熊本県菊池市及び菊池郡七城町に所在する埋蔵文化財調査報告－



２００１

熊本県教育委員会

序　文

熊本県教育委員会では、県営ほ場整備事業（花房中央地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査として、菊池市及び菊池郡七城町に所在する岩瀬・木柑子遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、古墳時代を中心とした様々な遺構が確認されました。中でも、木柑子高塚古墳と名づけられた古墳の周溝より、石人４体が出土しており、この地域の古墳時代の文化を考えるうえでの貴重な資料となりました。

この報告書が広く活用され、文化財保護と研究資料の一助になれば幸いです。

なお、調査を実施するにあたり、文化財保護の観点から多大の御協力を惜しまれなかった県農政部、同菊池事務所菊池台地推進室及び地元関係者の皆様、また御指導御助言をいただきました諸先生方に深く感謝申し上げます。

平成13年３月30日

熊本県教育長　田中　力男

例　　言

1　本書は、平成８・９年度に熊本県教育委員会が、花房中央地区県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財「岩瀬・木柑子遺跡」発掘調査の記録である。

2　本書は、平成９年度に実施した木柑子高塚古墳の発掘調査記録を主としている。
平成８年度の発掘調査の記録については、調査概要報告に留まっている。

3　本書に掲載した「岩瀬・木柑子遺跡」は、熊本県菊池市木柑子及び菊池郡七城町岩瀬に所在する。

4　現地調査は、平成８年度は、平成９年２月より実施し、江本直・小谷圭太郎・河津摂が担当した。
また平成９年度は、８月より実施し、古森政次、中村安宏が担当した。

5　本書で使用した地図は、建設省国土地理院発行の地形図（１：25,000）をもとに作成したものの他、熊本県菊池地域振興局菊池台地土地改良推進室から提供を受けたものを基礎にしている。

6　遺物の整理作業は、平成11年度に熊本県文化財収蔵庫で行った。

7　遺物の実測は、甲斐正子を中心に水上仁、田中智宏、上高原聡、三木ますみ、古城史雄が行った。

8　遺構及び遺物実測図の製図は、林　ゆり・古閑満代が行い、一部宮寄まい子の協力を得た。

9　石製表飾の実測は、株式会社パスコ熊本支店に委託した。また写真撮影は、長谷部善一、古森が行った。

10　鉄器のＸ線写真は、福岡市埋蔵文化財センターの協力を得た。

11　遺物の写真撮影は、村田百合子を中心に、林、古閑が行った。

12　本書の編集は、熊本県教育委員会が行い、古城が担当した。

13　出土遺物及び調査に関する記録類は、一括して熊本県教育委員会が保管している。

凡　　例

1　遺構の深さは、断りがないものは検出面からの深さである。

2　現地での遺構実測は、１/10 又は１/20 の縮尺で行い、本書収録の際には、１/30 、１/40、１/60 の縮尺となっている。

3　遺物の実測は、１/１で行った。本書収録の際には、石製表飾が１/６、土器が１/３鉄器が１/２の縮尺となっている。

4　遺構を個別に説明する際用いた「東西南北」については、各々の遺構での任意方向である。

本　文　目　次

序　文
例　言
凡　例

第Ⅰ章　調査の概要
第１節　調査に至る経緯 …… 3
第２節　調査の方法と経過 …… 5

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境
第１節　地理的環境 …… 9
第２節　歴史的環境 …… 9
第３節　基本土層 ……12

第Ⅲ章　調査の成果
第１節　縄文時代の遺構と遺物 ……17
1　遺構とその位置
2　包含層出土の遺物
第２節　古墳時代の遺構と遺物 ……21
Ⅰ　平成８年度の調査 ……21
1　はじめに
2　溝遺構
3　円形周遺構
4　まとめ
Ⅱ　木柑子高塚古墳の調査成果 ……33
1　周溝の土層について
2　周溝の形状について
3　遺物出土状況について
4　石製表飾について
5　木柑子高塚古墳出土の須恵器･土師器
6　金属器
7　まとめ
第３節　奈良時代以降の遺構と遺物 ……54
1　溝遺構
2　竪穴式住居跡
3　土坑
4　奈良時代以降の出土遺物
5　まとめ
第Ⅳ章　総　括 ……63
図　版
報告書抄録

挿図目次

第１図　岩瀬・木柑子遺跡周辺地形図 …… 4
第２図　周辺遺跡分布図 ……10
第３図　基本土層図 ……12
第４図　岩瀬・木柑子遺跡調査区配置図 ……13
第５図　縄文時代遺構配置図 ……18
第６図　埋甕出土状況実測図 ……19
第７図　１号埋甕実測図 ……19
第８図　２号埋甕実測図 ……20
第９図　古墳時代遺構配置図 ……22
第10図　Ⅱa区・Ⅲa区溝配置図（１～４号溝） ……23
第11図　２～４号溝土層断面図 ……24
第12図　３号溝出土遺物実測図 ……25
第13図　Ⅵ区・Ⅶa区　古墳時代遺構配置図 ……27
第14図　Ⅶa区　５号溝土層断面図 ……28
第15図　５号溝出土遺物実測図 ……28
第16図　１号円形周溝遺構実測図……29
第17図　木柑子・高塚古墳及び２号円形周溝平面図 ……30
第18図　２号円形周溝（古墳C）出土遺物実測図 ……31
第19図　２号円形周溝（古墳C）出土遺物実測図 ……32
第20図　木柑子・高塚古墳土層断面図 ……34
第21図　木柑子・高塚古墳石人１及び遺物出土状況 ……35
第22図　木柑子・高塚古墳石人２～４及び遺物出土状況 ……36
第23図　木柑子・高塚遺物出土状況断面図 ……38
第24図　木柑子・高塚古墳石人２及び須恵器出土状況 ……39
第25図　石人１実測図（正面・右側面） ……40
第26図　石人１実測図（左側面・背面図） ……41
第27図　石人２実測図（右側面・正面図） ……42
第28図　石人２実測図（左側面・背面図） ……43
第29図　石人３実測図 ……44
第30図　石人４実測図 ……45
第31図　木柑子・高塚古墳出土遺物実測図 ……46
第32図　木柑子・高塚古墳出土遺物実測図 ……47

第33図　金属器実測図 ……48
第34図　奈良時代以降の遺構配置図 ……50
第35図　奈良時代Ⅰa・Ⅰb区，Ⅶb区溝遺構（６・７号） ……51
第36図　奈良時代以降の遺構　Ⅳａ・Ⅳｂ・Ⅳｃ，Ⅰｃ区遺構配置図 ……52
第37図　Ⅵ区遺構配置図 ……53
第38図　Ⅰa区　６号溝土層断面図 ……54
第39図　Ⅵ区　土坑実測図 ……55
第40図　墨書土器実測図 ……57
第41図　墨書土器実測図 ……58
第42図　墨書土器実測図 ……59
第43図　岩瀬・木柑子遺跡周辺遺構配置図 ……64
第44図　石製表飾出土分布図 ……66
第45図　各種石人 ……70

表　目　次

第１表　岩瀬・木柑子　周辺遺跡地名表 ……11
第２表　石製表飾の消長 ……65
第３表　石製表飾出土地名表（九州管内） ……67
第４表　人物形石製品の変遷 ……69
第５表　岩瀬・木柑子遺跡出土遺物観察表（１） ……74
第６表　岩瀬・木柑子遺跡出土遺物観察表（２） ……75

図版目次

図版１　上；木柑子高塚古墳周溝
　　下；石人１検出状況
図版２　石人２～４及び遺物出土状況
図版３　上；須恵器20出土状況
　　下；遺物出土状況（雲珠他）
図版４　石人１（正面・側面）
図版５　石人２（正面・側面）
図版６　石人３・４
図版７　上；１号埋甕
　　下；２号埋甕
図版８　包含層出土の縄文時代の遺物（１）
図版９　包含層出土の縄文時代の遺物（２）
図版10　包含層出土の縄文時代の遺物（３）
図版11　包含層出土の縄文時代の遺物（４）
図版12　包含層出土の縄文時代の遺物（５）
図版13　包含層出土の縄文時代の遺物（６）
図版14　包含層出土の縄文時代の遺物（７）
図版15　上；３号溝出土遺物
　　中；５号溝出土遺物
　　下；２号円形周溝（古墳Ｃ）出土遺物
図版16　２号円形周溝（古墳Ｃ）出土遺物
図版17　木柑子高塚古墳出土遺物
図版18　木柑子高塚古墳出土遺物
図版19　木柑子高塚古墳金属器
図版20　墨書土器他
図版21　墨書土器他
図版22　墨書土器他

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

事業の概要

平成７年度から、菊池市、菊池郡七城町において、花房中央地区県営ほ場整備事業が計画された。この事業は区画整理事業（整地工・道路工・用水路工・排水路工）と併せて行う事業（用水施設）及び農村生活環境整備事業（集落排水路）で、受益面積118haである。

予備調査

この事業の実施に先立ち、文化課では、遺跡台帳の照合、現地踏査を実施して、当地に埋蔵文化財包蔵地が存在する可能性が高いと判断した。そして、その結果を県農政部へ通知し、併せて試掘調査の実施を求めた。

試掘認調査の結果、広大な範囲において遺跡の存在が確認された。これを受けて遺跡保存の協議を重ね､やむを得ず掘削される部分について、平成９年2月より３月にかけて第１次の発掘調査を開始した。木柑子高塚古墳以外の調査はすべて８年度の調査である。平成９年度は、木柑子高塚古墳の調査を８月から開始し、９月末に調査を終了している。

調査の組織

[平成８年度現地調査]

調査責任者　桑山裕好（文化課長）　丸山秀人（教育審議員・課長補佐）

調査総括　　島津義昭（主幹・文化財調査第1係長）

調査担当　　江本　直（参事）　小谷圭太郎（嘱託）　河津　摂（嘱託）

[平成９年度現地調査]

調査責任者　豊田貞二（文化課長）　丸山秀人（教育審議員・課長補佐）

調査総括　　松本健郎（主幹・文化財調査第１係長）

調査担当　　古森政次（参事）　中村安宏（嘱託）

[平成11年度整理･報告書作成]

整理責任者　豊田貞二（首席教育審議員・文化課長）

整理総括　　島津義昭（課長補佐）　江本　直（主幹・文化財調査第2係長）

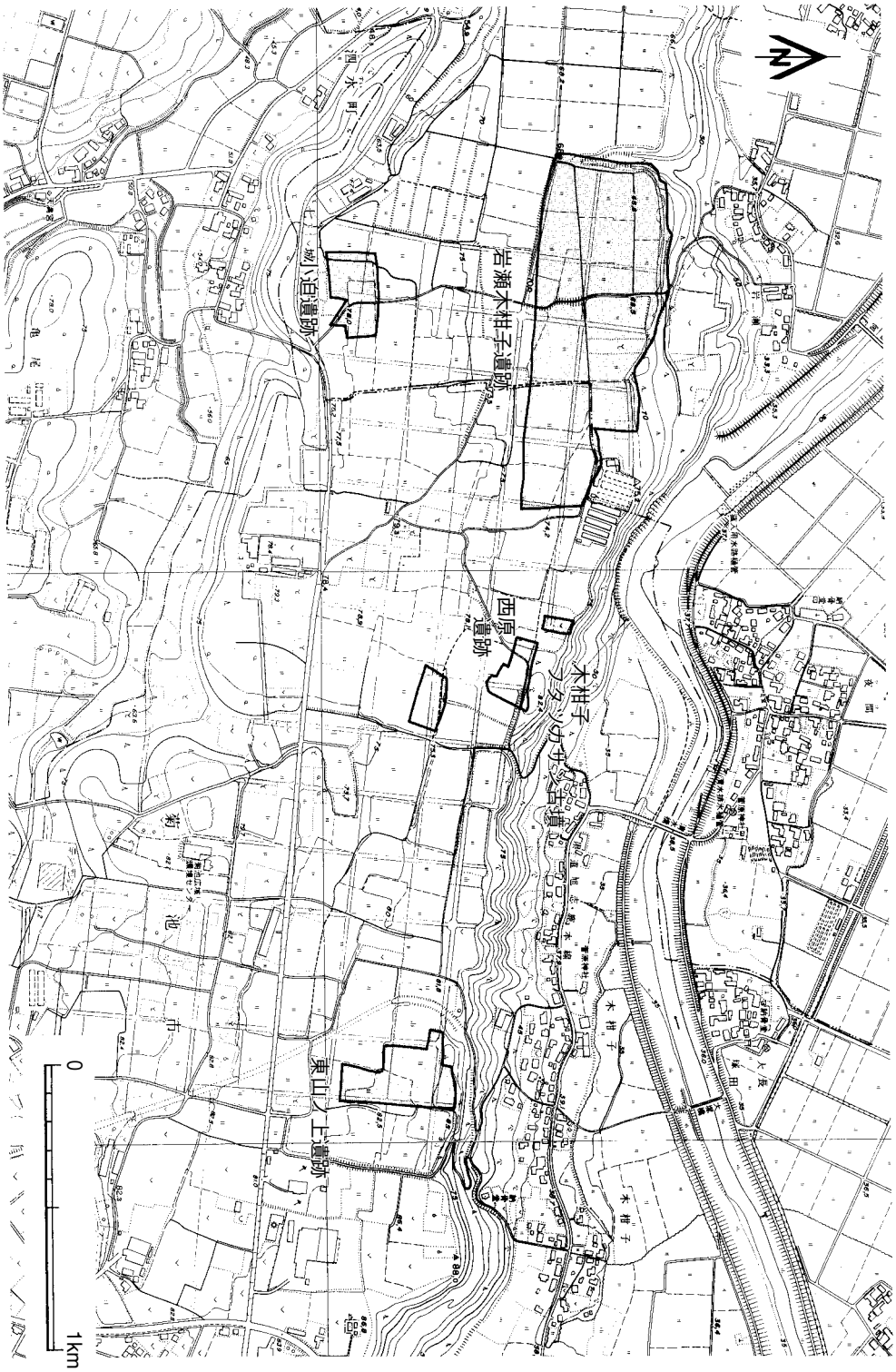
整理担当　古森政次（参事）　林　ゆり（嘱託)、古閑満代、甲斐正子（臨時）

[専門調査員]

小田富士雄〔福岡大学〕

調査指導及び協力者（順不同)

坪井清足（大阪府文化財調査研究センター)、森　浩一（同志社大学)、甲元眞之・木下尚子、小畑弘己、杉井健（熊本大学)、白木原和美（熊本大学名誉教授)、柳沢一男（宮崎大学）平川　南（国立歴史俗博物館)、板楠和子（九州ルーテル大学)、小山田宏一（大阪府立狭山池資料館)、広瀬和雄（奈良女子大学)、澤田昭一（奈良文化財研究所)、高木恭二、藤本貴仁（宇土市教育委員会)、中原幹彦（植木町教育委員会)、林田和人、美濃口雅朗、網田龍生（熊本市教育委員会)、竹田宏司（玉名市教育委員会)、阿南亨（菊池市教育委員会)、今田治代（竜北町教育委員会)、中村安宏（天水町教育委員会)、西健一郎（九州大学)、蔵富士寛（福岡市教育委員会)、木村龍生（熊本大学学生)、菊池事務所菊池台地推進室、七城町教育委員会、菊池市教育委員会



第１図　岩瀬・木柑子遺跡周辺地形図

第２節　調査の方法と経過

調査の方法

設計変更等協議の結果、やむを得ず削平される部分を調査の対象地とした。その結果、主な調査の対象となった個所は、水路工部分・道路工部分であり、整地工でやむを得ず削平される個所は、調査Ⅵ区のわずか3,900㎡であった。遺跡の総面積約18haの中で、調査面積をこれほど絞り込めたのは、平成８年度当時度重なる農政部との協議があったことは想像に難くない。

調査区の設定は、まず任意に西から順にⅠ地区～Ⅶ地区に大きく区分けをした。調査対象となる水路・道路の幅は、約３～４ｍ程度であり、調査杭の設定は、水路工・道路工事用の既存杭を利用して行った。この杭の区画は10ｍである。（第４図）。

このようにして設定した区画を基本として調査を実施した。調査の手順と方法は、以下のとおりである。

まず、重機による表土除去を行い、清掃の後、遺構の検出と遺物の検出を中心に実施した。

埋設土器遺構、各時代の溝遺構は、平面形の確認を行った後に、土層観察のため土手を残し掘り下げた。

柱穴遺構は、平面形の確認を行った後に、約５㎝程度掘り下げ柱痕を確認した。その後半裁し、土層堆積状況の記録を行った。その記録の後、残りを掘り下げ、全体像を確認する。この作業の途中で、検出された柱穴群から建物の復元が可能であるかの検討を行った。

なお、平成８年度においては、遺構配置図、溝平面図は１/100、溝土層図、埋設土器実測図、土坑実測図は１/20～１/10に縮尺して作成している。また遺物の取り上げは、１/100～１/20などに縮小して作成している。

９年度木柑子高塚古墳の調査では、全体の遺構配置図が１/40、土層図が１/20～１/10、それ以外の平面図・断面図及び遺物の取り上げは1/10の縮尺で作成している。

調査の経過

平成８年度の調査経過については、残念ながら詳細は不明であるので、９年度の木柑子高塚古墳の調査経過について記述する。

1997（平成9年）

〔8月〕

調査を開始したのは、下旬の25日からである。調査個所はⅥ区の北端約100㎡である。他の調査区については、平成9年3月までに終了し、Ⅵ区の北端部分のみが調査未了となっていた。草刈後、遺構面の清掃を実施し、古墳周溝の輪郭を検出する。8月末までに、古墳周溝の上層部分の掘削が終了する。

また木柑子高塚古墳に隣接して、もう一基古墳の周溝が確認されているが、そのことに関連して次のような記述が見える。

「前年度の調査時点で、木柑子高塚古墳と隣接する古墳の新旧関係を、木柑子高塚古墳が新しいとの見解であったが、即断できない状況である。と言うのは、木柑子高塚古墳周溝上部には、黒色土が50cm程堆積している。この黒色土の中に新しい道路状遺構があり、そのため両方の古墳周溝を破壊しているからである。」

〔9月〕

周溝下層部分の掘削を開始する。9月4日に、石人らしい凝灰岩製の石製品を検出している。これが石人４にあたるようである。また10日には、石人１が出土している。その時の日誌には、野仏が出土したと記されている。また古墳時代の石人であったものを、再加工した可能性もあるとも記されている。また中旬に、石

人２・３の取り上げが行われている。その時の感想を、「思い描いていた石人とは異なる。よほど野仏（石人１）の方が従来の石人に近い」と記してある。
下旬には、周溝掘削も完了し、実測を中心とした作業を行っている。29日に福岡大学の小田富士雄先生に専門調査員として来ていただいている。

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

菊池川は熊本県北部の阿蘇外輪山に源を発し、７つの支流が集まり有明海へ流れる一級河川である。流域は３市16町２村にまたがる。この菊池川流域は阿蘇山の大爆発で形成された阿蘇熔結凝灰岩（火砕流堆積物）が菊池川に浸食されて生まれた盆地平野であり、広大な平野を形成する。この菊池川流域をのぞむ台地上や崖面には、古墳時代に多くの古墳や横穴塞が造られ、九州でも有数の古墳集中地である。

岩瀬・木柑子遺跡は、菊池川のほぼ中流域、菊池市及び菊池郡七城町にまたがって所在する。阿蘇外輪山西麓から西方に発達した広大な菊池台地の一角、通称花房台地と呼ばれる段丘上にあり、菊池川を北に望む。標高は70m程度である。この台地は火山灰土壌のため透水性が強く、雨水は地下に浸透し地表の流水がほとんどみられないため起伏の少ない傾斜の緩やかな地形を形成している。

第２節　歴史的環境

岩瀬・木柑子遺跡が立地する菊池平野に分布する遺跡について概観してみたい。

縄文時代

菊池平野では、縄文時代後期・晩期の遺跡が数多く見受けられる。縄文時代後期・晩期を代表する三万田東原遺跡・天城遺跡や大久保遺跡、昨年度から七城町教育委員会で調査が行われている小野崎遺跡などがある。小野崎遺跡では、後期・晩期の土器片や土偶が多数包含層より出土し、埋甕が検出された。また岩瀬・木柑子遺跡からも縄文時代後期・晩期の土器が多数出土し、埋甕が出土している。

弥生時代

弥生時代は前期から後期まで、ほぼまんべんなく遺跡が存在するが、特に弥生時代後期になると、うてな遺跡や小野崎遺跡など大規模な遺跡が出現する。

菊池川右岸のうてな台地に岡田遺跡・うてな遺跡が挙げられる。岡田遺跡では、弥生時代前期の甕棺墓群が検出されている。岡田遺跡の近くには、支石墓の上石と思われるものが露出している。またうてな遺跡では、弥生時代後期を中心として、環濠や住居跡などが検出されている。

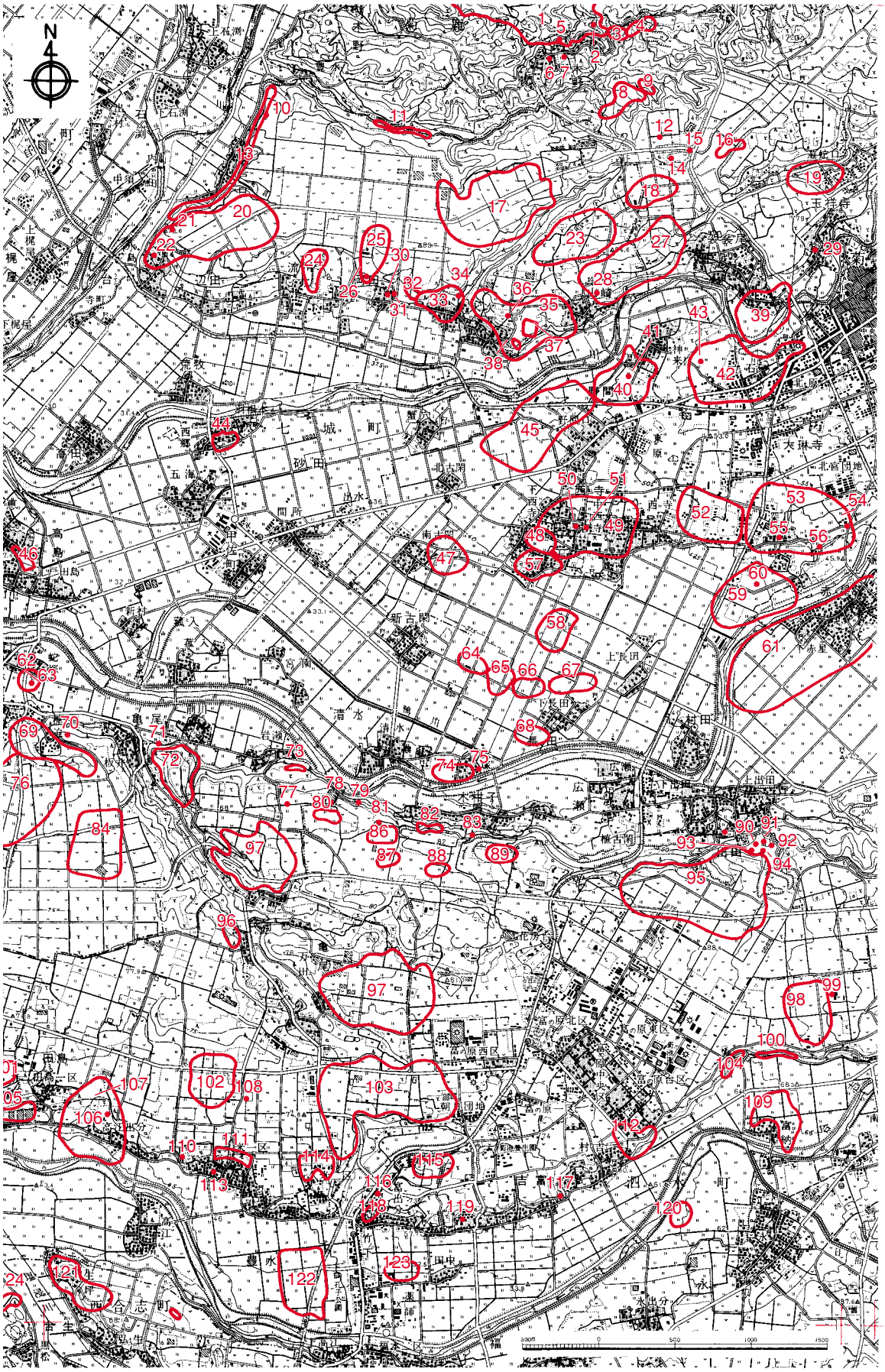
一方菊池川左岸には、前出の小野崎遺跡が存在する。小野崎遺跡は、弥生時代後期の大集落でもあり、土壙墓や木棺墓などが集中し、墓域と考えられる地域や溝が調査されている。幾重にも溝が巡る環濠集落と考えられ、溝からは多量の弥生土器以外にも鉄製釣針が、また墓域では、後漢鏡や小形坊製鏡など併せて５枚の鏡や玉類が、また古墳時代の可能性もあるが、方形周溝墓からは剣等が出土している。この地域の拠点集落である。なお、岩瀬・木柑子遺跡においては弥生時代に属する遺構・遺物は確認されていない。

古墳時代

従来まで、この地域の古墳時代は、菊池川流域の中ではやや見劣りがするような印象があった。今回の木柑子高塚古墳の発見で、前方後円墳は蛇塚古墳、木柑子フタツカサン古墳とあわせて３基となった。

右岸のうてな台地の東部には、袈裟尾丸山古墳・袈裟尾茶臼塚古墳・袈高塚古墳の３基がまとまって存在している。台地の西端部には、うてな古墳・瀬戸口横穴墓群・北上原古墳・豊水横穴墓群がある。この中で特に注目されるのは、袈裟尾高塚古墳と瀬戸口横穴墓群である。袈裟尾高塚古墳は複室構造の横穴式石室で、石屋形奥壁に靭・二角又の装飾が施されている。まぐさ石として使用している石材に、靫の浮彫がある。また瀬戸口横穴墓群は、台地西端部の凝灰岩の露頭に築造されている。正確な基数は不明であるが、300基を越えると思われ、県下最大級の横穴墓群である。

一方菊池川左岸では、花房台地上に木柑子高塚古墳、木柑子フタツカサン古墳などの前方後円墳を中心とし


N
七城町
玉祥寺
西寺
斯吉門
上長田
下長田
清水
広瀬
富の原西区
富の原東区
富の原北区
富の原中区
富の原南区
豊水
田中
西台志町
五海
砂田
高島
亀尾
上梶屋
下梶屋
荒敷
辺田
流
蟹
野間
東原
北原
北大門
南大門
間戸
迫水
上田
村田
水出分
500m
0
500
1000
1500

第２図　周辺遺跡分布図

岩瀬・木柑子　周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地	時代	No.	遺跡名	所在地	時代
1	鞠智城跡	菊鹿町　米原　長者原	古代	65	狐塚	菊池市　長田　（狐塚）	古墳
2	鞠智城深迫門礎石	菊池市　〃　長者原	中世	66	長田	〃　〃　中久保	弥生
3	樋画之口	〃　〃	縄文～中世	67	長田狐塚	〃　〃　狐塚	弥生
4	山田横穴群	〃　〃	古墳	68	外園	〃　〃　（通称外園）	弥生
5	鞠智城堀切門礎石	〃　〃　長者原	中世	69	長明寺坂古墳群	七城町　林原　井出平 他	古墳
6	鞠智城木野神社礎石	〃　〃　長者原	中世	70	梶迫古墳	〃　亀尾	古墳
7	堀切の長者の的石	〃　木野　（通称堀切）	古代	71	亀尾横穴	〃　〃　山の上	古墳
8	大井樋横穴群	〃　〃	古墳	72	亀尾城跡	〃　〃　城平	中世
9	大井樋谷横穴群	〃　〃	古墳	73	岩瀬横穴群	〃　〃　岩瀬	古墳
10	北上原古墳	七城町　瀬戸口	古墳	74	大塚	菊池市　長田　（通称大塚）	弥生～古代
11	ヒジユウ谷横穴群	〃　岡田　谷	古墳	75	大塚古墳	〃　〃　通称大塚）	古墳
12	丸山古墳	菊池市　袈裟尾　丸山	古墳	76	梶尾原	七城町　清泉　（通称宮ノ上）	縄文
13	瀬戸口横穴群	七城町　瀬戸口　下原	古墳	77	岩瀬チョウ塚古墳	〃　亀尾　岩瀬	古墳
14	茶臼塚古墳	菊池市　袈裟尾　茶臼塚	古墳	78	木柑子高塚古墳	菊池市　木柑子	古墳
15	袈裟尾高塚古墳	〃　〃　高塚	古墳	79	木柑子船形石棺	〃　〃	古墳
16	堀切横穴群	〃	古墳	80	下原	〃　〃	縄文
17	水次一本松	七城町　水次　一本松	縄文	81	木柑子フタツカ古墳	〃　〃　下向原	古墳
18	西村上	菊池市　袈裟尾　西村上	縄文	82	木柑子横穴群	〃　〃　下向原	古墳
19	玉祥寺	〃　玉祥寺	弥生	83	東浦田平横穴	〃　〃　東浦田平	古墳
20	台（うてな）	七城町　台　臺	古墳	84	上鶴頭	七城町　小野崎　上鶴頭	平安
21	台（うてな）古墳	〃　〃　臺	古墳	85	亀尾原	〃　亀尾　西上原	縄文
22	台（うてな）城跡	〃　〃　城之上	中世	86	西ノ平	菊池市　木柑子	縄文・弥生
23	山崎	〃　山崎　屋敷	縄文	87	西原Ａ	〃　〃	古墳
24	流川	〃　流川	縄文～中世	88	西原Ｂ	〃　〃	古代
25	岡田	〃　岡田	縄文～中世	89	東山ノ上	〃　〃	古代
26	岡田支石墓	〃　〃	弥生	90	鬼石古墳	〃　出田　東屋敷	古墳
27	竹ノ上原	菊池市　袈裟尾　竹ノ上原	古代	91	古池城跡	〃　〃	中世
28	山崎古墳	七城町　山崎屋敷	古墳	92	亀の甲古墳	〃　〃　亀の甲	古墳
29	玉祥寺の梵鐘	菊池市　玉祥寺	中世	93	堂坂横穴群	〃　〃　東屋敷	古墳
30	菊池兼朝の墓	七城町　岡田宅地	中世	94	古池城跡古墳	〃　〃　東屋敷	古墳
31	岡田の無縫塔	〃　〃　宅地	中世	95	医者どん坂	〃　〃　西鶴 他	縄文・弥生
32	軽石坂横穴群	〃　〃　宅地	古墳	96	油屋長者屋敷跡	泗水町　亀谷　中出	古代・中世
33	西ノ平	〃　水次　西ノ平	縄文～古墳	97	三万田東原	〃　〃　東原	縄文
34	ハヤマ塚古墳	〃　〃	古墳	98	下峯	〃　住吉　狐塚	弥生
35	水次	〃　〃　久保ノ上	古墳	99	狐塚古墳	〃　〃　狐塚	古墳
36	十連寺古墳	〃　〃　久保ノ上	古墳	100	硯町横穴群	〃　〃　硯町	古墳
37	十連寺跡	〃　〃　久保ノ上	奈良・平安	101	田島廃寺跡	〃　田島　坂口	古代
38	神尾城跡	〃　〃　屋敷	中世	102	久米古戦場跡	〃　豊水　東宅地	中世
39	袈裟尾	菊池市　袈裟尾	弥生	103	古閑原	〃　吉富　古閑原 他	弥生
40	神来	〃　大琳寺	古代	104	今寺横穴群	〃　富納　野添	古墳
41	神来古墳	〃　野間口　神来	古墳	105	陣塚	〃　田島　陣塚	古代
42	立石	〃　隈府　（通称立石）	弥生	106	高江出分	〃　豊水	古墳
43	神来支石墓	〃　野間口　神来	弥生	107	高江出分塚山古墳	〃　〃　東原	古墳
44	西郷城跡	七城町　砂田　宮ノ前	中世	108	久米城跡	〃　〃　高請	中世
45	車町	菊池市　野間口　車町	弥生	109	富納	〃　富納　居屋敷	弥生
46	加恵城跡	七城町　加恵　鳥居木	中世	110	久米若宮古墳	〃　豊水　西宅地	古墳
47	南古閑	菊池市　西寺　南古閑屋敷	弥生	111	安国寺跡	〃　〃	古代・中世
48	西寺郡家及土畳跡	〃　〃　（通称高田）	古代・中世	112	村吉	〃　吉富　高畠	古代
49	西寺	〃　〃　通称高田）	古代・中世	113	菊池政隆墓所	〃　豊水　東宅地	中世
50	無量山西福寺跡	〃　〃	中世	114	吉富古閑原Ｂ	〃　吉富　古閑原	縄文～古代
51	赤星有隆の墓	〃　〃　水町	中世	115	牛畑	〃　〃　坂上	古墳
52	深川	〃　深川　諏訪原	縄文～古墳	116	富出分古墳	〃　〃　（通称宝町）	古墳
53	菊の池	〃　〃　菊の池	弥生	117	村吉古墳	〃　〃　西宅地	古墳
54	菊の城跡	〃　北宮　城ノ堀	弥生～中世	118	富出分カブト石	〃　〃　北原	古代
55	深川城	〃　〃　城の堀	中世	119	竹迫手永福本会所跡	〃　福本　西宅地	近世
56	菊の池跡	〃　深川	中世	120	鬼木製鉄跡	〃　永　樋掛	古代・中世
57	南園	〃　西寺南園	古代・中世	121	生坪古墳群	西合志町　合生	古墳
58	西寺辻	〃　〃　辻屋敷他	弥生	121	生坪塚山古墳	〃　〃　漆崎	古墳
59	深川古屋敷	〃　深川　古池	弥生	121	生坪立石古墳	〃　〃　立石	古墳
60	深川古墳	〃　〃　玉米	古墳	121	生坪古墳	〃　〃	古墳
61	赤星	〃　赤星　宮ノ前	古墳	122	麦田	泗水町　豊水　麦田	縄文・古墳
62	蛇塚城跡	七城町　亀尾　下梶迫鶴	中世	123	平町	〃　吉富　平町	古墳～中世
63	蛇塚古墳	〃　〃　下梶迫鶴	古墳	124	塚口横穴群	西合志町　合生　塚口	古墳
64	水町	菊池市　西寺　水町	古墳	125	八反原	〃　〃　弘生	弥生・古墳

て、方形周溝墓・円墳や横穴墓群などが存在する。またそれから少し下流に行くと、やはり前方後円墳で円筒埴輪を持つ七城町の蛇塚古墳があり、初期横穴式石室である長明寺坂古墳群（県指定史跡・円墳・３基）も存在する。また前出の小野崎遺跡では、昭和40年代の構造改善事業で石製表飾が出土している。その他に石製表飾は、木柑子フタツカサン古墳で石人と衣笠２、木柑子高塚古墳で石人４体が出土している。

奈良時代以降

七城町の上鶴頭遺跡は平安時代の官衙跡と推定されており、多量の墨書土器が出土している。岩瀬・木柑子遺跡においても、竈付住居跡が検出され、相当量の墨書土器が出土している。また本遺跡から南へ約300mほどの地点は七城町教育委員会により平成10年に調査が行われており、やはり竈付き竪穴式住居跡や掘建柱建物跡が検出され、また多量の墨書土器が出土している。岩瀬・木柑子遺跡と一連の遺跡であろう。

その他距離的には少し離れるが、岩瀬・木柑子遺跡の北約６kmの地点に鞠智城が存在する。

第３節　基本土層

今回発掘調査を実施した岩瀬・木柑子遺跡では、第Ⅱ・Ⅲ層を遺物包含層として７枚の土層が確認された。

以下、各層ごとに説明を行う〔第３図〕。

第Ⅰ層　表土層（耕作土）

第Ⅱ層　暗茶褐色土層

この層は、粒子は細かく、サラサラとしている。縄文時代の遺物や古代の遺物を包含する。層厚は、10～15cmである。所によっては、耕作等によって削平されている。

第Ⅲ層　暗黄褐色土層

粒子は細かく固くしまる。やや暗く濁った色調を呈するが、アカホヤ火山灰の土壌化した土層であると考えられる。古墳時代等の遺構検出面であり、縄文時代後・晩期に属する遺物を中心として多量に包含する。層厚は、25～30cmである。

第Ⅳ層　黒色土層

上層に比べて粒子が細かく、やや粘性を帯びる。層厚は、15～20cmである。

第Ⅴ層　暗褐色土層

固くしまった層である。このⅤ層から次のⅥ層までを当地域では苦土と呼ばれている。層厚は、30～40cmである。

第Ⅵ層　暗褐色土層

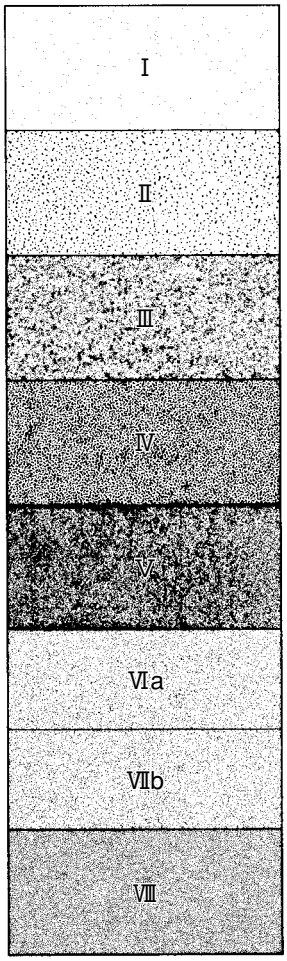
苦土であり、土質等により2枚に分層できる。

第Ⅵａ層は、固くしまりガチガチとした土質を示す。細かな白斑粒子を多量に含む。姶良Ｔｎ火山灰包含層である可能性が指摘できる。層厚は40cm程である。

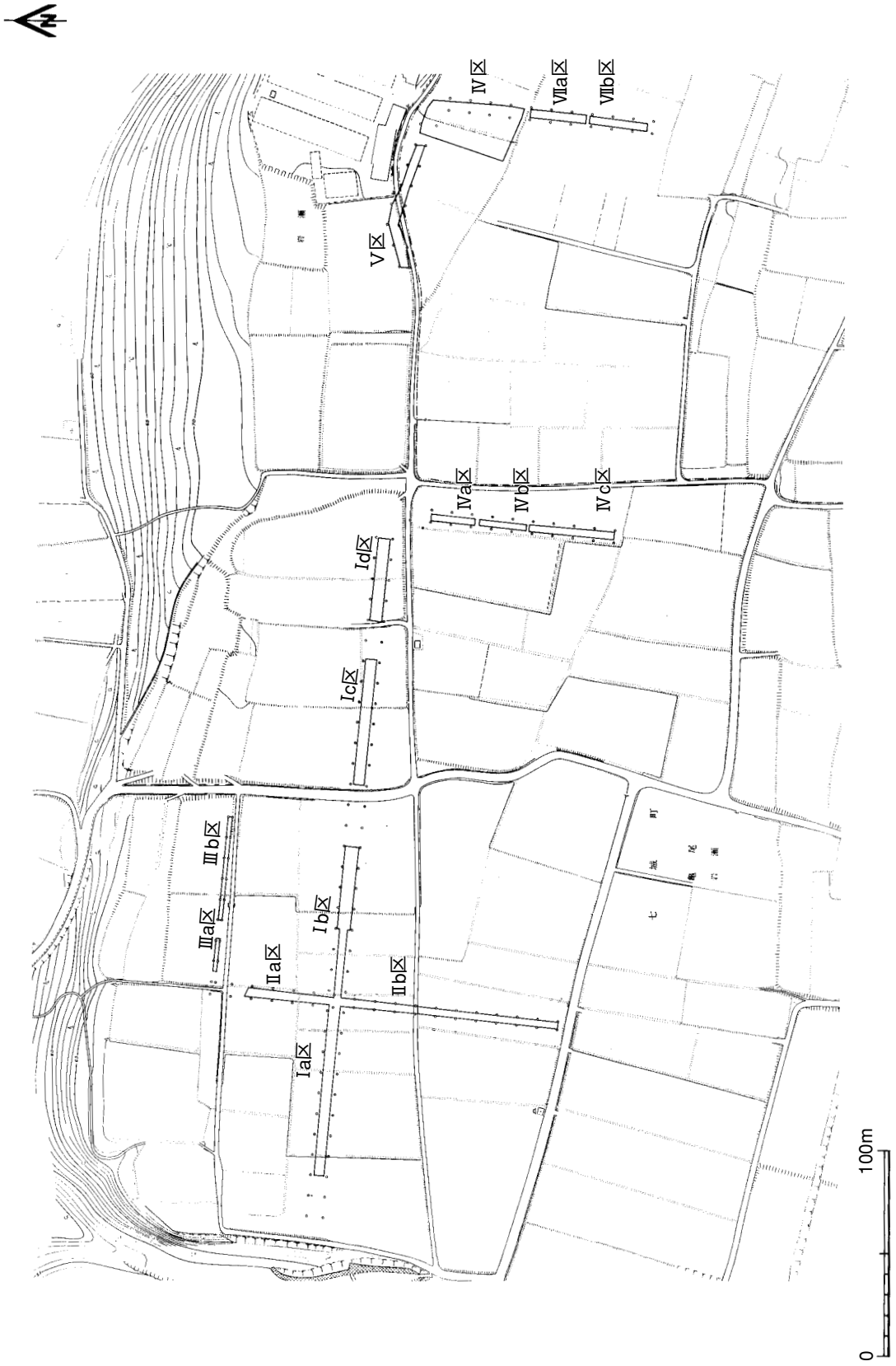
第Ⅵｂ層も、呈し固くしまりガチガチとした土質を示す。細かい白斑粒子を含む。層厚は、40～50cmである。

第Ⅶ層　黄褐色粘質土

粒子が細かく粘性が強い。



第３図　基本土層図



第 4 図　岩瀬・木柑子遺跡　調査区配置図

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　縄文時代の遺構と遺物

１　遺構とその位置

縄文時代後期から晩期にかけての遺構として、確実なものは埋甕のみである。

① 埋甕の分布と検出状況（第５図）

２基の埋甕が確認されている。遺跡の北西側、調査区Ⅰb区とⅡa区で検出されている。Ⅰb区の１号埋設土器周辺には縄文時代晩期の土器や石器が多く分布している。一方Ⅱa区の２号埋甕に隣接する個所には、古墳時代や古代の溝遺構があるためか、縄文時代の遺物はほとんど見られない。また埋甕の掘り込みの確認は困難で、わずかな土色の違い及び土の硬さを判断基準としている。

１号埋甕（第６・７図）

Ⅰb区のほぼ中央付近より検出した。深鉢形土器で底部部分を欠損する。掘り込みは現況で径約90cmの円形を呈す。深さは約30cmを測る。土器は西方向に傾斜した状態で検出しており、斜めに掘っているものと考えられる。また人頭大の石を蓋代わりに載せていたようである。

口縁部から胴部にかけて残存し、底部を欠損する深鉢形土器である。口縁部は直立し、口縁帯に２条の沈線をもつ。頸部の湾曲は弱く、口縁部直下に屈曲点がある。また頸部と胴部の境には明瞭な段や張り出しは認めらなくて、１条の浅い沈線を施す。またその境界に最大径をもつ。底部を欠損するが、意識的に穿孔したものかどうかは不明である。

２号埋甕（第６・８図）

Ⅱa区の南よりで出土した。深鉢形土器で底部を欠損するが、残存状況は比較的良い。掘り込みは現況で径100cm前後の円形を呈し、深さも約100cmを測る。埋土は暗褐色土である。

口縁部から胴部にかけて残存し、底部を欠損する大型の深鉢形土器である。口縁部は外に傾き、口縁帯には沈線を施さない。１号埋甕に比べ頸部は湾曲し、口縁部直下に屈曲点がある。また頸部と胴部の境には明瞭な段や張り出しは認めらなくて、稜線となる。またその境界に最大径をもつ。外器面、内器面ともよく研磨されている。１号埋甕同様、底部を欠損するが、意識的に穿孔したものかどうかは不明である。

２　包含層出土の遺物

① 遺物の分布（第５図・図版８～14）

前述のⅠ区以外にもⅥ区及びⅦ区にも縄文時代の遺物が集中して見られるが、その時期は縄文時代後期である。

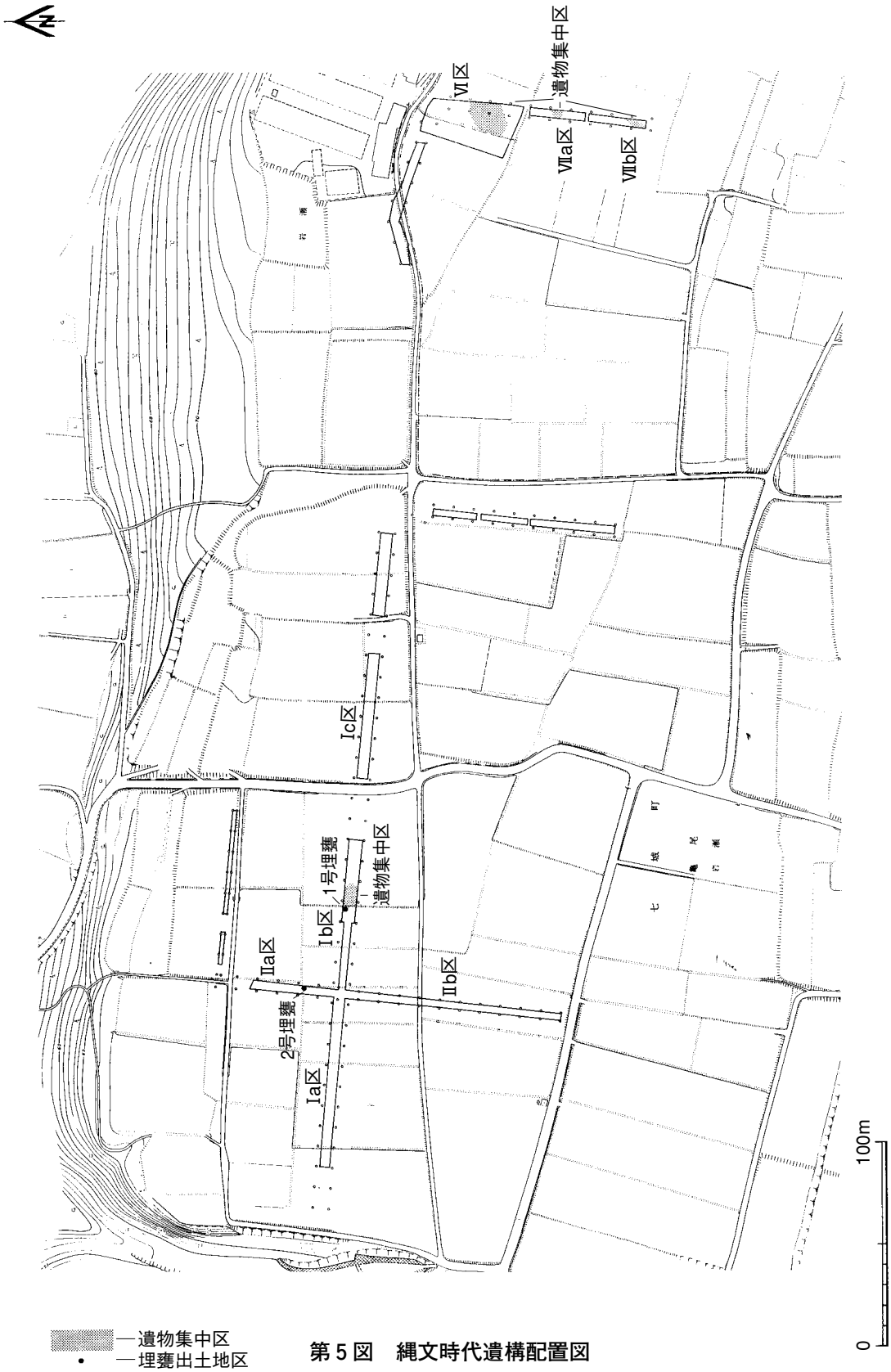
Ⅵ・Ⅶ区の土器は、口縁部の形態的特徴には、波状をなすものやそうでないものがみられる。前者には波状口縁の頂部に原体によるＶ字状の押圧が施され、口縁部に平行して２条の沈線文を施すものが認められる。文様構成では、縄文、平行沈線文、平行沈線文＋浮文、平行沈線文＋細線羽状文、平行沈線文＋磨消縄文＋鋸歯状沈線文等バリエイションが認められる。縄文時代後期を主体とする。一方、Ⅰ区は、埋設土器類似の縄文時代晩期を中心とした土器が主体をなしている。その他打製石斧等の石器類も多数出土している。また岩偶と思われるものも出土している。(図版14)

今回時間の制約上遺物実測が出来ず、写真図版のみの掲載である。

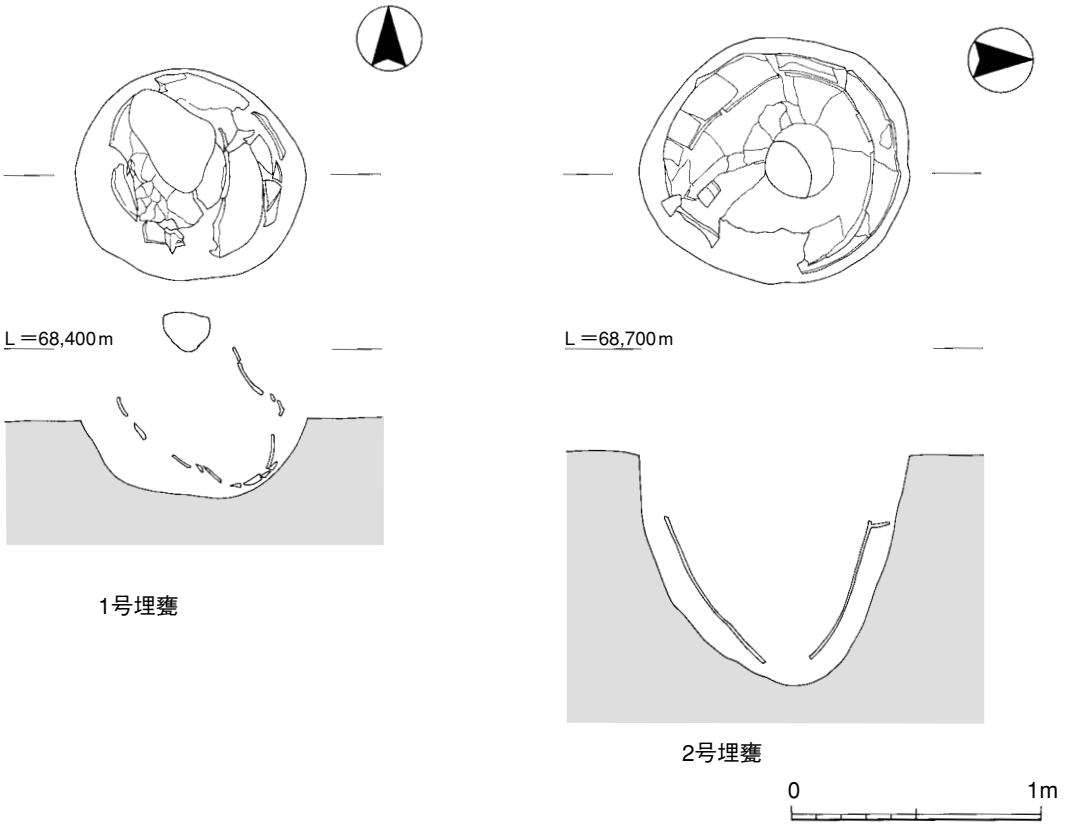
３　まとめ

遺構自体は､埋甕２基のみであるが、縄文時代後期・晩期を中心とした土器・石器が多数出土している。

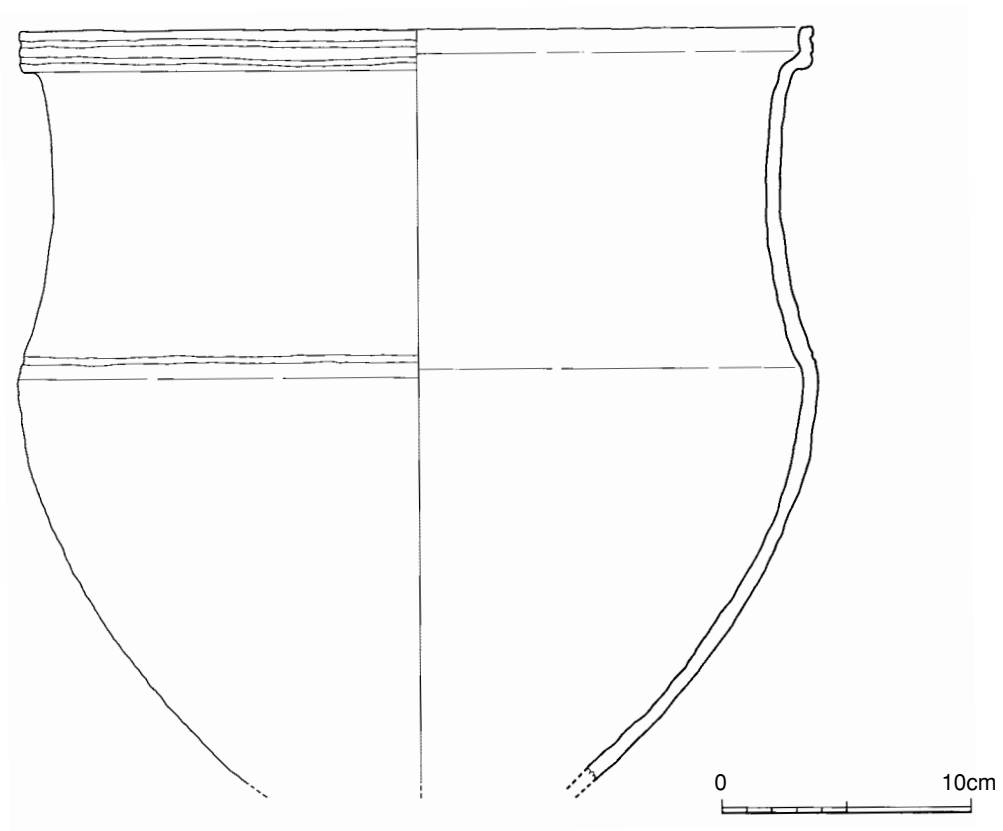
またその地点には、焼土も認められていたようである。しかしながら、古墳時代・奈良・平安時代の遺物も出土することから、その焼土がどの時代に属するかは不明であるが、縄文時代の住居跡があった可能性があるし、少なくともその周辺に縄文時代後期・晩期の集落があったことは間違いない。



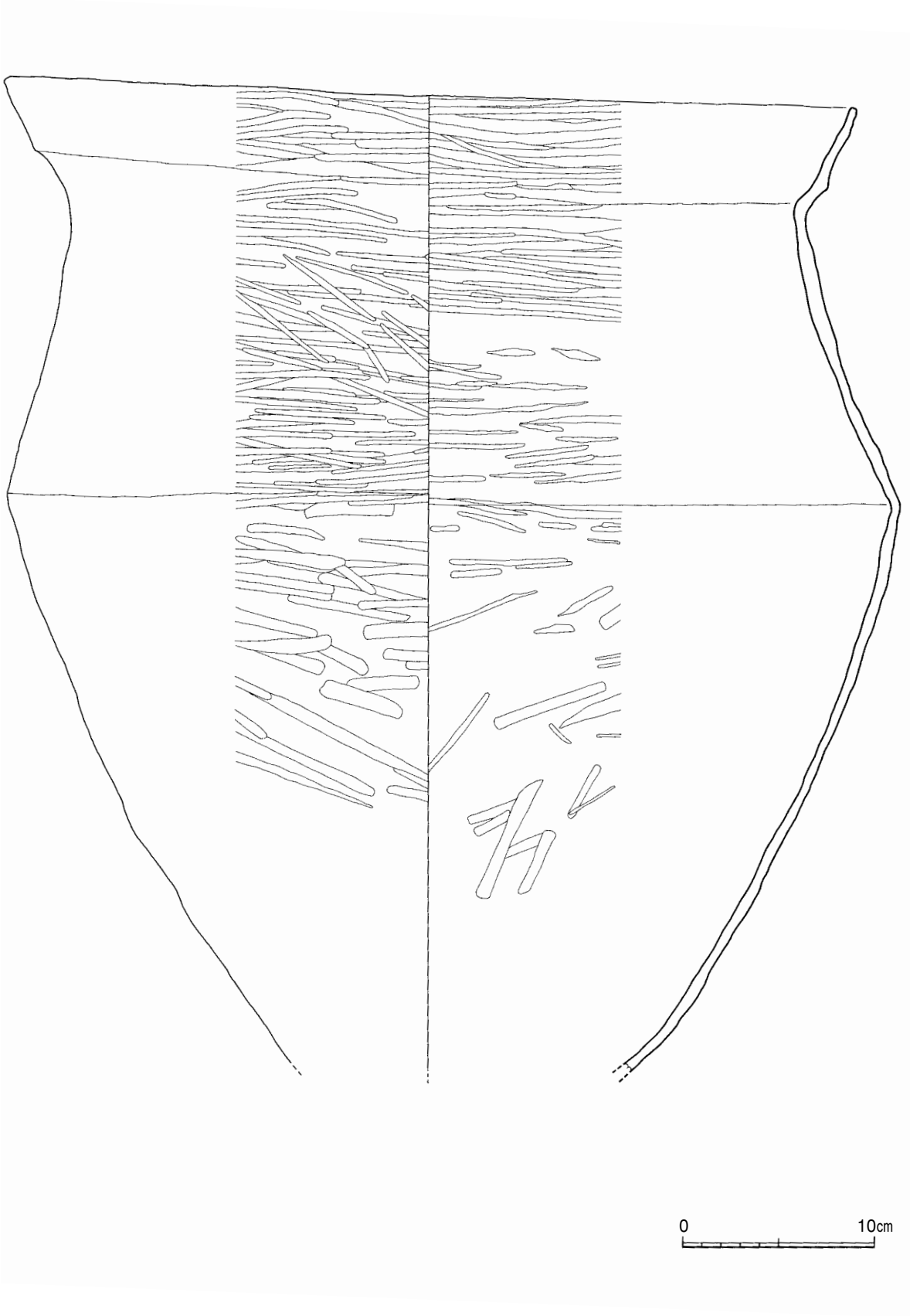
第５図　縄文時代遺構配置図



第６図　埋甕出土状況実測図



第７図　１号埋甕実測図



第８図　２号埋甕実測図

第2節 古墳時代の遺構と遺物

Ⅰ　平成８年度の調査

１　はじめに

平成８年度の調査で、７本の溝が確認されている。出土した遺物より、そのうちの５本は古墳時代のものと思われる。調査区の多くが道路幅、水路幅部分のみの調査のため、周溝のごく一部を調査したに過ぎず、その全体形状については不明である。そのため個々の溝について、１号から５号までの番号を振った。また調査Ⅵ区に所在する２基の円形周溝遺構についても、平面形は円形であるが、墳丘の有無については不明であるため、１号円形周溝。２号円形周溝と呼称する。

また木柑子高塚古墳を除いた全ての調査は平成８年度に実施されている。その時、既に木柑子高塚古墳の周溝の調査にも一部着手している。ただ古墳の周溝と言う認識は無かったようで、溝状遺構と呼称されている。また調査期間の制約のためか、上層をわずかに掘削する程度であった。

２　溝遺構（第10図）

①　１号溝（第10図）

遺構配置図で計測すると、１号溝は遺構検出面で幅６ｍ程度を計るが、詳細は不明である。

②　２号溝（第10・11図）

２号溝はその断面形は、緩やかな逆台形状を呈す。遺構検出面はⅢ層である。検出面での溝の幅は4.8～6.2ｍを測る。深さは約1.5ｍで、溝底の幅は2.5ｍ程度である。東側の埋土の断面を観察した結果、溝の埋土は、４層に分けられる。上層から順に１～４層とする。１層は、暗茶渇色土層で、30cm程度である。２層は、黒色土層で、１層より硬くしまる。厚さ５～30cm程である。3層は、赤土混じりの暗褐色土層で、北側には堆積が見られない。厚さは５～15ｃｍ程度である。４層も暗褐色土層であるが、３層に比べより暗い。厚さ約60cmである。この層より土器が１点出土している。

石材について

少破片となってしまい、厚さ３cm程度で､大きさが20cm前後となっている石材片が多数出土している。本来は、ある程度の大きさを持った、板石だったと推定される。正確な出土場所が特定できないのは残念であるが、１号溝・２号溝周辺らしい。片面には赤色顔料が塗られている。石材は安山岩である。恐らく埋葬施設に使用されていた石材であることは､間違いないだろうが、石材や赤色顔料を平坦面に塗ることから、箱形石棺若しくは、横穴式石室の石障、石屋形の部分などに使用されていた可能性が高い。

③　３号溝（第10・11図）

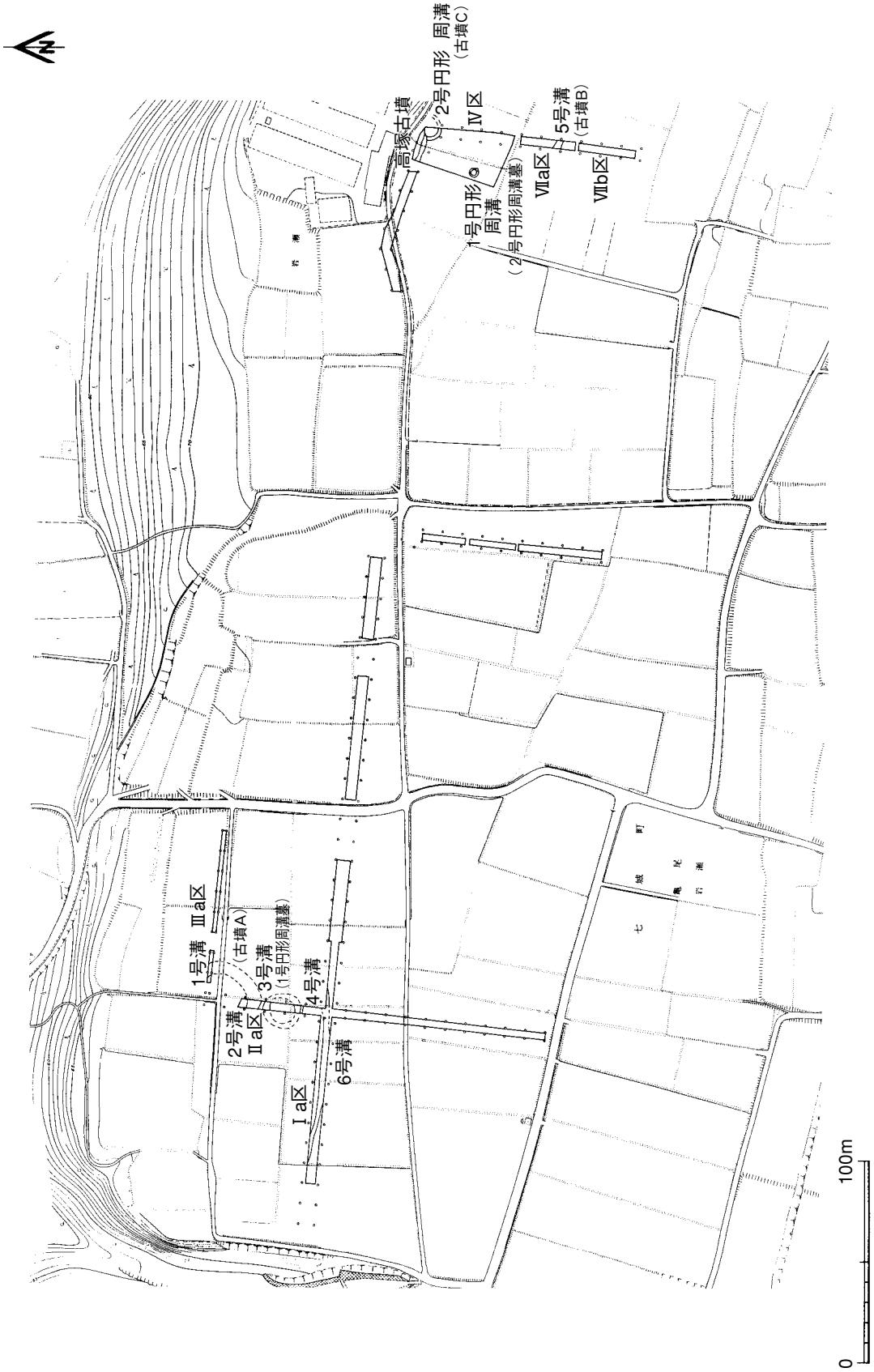
３号溝はその断面形は逆台形状を呈す。遺構検出面はⅢ層である。検出面での溝の幅は3.２ｍ程度である。深さは、1.3ｍ程で、溝底の幅は1.2ｍ程度で、南に向かい傾斜している。東側壁の埋土の断面を観察した結果、溝の埋土は、４層に分けられるが、中央部を現代の貯蔵穴により破壊されている。上層から順に１～４層とする。１層は、暗茶渇色土層で、30cm程度である。２層は、黒色土層で、赤土粒が混じる。厚さは30cm程である。３層も、２層と同じく黒色度であるが、不純物をあまり含まない。厚さは30cm程である。４層も茶褐色土層であるが、ローム層の粒が混じる。厚さ５～約40cmである。

３号溝出土の遺物（第12図）

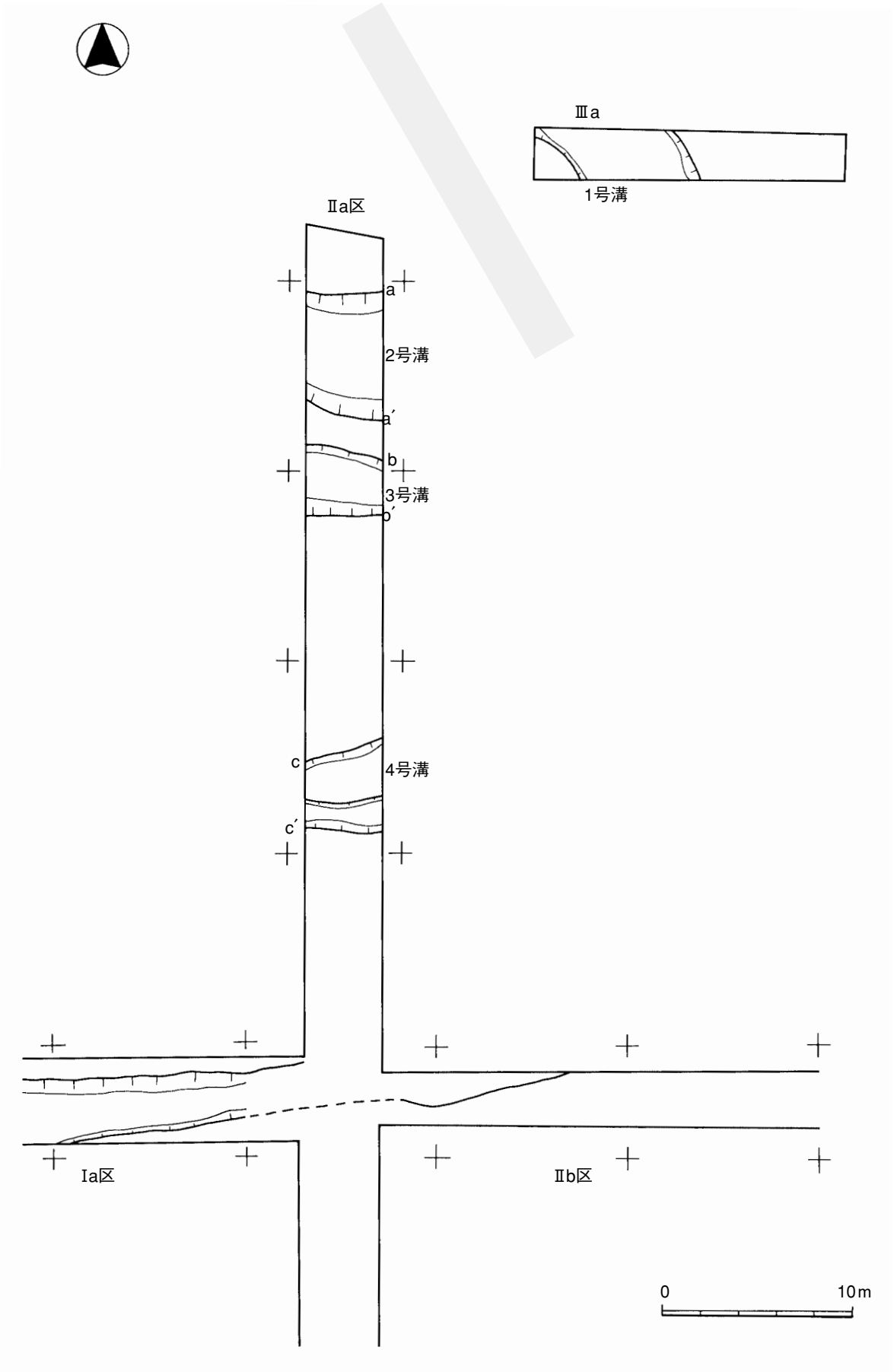
土師器の二重口縁壺である。口縁部を欠損するもののほぼ完全な形である。胴部は球形で、底部がわずかに尖り気味になる。外器面は刷毛目調整、内面はヘラケズリを施している。またかなり器壁が薄い。

④ ４号溝（第10・11図）

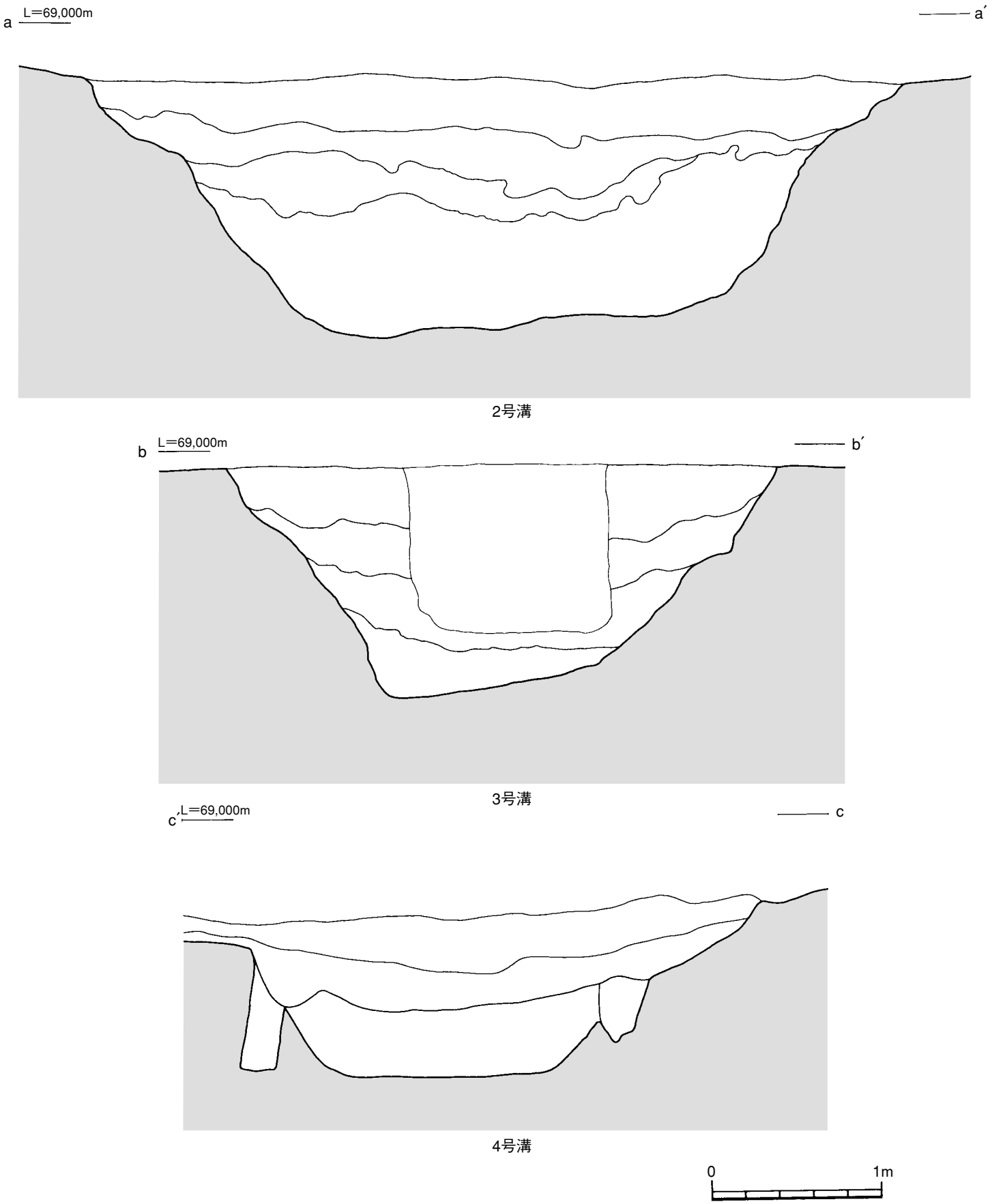
遺構配置図では、ここに掲載した実測図の南側（C′側）まで溝は続くようであるが、１/10の大きさで、今



第９図　古墳時代遺構配置図



第10図　Ⅱa区・Ⅲa区溝配置図（１～４号溝）



第11図　2－4号溝土層断面図

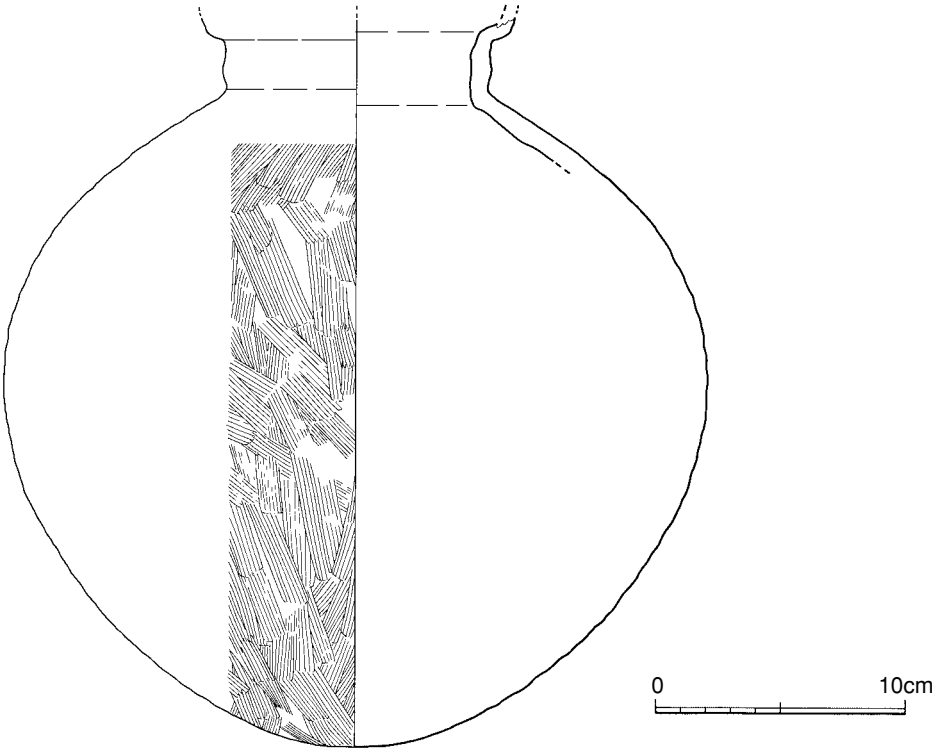
回掲載した箇所のみの実測が作成してある。これより南は新しい溝なのかも知れないが、詳細が不明である。その断面形は逆台形状を呈す。検出面での溝の幅は3.1m程度である。深さ1.3mで、溝底の幅は1.5m程度で、平坦である。西側壁の埋土の断面を観察した結果、溝の埋土は、３層に分けられる。上層から順に１～３層とする。１層は、暗渇色土層で、30cm程度である。２層も、暗褐色土層で、粘質粒が混じる。厚さは20cm程である。３層は、黒褐色土であり、ローム層の粒が少量混じる。厚さ約40cmである。溝の両端にピットが認められるが、溝に伴うものかどうかも不明である。

⑤ ５号溝（第13・14図）

調査区のⅦa区に位置する。溝の部分をわずかに検出したに過ぎない。溝の断面形は緩やかなＵ字状を呈す。遺構検出面はⅢ層である。検出面での溝の幅は3.1m程度である。深さ1.3mで、溝底の幅は1.5m程度で、南に向かい傾斜している。東側壁の埋土の断面を観察した結果、溝の埋土は、５層に分けられる。上層から順に１～５層とする。１層は、暗茶渇色土層で、30cm程度である。２層は、黒色土層で、赤土粒が混じる。厚さは30cm程である。３層も、２層と同じく黒色度であるが、不純物をあまり含まない。４層も茶褐色土層であるが、ローム層の粒が混じる。厚さ5～約40cmである。

５号溝出土の遺物（第15図）

須恵器坏蓋２点が出土している。１は底部から体部にかけて全体の１/６程の残存である。口縁部を欠損し、扁平なつまみを有するもので、天井部からなだらかに体部に至る。天井部附近外面はカキ目調整、体部は回転ナデ調整を行なう。内面はナデ調整を行なう。２は、口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形品である。天井部と体部の境に、浅い２条の沈線を施す。また口縁端部は内面に段を有す。天井部外面はヘラ削り後、回転ナデ調整、体部は回転ナデ調整を行なう。内面は回転ナデ調整を行なう。また外器面にヘラ記号が刻まれている。



第12図　３号溝出土遺物実測図

3　円形周溝遺構

①　1号円形周溝（第 13・16 図）

Ⅵ区南西部に位置する。長径約4.35m、短径約3.9mで、楕円形を呈する。溝の断面形はU字状を呈す。溝は検出面で幅40～50㎝、底までの深さ約50㎝である。遺構の中央部には、特に掘り込み等は認められない。削平のため、もともと中央部に何らかの施設があったかどうかは不明である。また遺物も出土していない。弥生時代後期の集落跡の調査に伴いよく検出される、円形遺構に類似するが、当遺跡では確実に弥生時代に属する遺物は無いため古墳時代の頁に掲載した。

②　2号円形周溝（第 13・17図）

調査区のⅥ区北東端に位置する。木柑子高塚古墳に隣接する地点で、円形の周溝が確認されている。削平を受け、かろうじて、溝の底部分が残存している状態である。この周溝は更に調査区外の東側に伸びているが、その場所も平成10年度に菊池市教育委員会により調査が行われて、ほぼ全体形が確認されている。また北側は別な溝により破壊されている。その平面形は、円形であり、溝の上位幅で1.5m～1.8m、深さは20cmにも満たない。本来は10m程度の円墳若しくは円形周溝墓だったと推定される。また溝より古墳時代の須恵器が出土している。

2号円形周溝出土遺物〔第18・19図〕

周溝より、須恵器･土師器が多数出土している。遺物は、周溝よりほぼまんべんなく出土しており、特定の地域に集中する傾向は無い。その他一般に「赤焼けの須恵器」「酸化焔焼成須恵器」と呼ばれている須恵器の出土が注目される。以下、器種ごとに記述することにする。

坏蓋（1）

小形の蓋で極短いかえりを有す。頂部を欠損するが、本来はつまみを有していたと思われる。天井部外面は回転ヘラ削りの後、カキ目調整を施す。内面は回転ナデ調整を行なう。

坏身（2～6）

2は、たちあがりは、内湾する。また端部は比較的薄く仕上げている。回転ナデ調整が行われている。3は、たちあがりは、短く内側に屈曲し、端部は丸みを帯びる。4は、所謂「赤焼けの須恵器」である。たちあがりは、短く内側に屈曲する。端部は丸く仕上げている。5も、所謂「赤焼けの須恵器」と呼ばれているものである。たちあがりを持たず、体部が外斜する。体部中央に4条の浅い沈線を施し、底部はカキ目調整を行なっており、高杯の可能性がある。6もたちあがりを持たないもので、平坦な底部からほぼまっすぐに立ち上がる。体部に浅い4条の沈線を施す。回転ナデ調整を行なう。

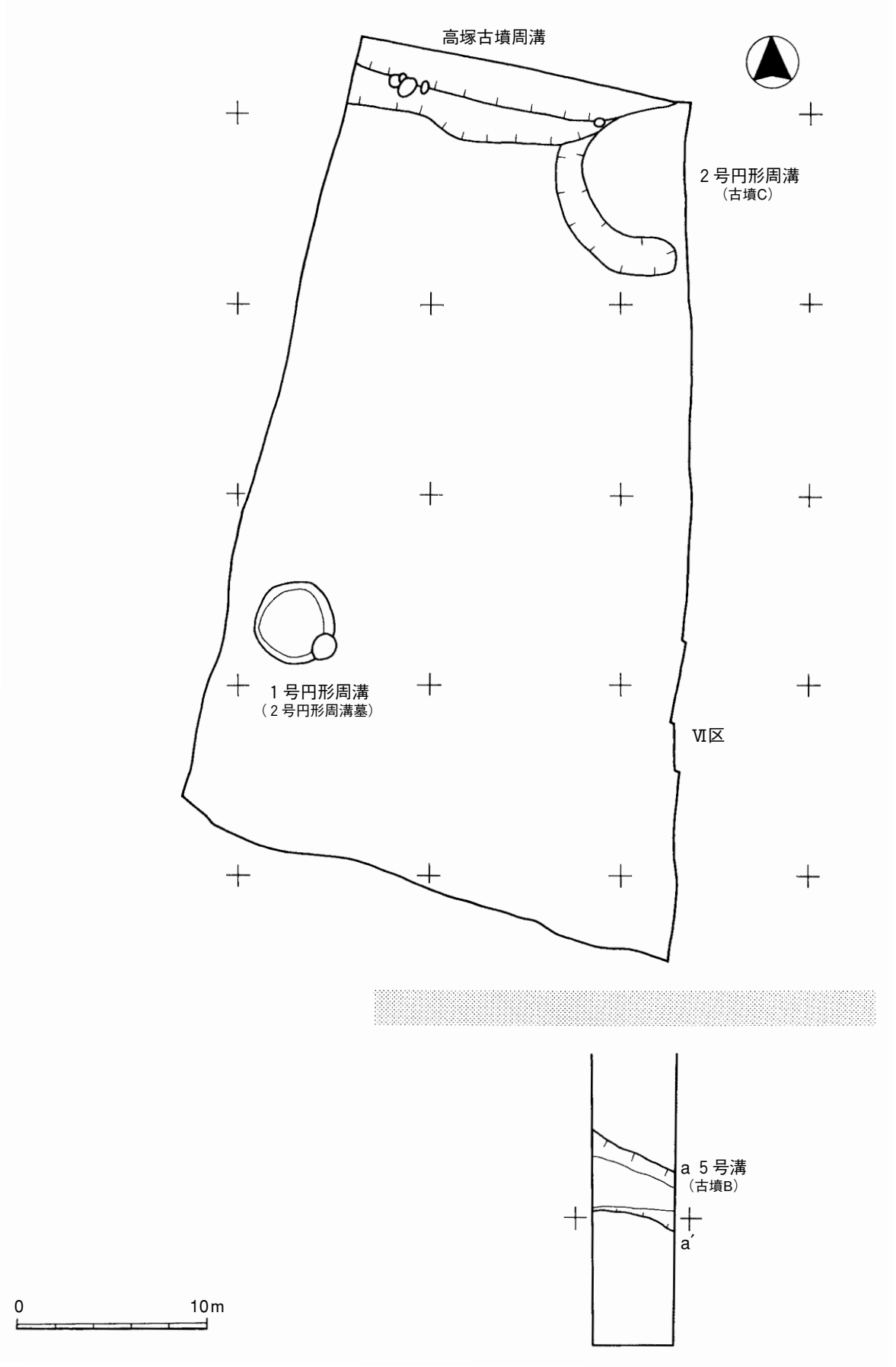
高坏（7～10）

いずれも脚部に透かし窓を有さないものである。

7は、「赤焼けの須恵器」ではないが、器形は9に酷似するものである。外器面に細いヘラ記号が認められる。体部下位はカキ目調整を施す。8は「赤焼けの須恵器」で、短い脚部がつく無蓋の高坏である。ほぼ完形品である。坏部は、深く、底部から緩やかに外反し、口縁部はほぼ直立する。脚部は短く、裾部で広がり屈曲する。坏部下位にはカキ目調整を施す。9は、無蓋の高坏で、「赤焼けの須恵器」である。ほぼ完形である。坏部は底部から緩やかに立ち上がり、体部中位で湾曲する。体部下位はカキ目調整を施す。脚部は、ラッパ状に開き、端部を短く内側に屈曲させる。脚部内面に絞り目の痕跡が認められる。10も「赤焼けの須恵器」である。脚部下半のみ残存する。脚端部で内方向に屈曲する。脚部内面に絞り目の痕跡が認められる。

堤瓶（11）

11は、底部を欠損する。偏平な円球形の体部に、口縁部を付す。把手の痕跡は認められない。口縁部は緩やかに内湾する。 体部外面は回転ナデ調整後にカキ目調整を施 す。



第13図　Ⅵ区・Ⅶa区　古墳時代遺構配置図

壺その他の器種（12～15）

12は口縁部のみの残存である。頚部から口縁部が外反する。また口縁端部を肥厚させる。口縁部の断面形は方形をなす。頚部に波状文を施す。13も口縁部のみの残存である。口縁部は、外に向かい直線的に開く。端部をわずかに肥厚させる。７条の沈線で区画し、その間に波状文を施す。また体部外面には平行叩きが、内面には同心円叩きが認められる。

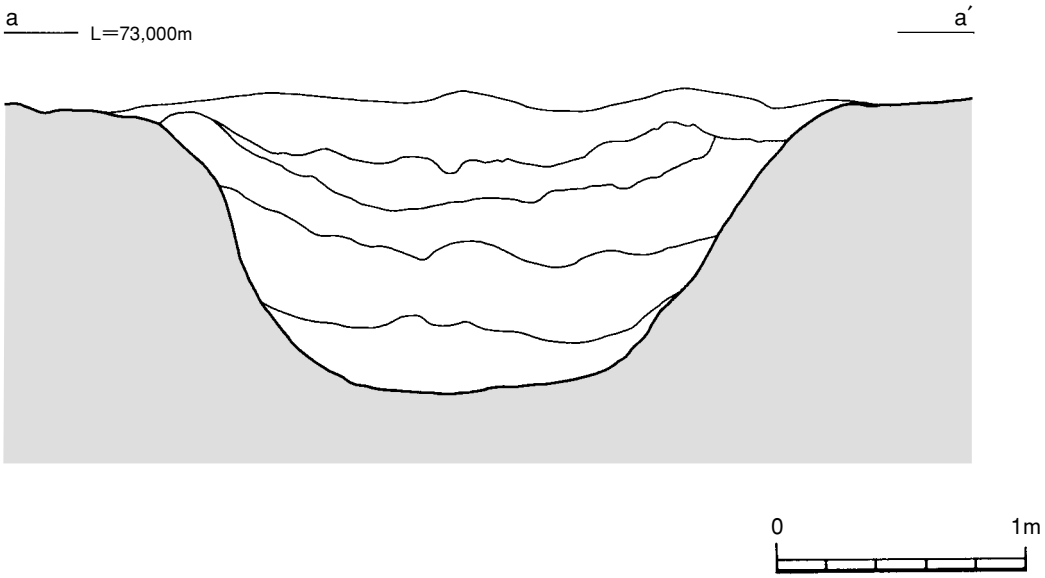
14・15は本来の器形が不明なものである。赤焼けの須恵器と呼ぶほどではないが、色調が黄褐色で、土師器の色調に近いものである。

14は台付き壺等の脚台と思われる。脚部の下位部分のみの残存である。三角形若しくは長方形の透し窓を有する。カキ目調整の後波状文を施す。

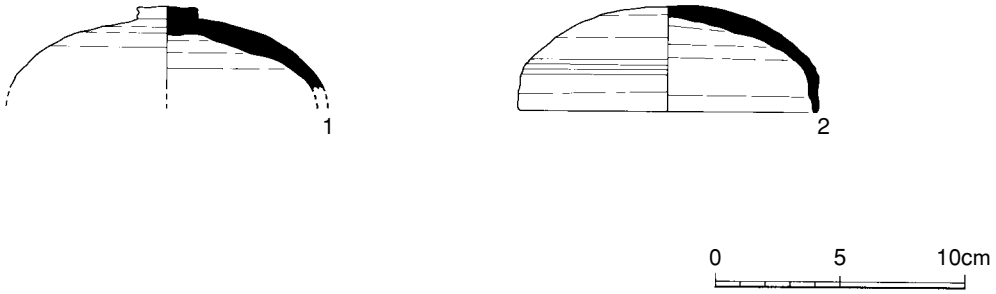
15は、浅鉢状の体部に、脚台がつくものである。体部の下位に接合のための刻目が施されており、突帯が付いてたことがわかる。また突帯の下位には貫通はしていないものの小さな円形の透かし（？）が施され、列点文もほどこされている。内外面ともタタキ調整の後ナデ調整を施す。体部下半は、内外面ともにタタキの痕跡が残る。

4　まとめ

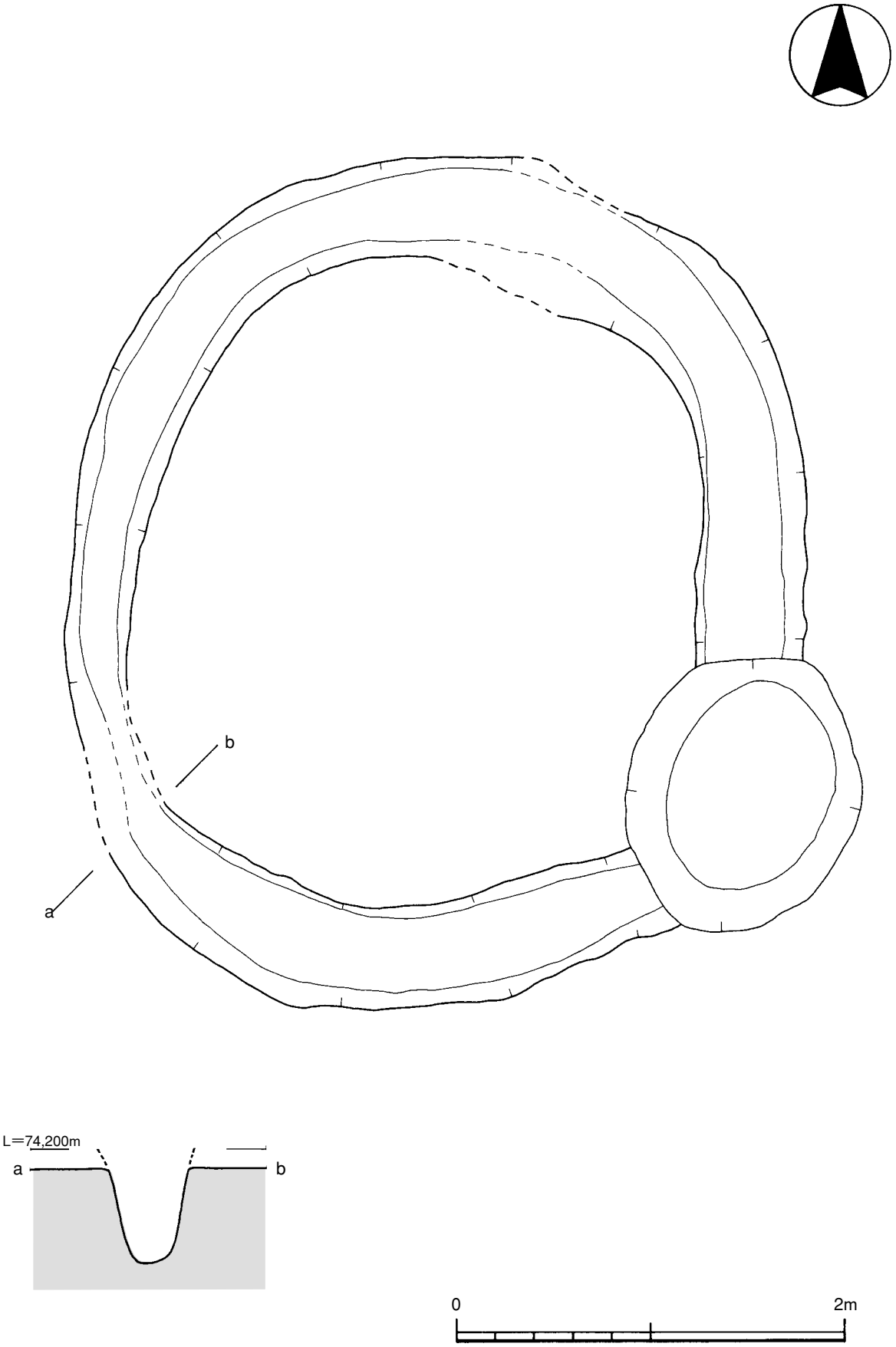
以上が､平成８年度の調査であるが、前述したように、調査区の多くが道路幅、水路幅部分のみの調査のた



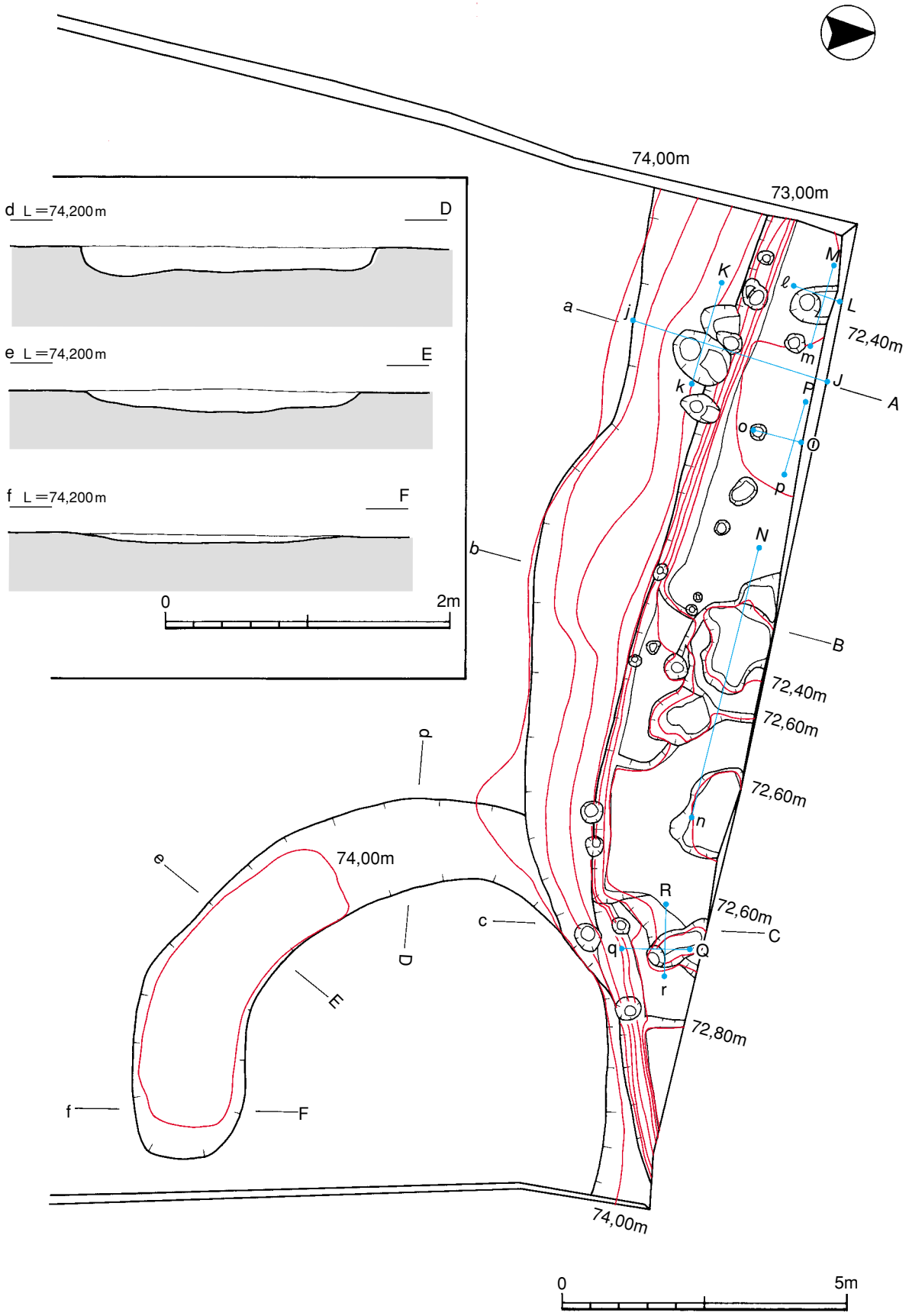
第14図　Ⅶａ区　５号溝土層断面図



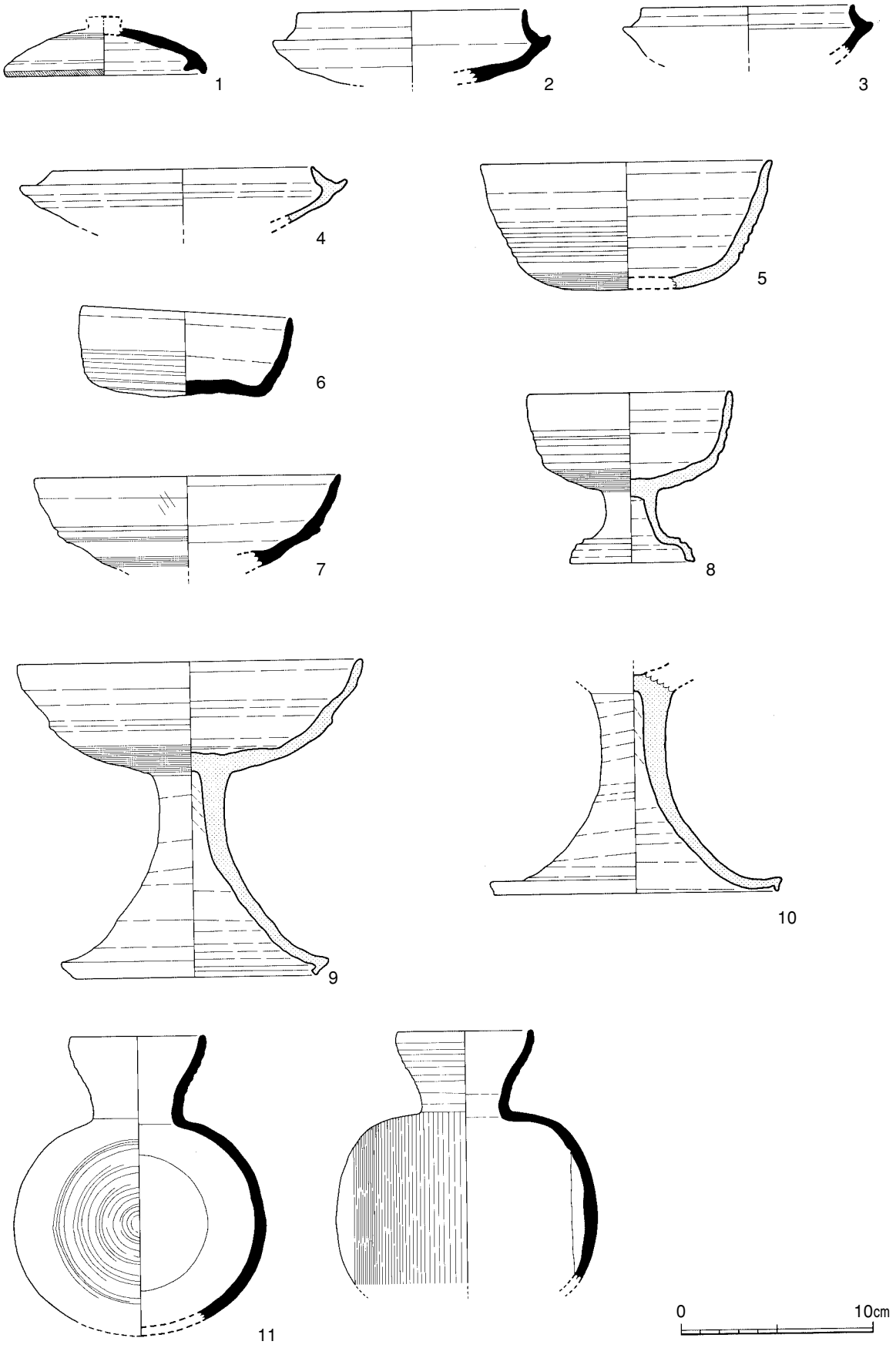
第15図　５号溝出土遺物実測図



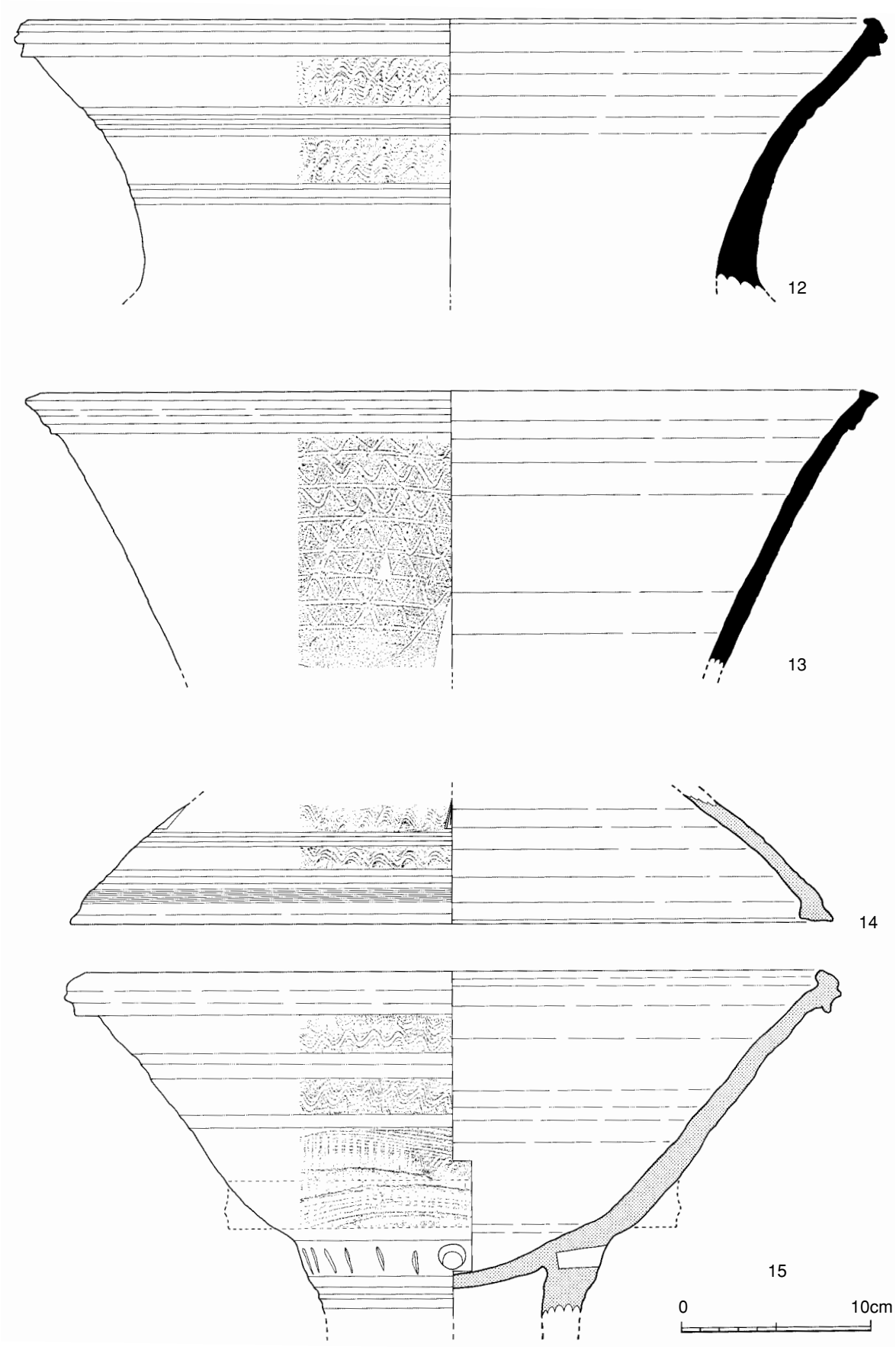
第16図　１号円形周溝遺構実測図
（２号円形周溝墓）



第17図　木柑子・高塚古墳及び２号円形周溝平面図



第18図　２号円形周溝（古墳Ｃ）出土遺物実測図（１）



第19図　２号円形周溝（古墳Ｃ）出土遺物実測図

め、周溝のごく一部を調査したに過ぎず、その全体形状については不明である。また溝の全体形状がわかるものでも、墳丘の有無及びその高さについては不明であるが、調査当時の所見や出土遺物から､ある程度の墳形の復元を試みたい。

古墳Ａ（第９・10図、１号溝、２号溝）

前述したように、Ⅱａ区の１号溝及び２号溝が確実に一連の溝かどうか、墳丘をもっていたかどうか不明であるが、検出面での溝の幅がそれぞれ４～６ｍ程度であることや、正確な出土位置は不明であるが、２号溝のほぼ北側で赤く彩色された石材が多数見つかっていることなどから、墳丘をもった古墳の可能性が極めて高いと考えている。ただし墳形については、全く不明である。仮に円墳だと仮定すると、墳丘25ｍ以上、周溝まで含めると40ｍ前後となる。

古墳Ｂ（第 ９・13 図、５号溝）

Ⅶa区の５号溝も、わずかな部分を検出したに過ぎない。円墳であれば、南側Ⅶb区やⅥ区で、それに対応する溝が検出されてもよさそうであるが、遺構配置図には掲載されていない。しかし溝内より古墳時代の須恵器が出土していることより墳丘を有する古墳の可能性が高い。

古墳Ｃ（第 ９・17 図、２号円形周溝）

Ⅵ区の2号円形周溝であるが、かなりの削平を受けていると思われる。しかし溝より６世紀後半代の須恵器が出土することより、10ｍ程度の円墳だったと推定される。須恵器は、TK43・TK209型式のものが主体となる。

１号円形周溝墓〔第９・10図、３号溝、４号溝〕

やはり前述したように、Ⅱa区の３号溝及び４号溝が確実に一連の溝かどうか、墳丘をもっていたかどうかも不明であるが、調査担当者は一連の溝と考えている。検出面での溝の幅がそれぞれ２～３ｍ程度で、溝間の距離が11～12mであり規模が小さいことや、３号溝から古式土師器が出土しており、この地域の当該期は円形周溝墓若しくは方形周溝墓が多いため、この遺構も円形若しくは方形周溝墓の可能性が高いと考えている。

２号円形周溝墓（第 13・14 図、1号円形周溝）

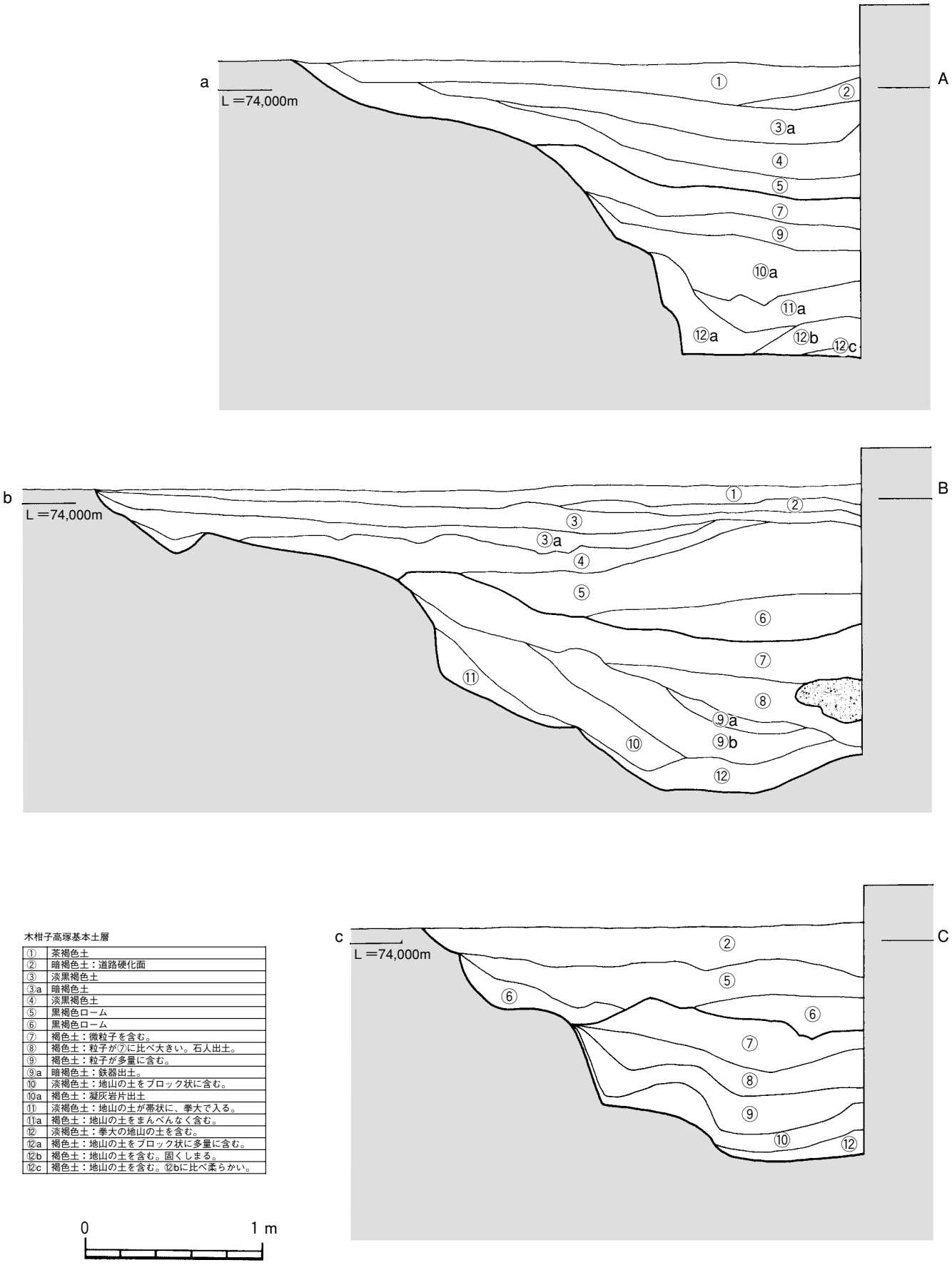
前述したように、削平のためか、主体部は不明である。また時期を特定できる資料も無いが。弥生時代頃の調査に伴いよく検出される、円形遺構に類似するが、当遺跡では確実に弥生時代に属する遺物は無いため円形周溝墓の可能性が高い。

以上のように、３基の古墳と２基の周溝墓の存在が想定できる。また写真のみの掲載であるが、図版20（左上）は、古代の６号溝上層からの出土ではあるが、この周辺にも古墳が存在していた可能性がある。今回はごく限られた調査区だけであったことを考慮にいれると、周辺にもっと多くの古墳、周溝墓が存在する可能性が高い。

Ⅱ　木柑子高塚古墳の調査成果（平成９年度の調査）

翌９年度の調査で、それまで知られていなかった新たな古墳が確諸され、木柑子高塚古墳と呼称されることとなった。以下その概要を記述する。

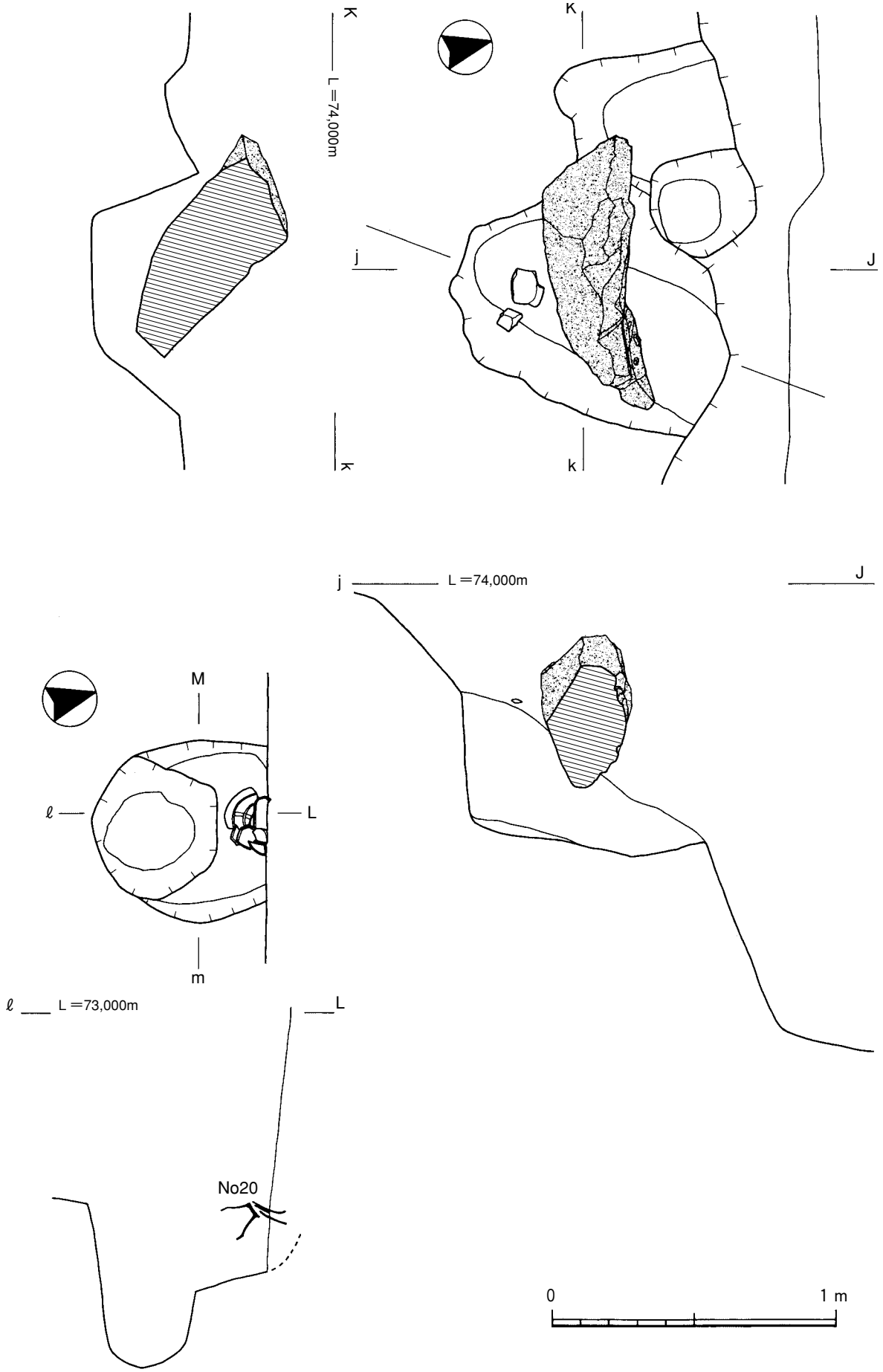
平成９年度の調査は、８年度の未調査水路部分のわずか100㎡程であった。調査区のⅥ区の北端部にあたり、かろうじて古墳の周溝が残存していた。本来墳丘が存在していたであろう場所は、昭和30年代に破壊されており、詳細は不明である。また国土地理院より、1960年代当時の空中写真を取り寄せたが、当該地点は森林になっており、明確に古墳と認識できるものは見当たらなかった。



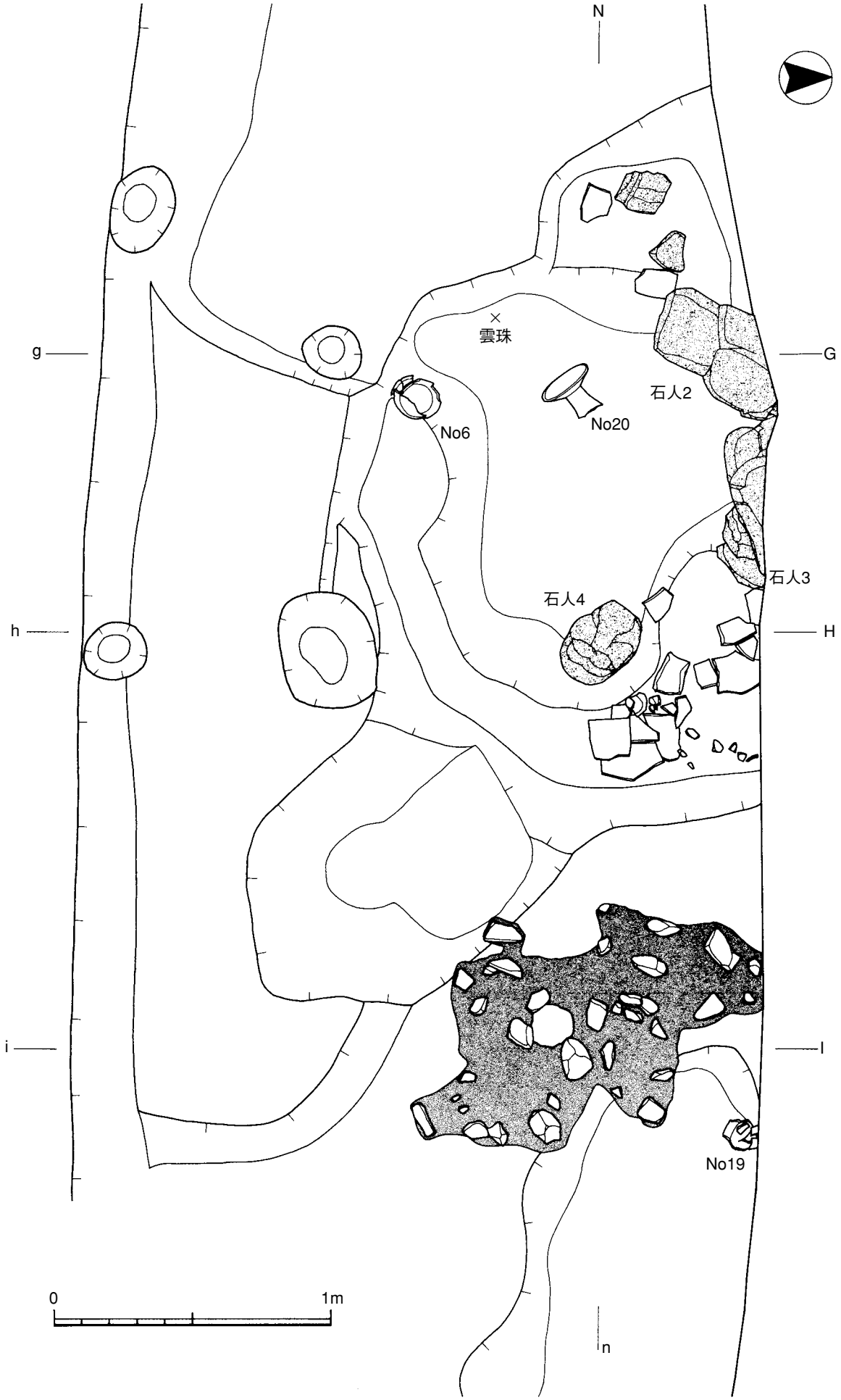
木柑子高塚基本土層

①	茶褐色土
②	暗褐色土：道路硬化面
③	淡黒褐色土
③a	暗褐色土
④	淡黒褐色土
⑤	黒褐色ローム
⑥	黒褐色ローム
⑦	褐色土：微粒子を含む。
⑧	褐色土：粒子が⑦に比べ大きい。石人出土。
⑨	褐色土：粒子が多量に含む。
⑨a	暗褐色土：鉄器出土。
⑩	淡褐色土：地山の土をブロック状に含む。
⑩a	褐色土：凝灰岩片出土
⑪	淡褐色土：地山の土が帯状に、拳大で入る。
⑪a	褐色土：地山の土をまんべんなく含む。
⑫	淡褐色土：拳大の地山の土を含む。
⑫a	褐色土：地山の土をブロック状に多量に含む。
⑫b	褐色土：地山の土を含む。固くしまる。
⑫c	褐色土：地山の土を含む。⑫bに比べ柔らかい。

第20図　木柑子・高塚古墳土層断面図



第21図　木柑子・高塚古墳石人１及び遺物出土状況



第22図　木柑子・高塚古墳石人２～４及び遺物出土状況

１　周溝の土層について

周溝底部はは現地表面から約２ｍの探さがあり、底部は周溝外側の立ち上がりまでほぼ平坦である。墳丘部への立ち上がりは道路下のため確認できない。

①　Ａ－a土層断面図〔第20図１〕

周溝の外側（a）の周溝確認面から、北へ（Ａ側）約２ｍまでは、緩やかに傾斜しているが、それより溝底部に向かって急角度で傾斜していく。底部は、ほぼ平坦である。溝検出面での幅は現況で約3.5m、底部の幅約１m、深さ約1.6mである。西壁の埋土の断面を観察した結果、溝の埋土は、12層に分けられた。

②　Ｂ－ｂ土層断面図（第20図２）

周溝の外側（b）の周溝確認面でいったん浅くＵ字状にくぼむ。そこから北（Ｂ側）へ約1.3mまでは、緩やかに傾斜しているが、それより溝底部に向かって急角度で傾斜していく。溝底部に浅い土坑があるため、平坦になっていない。溝検出面での幅は現況で約4.1m、底部の幅約1.1m、深さ約1.7mである。土層ベルトを観察した結果、溝の埋土は、14層に分けられる。底より約20cm浮いた状態で石製表職（石人２）が出土している。

③Ｃ－ｃ土層断面図〔第20図３〕

周溝の外側（c）の周溝確認面から北（C側）へ約20cmで傾斜角度が変わり、更に北へ60cm行った所で更に傾斜角度が変わり、垂直に近い角度で溝底部に向かって傾斜していく。つまり３段に角度を変えて掘り込んでいったような形状である。溝の底部は平坦である。溝検出面での幅は現況で約2.5m、底部の幅約0.8m、深さ約1.3mである。土層ベルトを観察した結果、溝の埋土は、８層に分けられる。この土層は、２号円形周溝遺構との重複が認められる箇所であるが、２号円形遺構の溝の痕跡は認められない。

④　土層

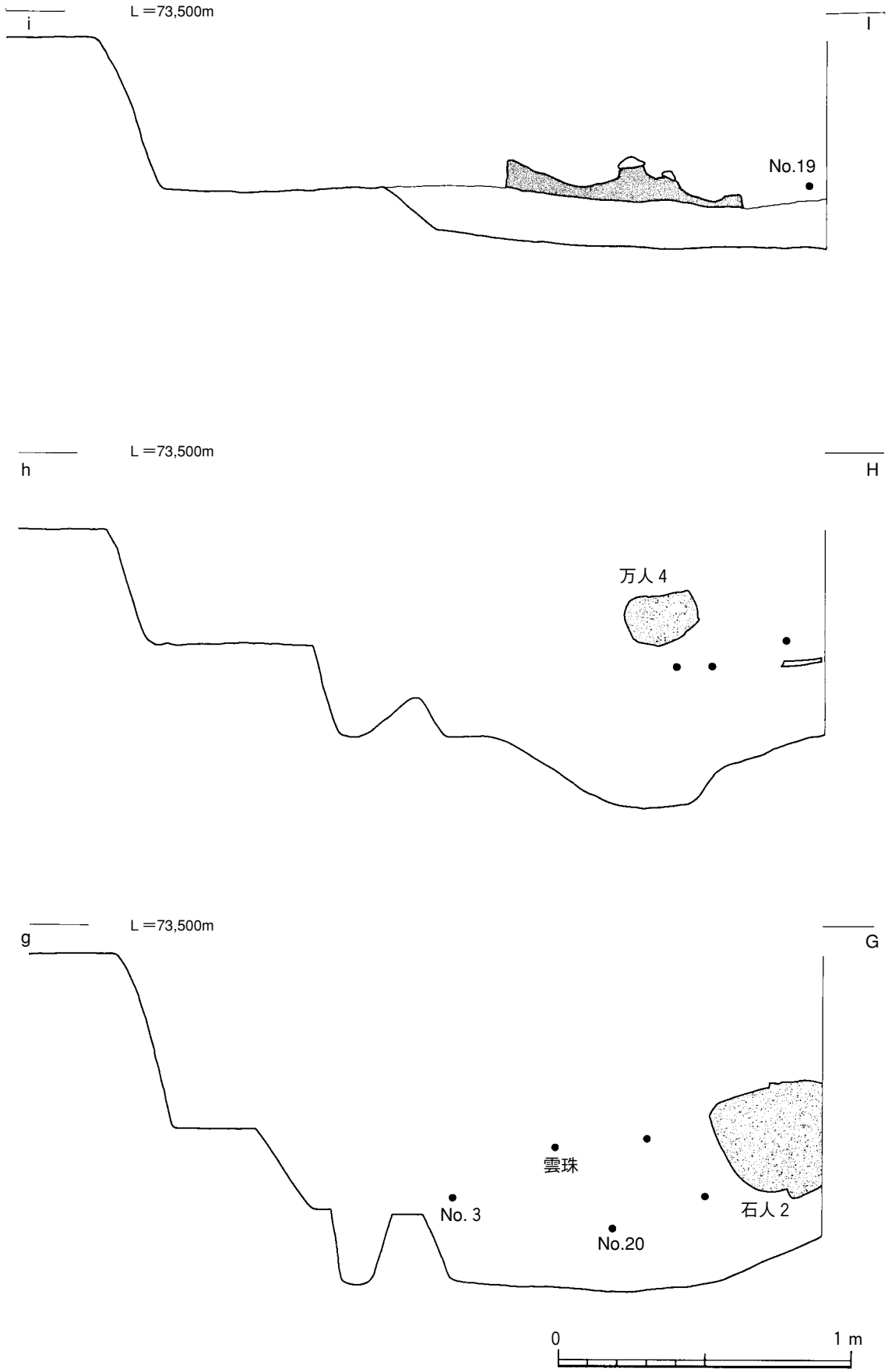
これらの層を巨視的にみると大きくⅠ層とⅡ層の２つに分けられる。Ⅰ層は、①～⑥層までの層で、暗渇色または黒褐色土層である。古墳時代の須恵器･土師器の他に９世紀ないしは10世紀代の土師器片も出土する。Ⅱ層は、褐色土層で、⑦層以下の層である。このⅠ層･Ⅱ層の境界ラインで、溝の傾斜角度が大きく異なり、急角度で溝底部に傾斜していくようになる。Ⅱ層の上層（⑦層）には、まだ古代の土器片が認められるが、それより下層はほぼ古墳時代の遺物のみになる。また東から西に傾斜し、20cm～40cm程低くなる。

２　周溝の形状について（第17図）

今回の極限られた調査では、周溝の形状と規模を、明らかにすることは出来ない。しかし周溝平面形は、調査区中央部から東端にかけてなだらかな弧を措いていることから、前方後円墳のくびれ部分にあたり、盾形の周溝をもつ古墳の可能性が高いと考えている。現在確認されている周溝の全長は約17mである。

調査担当者は、土層の頁に記述したⅠ層とⅡ層の境界ラインを異なった遺構の切り合いラインではないかと考えられている。つまり溝の底から見れば、古墳の周溝は、底から急角度で立ち上がり、本来そのままの角度で立ち上がって行くはずが、古代の溝（道路）で破壊しているという想定である。つまり第17図の木柑子高塚古墳平面図の外側（南側）のラインは古代の溝であり、本来の木柑子高塚古墳の周溝は、その一つ内側のラインで、よりなだらかな盾形の周溝になると考えられている。また平成8年度の調査においては、木柑子高塚古墳の周溝そのものを、古代の溝と言う認識で掘削しており、調査区Ⅰ区に存在する東西に伸びる古代の溝の延長ではないかと捉えていたようである。

その他内側のラインに沿ったように、円形の穴が存在するのも注目される。



第23図　木柑子・高塚遺物出土状況断面図

３　遺物出土状況について（第21・22・23・24図　）

ここに掲載している遺物出土状況は、石人１を除けば、いずれも溝の底から20～50cm程浮いた状態での出土であり、Ⅱ層から出土したものである。また石人３を除けば、いずれも周溝底部に浅い不整な円形の掘り込みが見られる個所である。この不整な浅い掘り込みの性格については、残念ながら不明である。

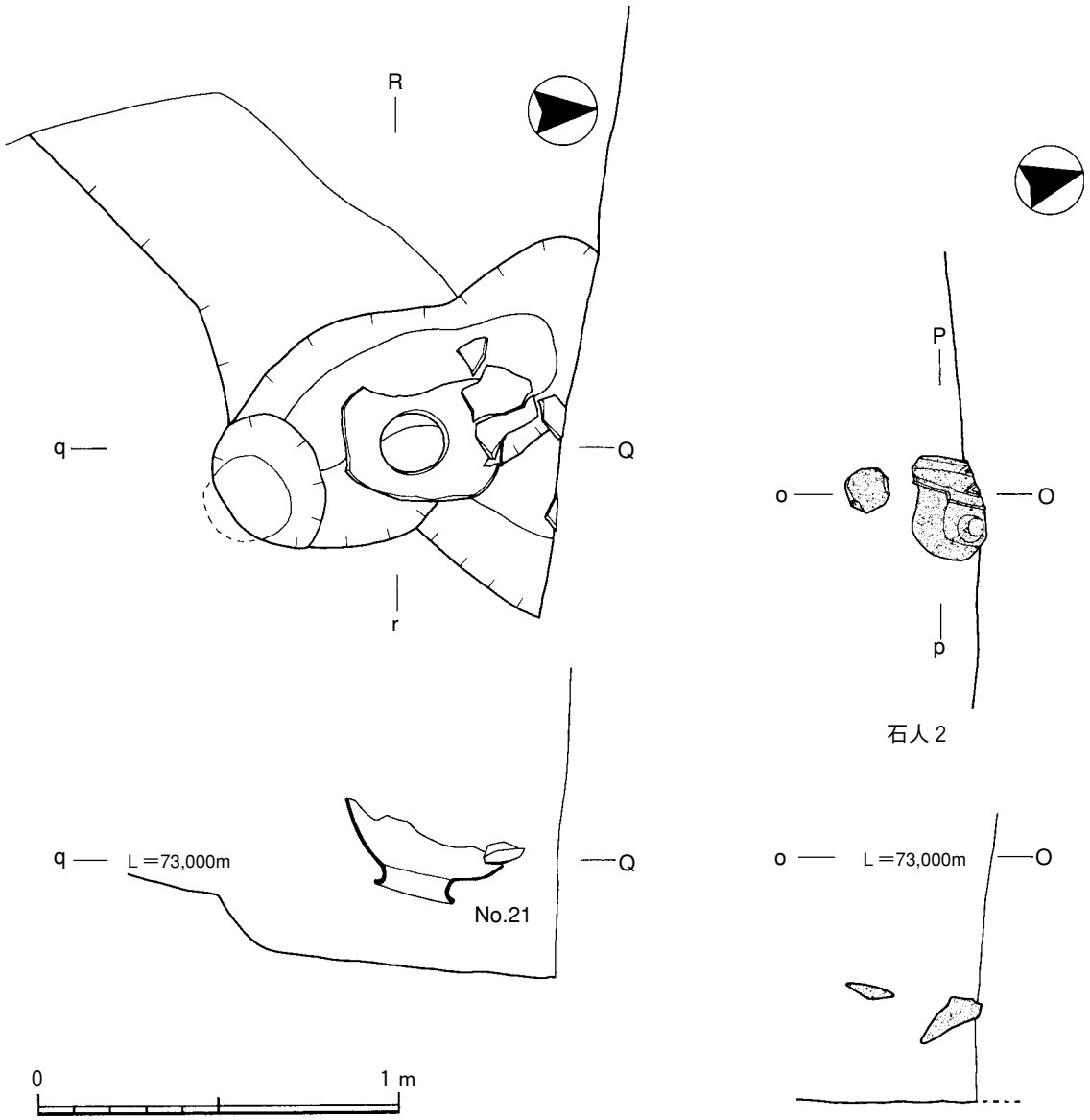
石人は横倒しになった状態で出土し、ほぼ同レベルから須恵器や雲珠・銀製品・鉄製品なども集中して出土している。また第23図（ i-I ）は粘土層の上に凝灰岩の破片が載った状態であるこれは石製表飾の破片の可能性もあるが、調査担当者の所見は、恐らく主体部であろう横穴式石室に伴う施設を製作した際の石屑ではないかと言うことであった。八代郡竜北町の野津古墳群の端ノ城古墳に類例がある（今田　1999）。

４　石製表飾について

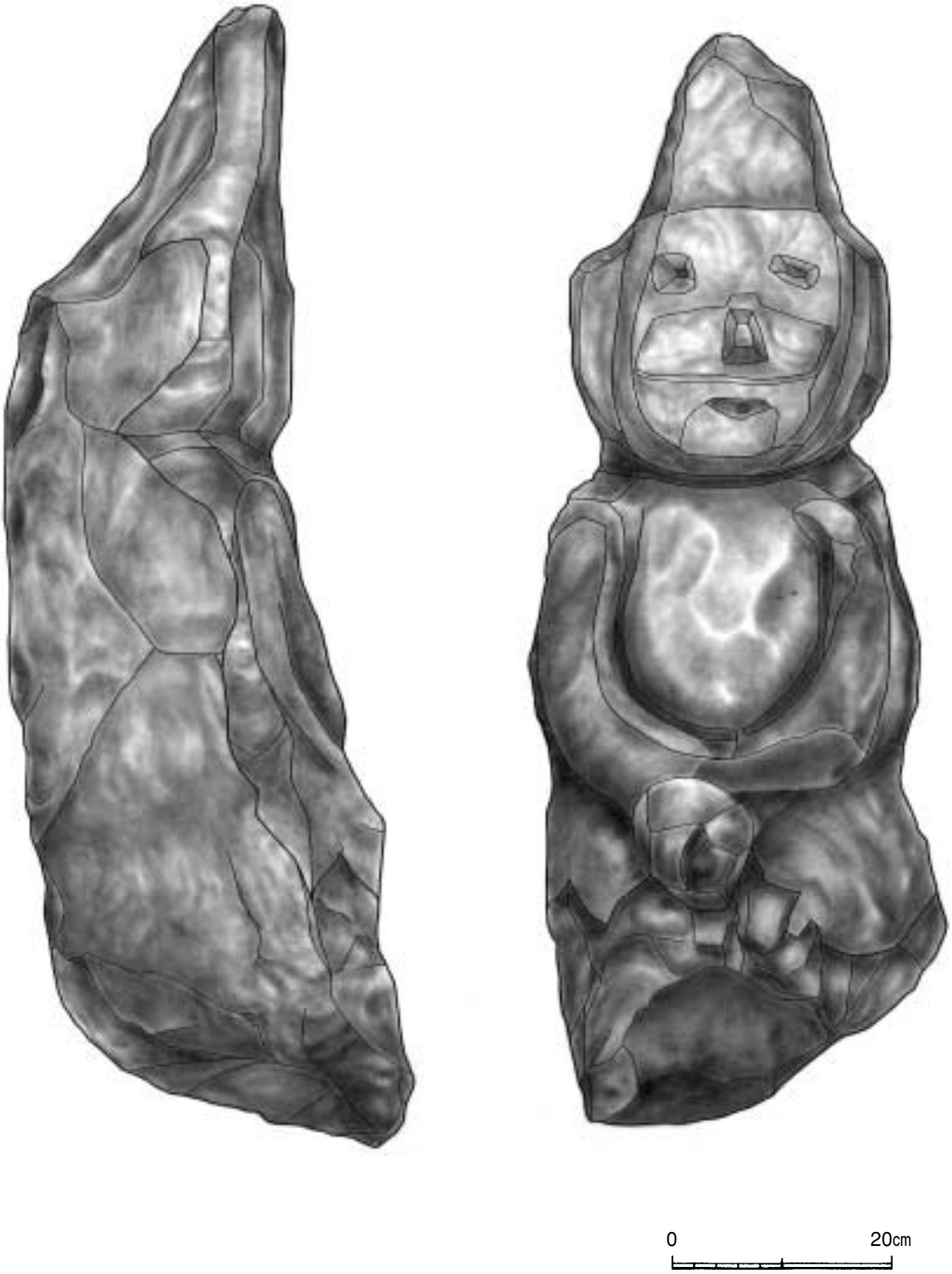
従来石人・石馬と呼称されてきたものであるが、実際には石製の人や馬だけでなく様々な石製品があるため、石製表飾と呼称している（1987　柳沢）。

①　石人1（第21・25・26図）

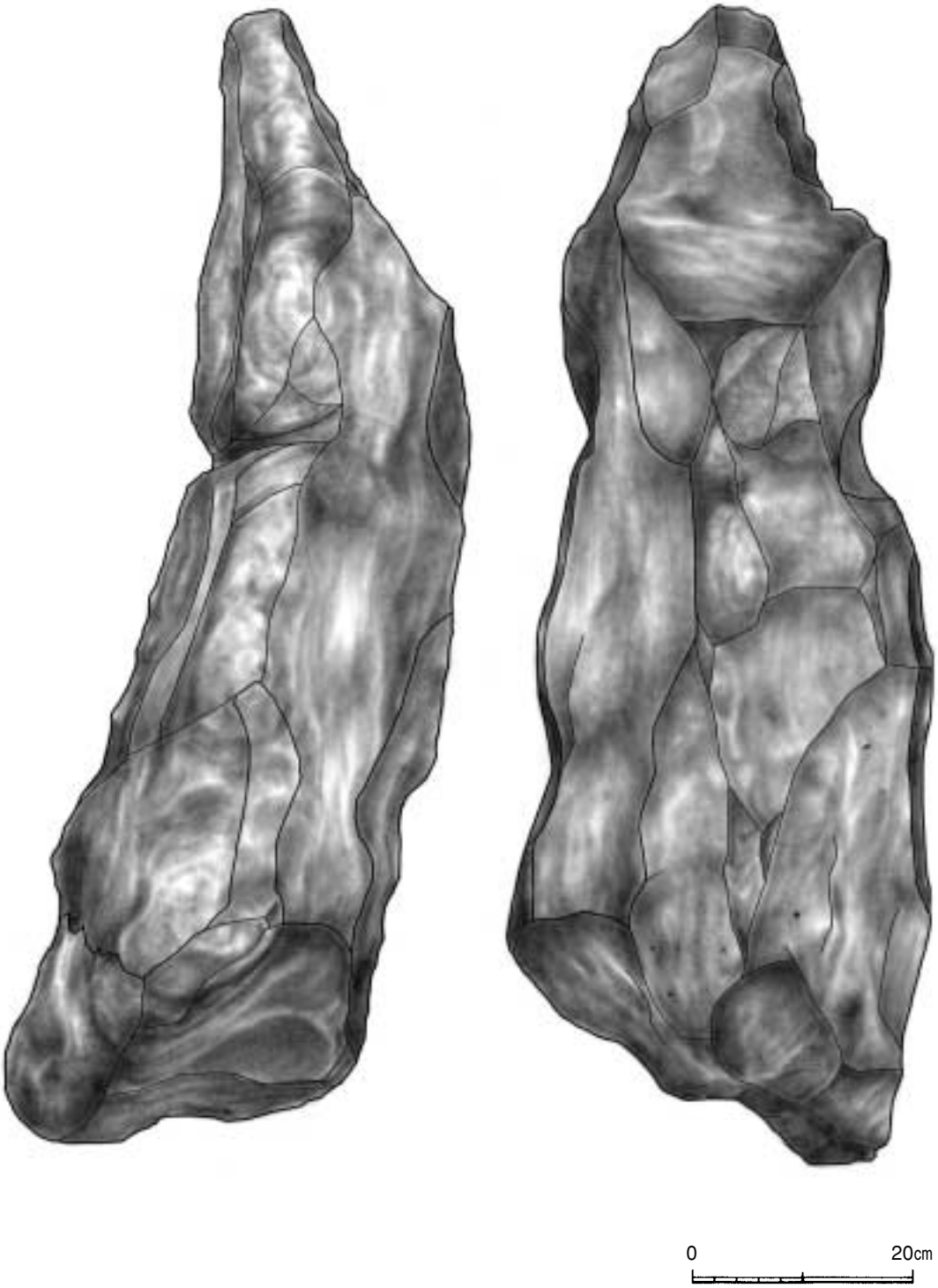
周溝の西側からの出土である。周溝の外（南側）から70cm程緩やかに傾斜した所に1.2m前後の掘り込みが



第24図　木柑子・高塚古墳石人２及び須恵器出土状況



第25図　石人１実測図（正面・右側面）



第26図　石人１実測図（左側面・背面図）

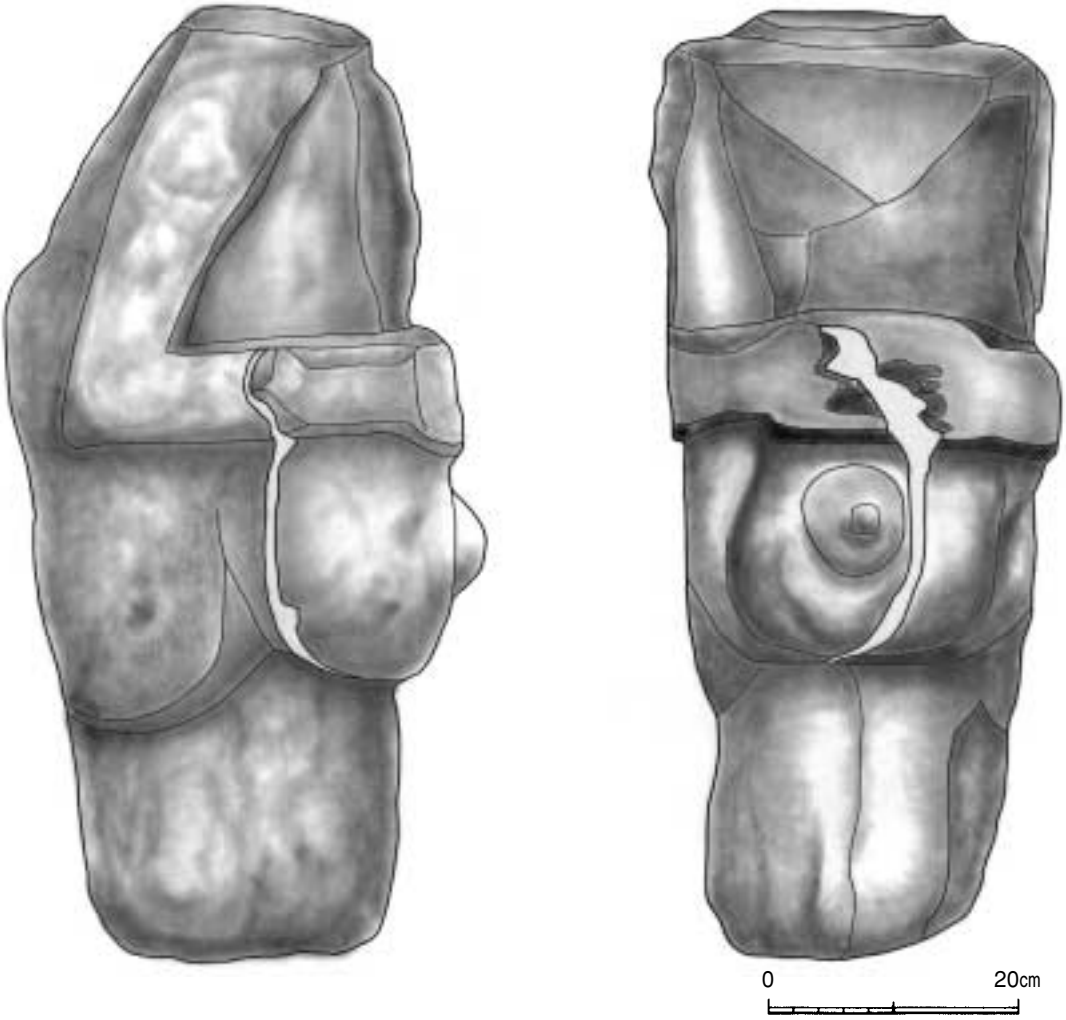
あり、その中から検出されている。ちょうど調査担当者が本来の周溝ラインと考えているライン上に該当する。他の３体の出土レベルと比べると50～60cm程高いが、その掘り込みの埋土はⅡ層に相当するものと考えられる。

ほぼ等身大で、現在の長さ103cm、幅33cm程度である。頭には三角形の高い冠帽らしき物を被っているようであるが、はっきりしない。顔は、目と口を掘りくぼめ表現している。鼻は、鼻の周囲を不整な長方形状に掘りくぼめ、浮き彫り風に表現している。また、目から口にかけての部分の左右に造り出しがある。この部分は、顔部分より１cmほど低くなっている。これを含め顔の輪郭と捉えるか、帽子の紐、上美頭良を表現したもの、若しくは、大きな耳と捉えるか判断しかねる。従来知られている類の石人を更に改変したものとも考えられ無くはない。

胴体部分は、腕の輪郭を浅く掘りくぼめ表現しているが、他の石人程の立体感は無い。腕を腹の前にやり、手には、何か持っているようであるが、はっきりしない。また脚の部分についても不明瞭であるが、胴部がわずかにくびれており、どっしりと座っていそうな感じを受ける。

この石人で最も特徴的ことは、真正面からの見え方のみに注意を払ったかのように、側面は、少し回り込んだ部分までは彫刻を施しているが、それ以外の側面や背面には、彫刻は施されていないことである。裏面の大部分は平坦に整形されているようにも見えるが、不明である。

また、その表現方法も他の石人に比べ浮き彫り風で、あまり立体感が無いこと、出土状況が他の３体と異



第27図　石人２実測図（右側面・正面図）

なるため、もっと新しい時代の遺物である可能性もある。しかし、腕を腹の前にやるといった、造作が共通していること。この地域では野仏が存在しないこと。出土したレベルは他の石人より高いものの、出土した層の土色はⅡ層と同じであると言う調査所見より、同時代の製作だと判断した。しかし初葬、追葬時といった時期差がある可能性はあるのかも知れない。

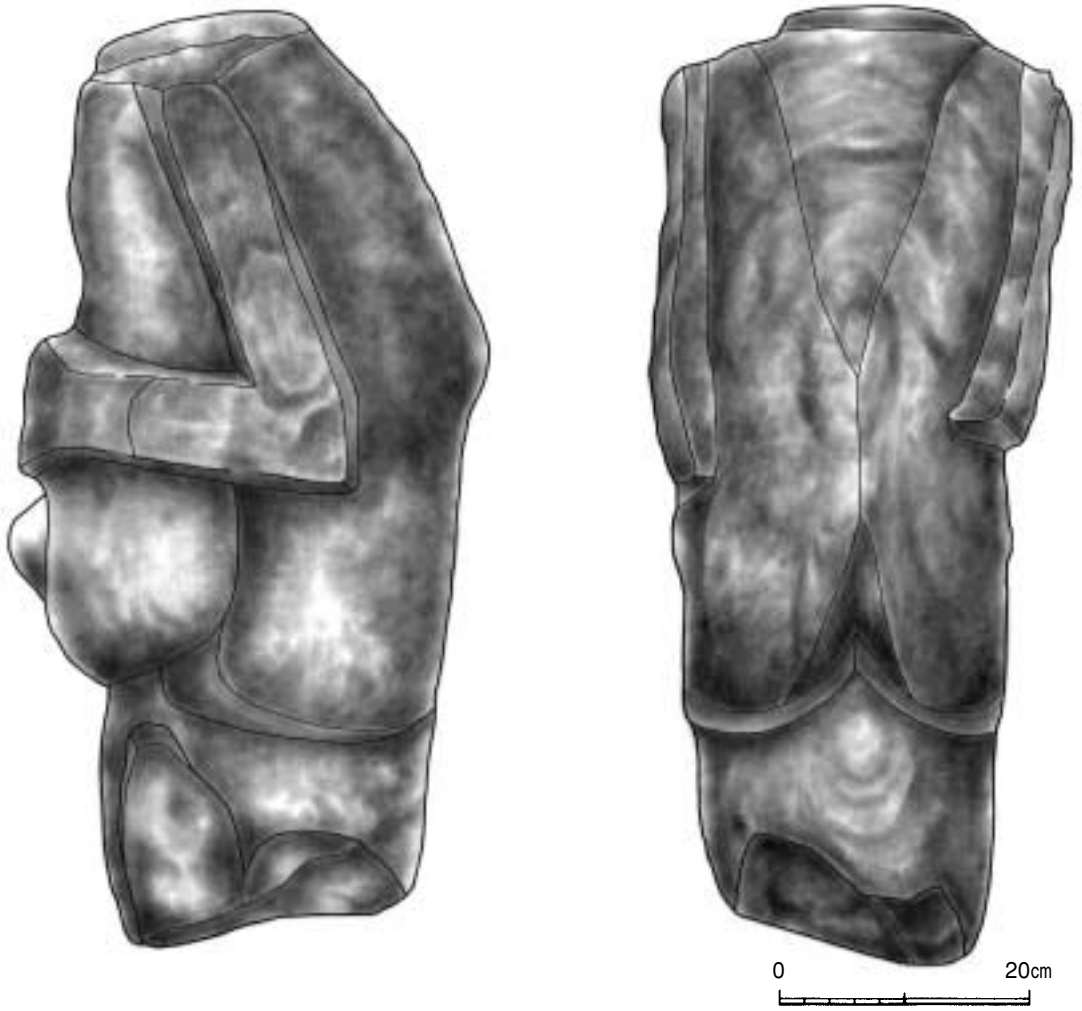
②　石人2（第22・24・27・28図）

周溝のほぼ中央の北側壁沿いでの出土である。周溝の底から20cm程浮いた状態で出土している。

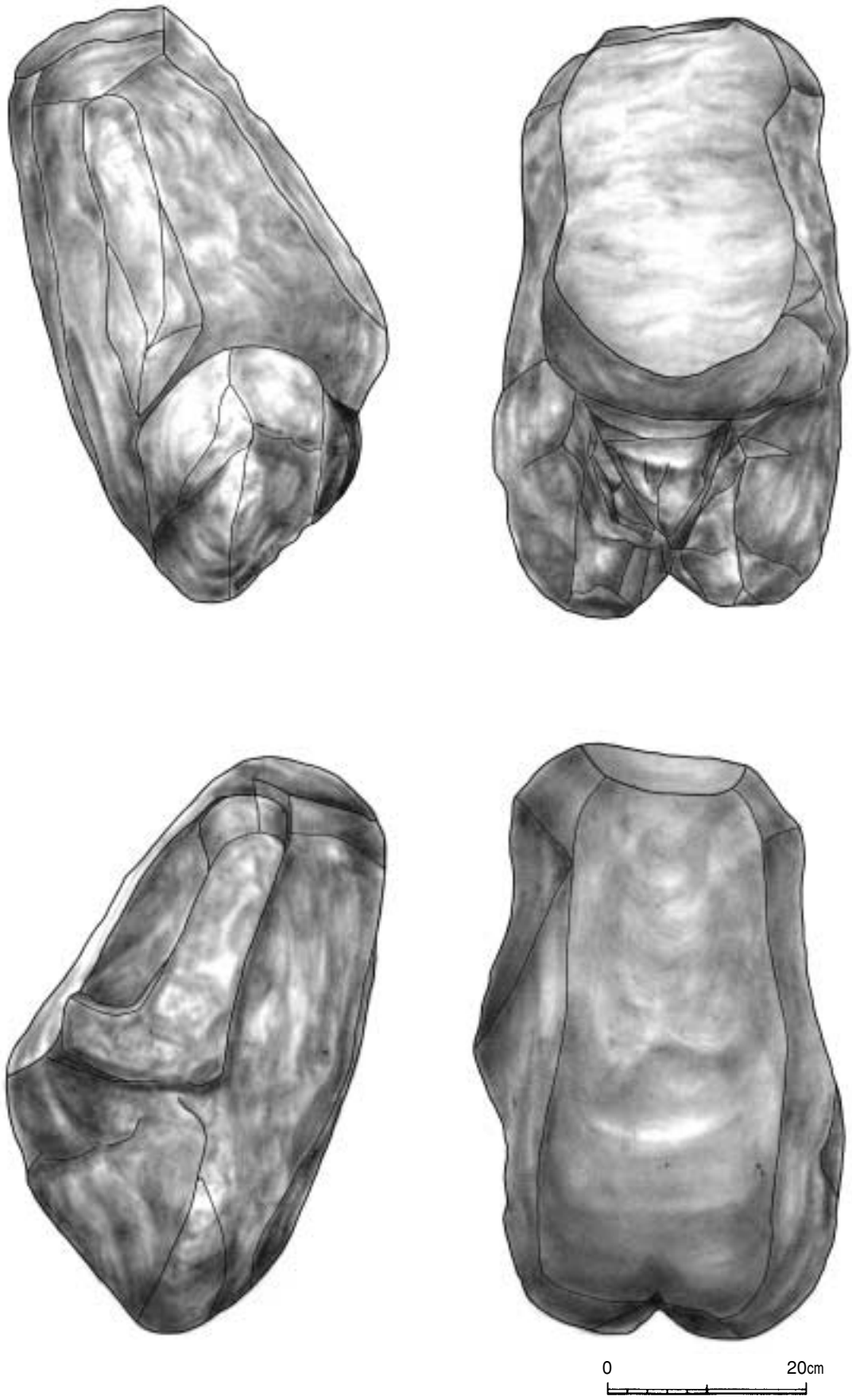
石人１に比べるとやや小形で現在長で、縦76cm、横34cm程度である。頭部はなく、首部分は、きれいに整形され、赤い顔料も認められることから、元から頭部はなかったと思われる。また赤色顔料は、背中にも一部認められる。腕を腹の上で組んでいる。はっきりとはしないが、両手の指 を1本ずつ交差させているようである。正面胸部のＶ字状の加工、および背面腰部分の切り込みの表現は、衣を表現したと考えられる。

腹部は下腹部まで膨らんでいるが、これについては、主に２つの見解がある。

一つは、身重の状態を表していると言う見方である。腹部の中央に大きな突起状のものがあり、これも身重の時の「へそ」を表現したものかも知れない。しかし、「へそ」を表現してあるなら裸体であろうし、衣服の表現と矛盾する。もう一つの見解は、何かを抱え持っている状態を表現していると言う考えである。酒などの液体が入った壺等の容器を抱えており、突起はその注ぎ口を表現していると言う。側面から見ると前かがみになっているので、酒を注ごうとしている状態を表しているのかも知れない。ただし容器が大きすぎ、



第28図　石人２実測図（左側面・背面図）



第29図　石人 3 実測図

その大きな容器の上の部分を抱え持つというのも不自然である。また注ぎ口が真横に傾いているのも不自然な感じを受ける。

脚部は地面に立てるためか、1本の石柱状に成形されており、足の表現は見られない。

③　石人3（第29図）

周溝の西よりの北側壁沿いで出土している。周溝の底から20cm～30cm程浮いた状態で出土している。

石人２と同程度の大きさで、現在長59cm、幅35cm程度であり、石人2と同様に腹部がふくらんだ石人であるが、腹部以上を欠損している。

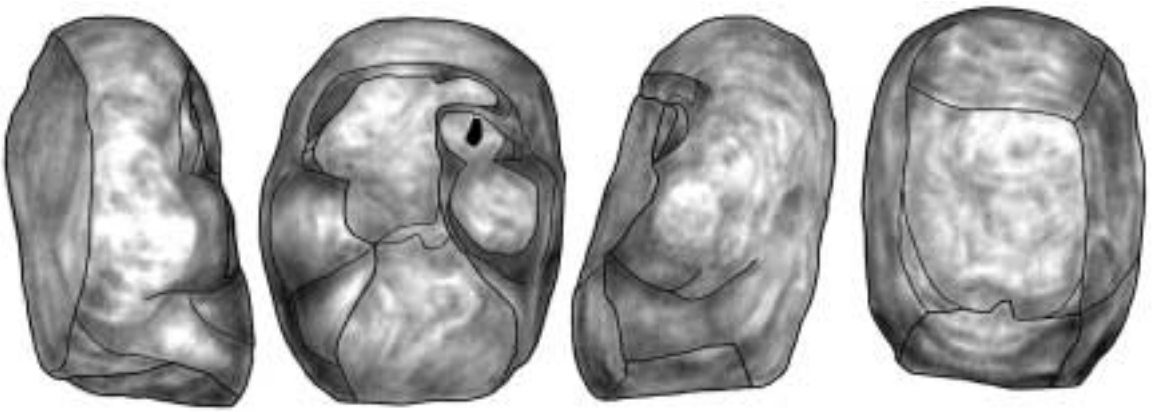
力士との見方もあるが、その肢体から裸体の妊婦であろうと思われる。やはり石人２同様、頭部も存在しないが、首部分で欠損しているため、頭部分が本来存在したかどうかは不明である。もし妊婦であるなら、乳房と考えられる阿蘇熔結凝灰岩の破片が出土しているので、この石人のものかも知れない。腕の造作も、石人２とよく似ているが、右腕は背中にむかって曲げられているようであるが、はっきりしない。手は腹部の上面が欠損しているため造りは不明である。下腹部には､三角形の表現があり、三角の布をまとっていたのかも知れない。またその三角形の中央に女性器と思われる溝も彫り込まれている。脚部は、ひざまずいた形を表しているようである。ただし背面にはそのような表現はみられないし、妊婦がひざまずいたり、右腕を背中にむかって曲げていることについては、若干不自然さを感じる。

④　石人4（第30図）

周溝のほぼ中央部、石人２に隣接した場所からの出土である。周溝の底から50cm～80cm程浮いた状態で出土している。

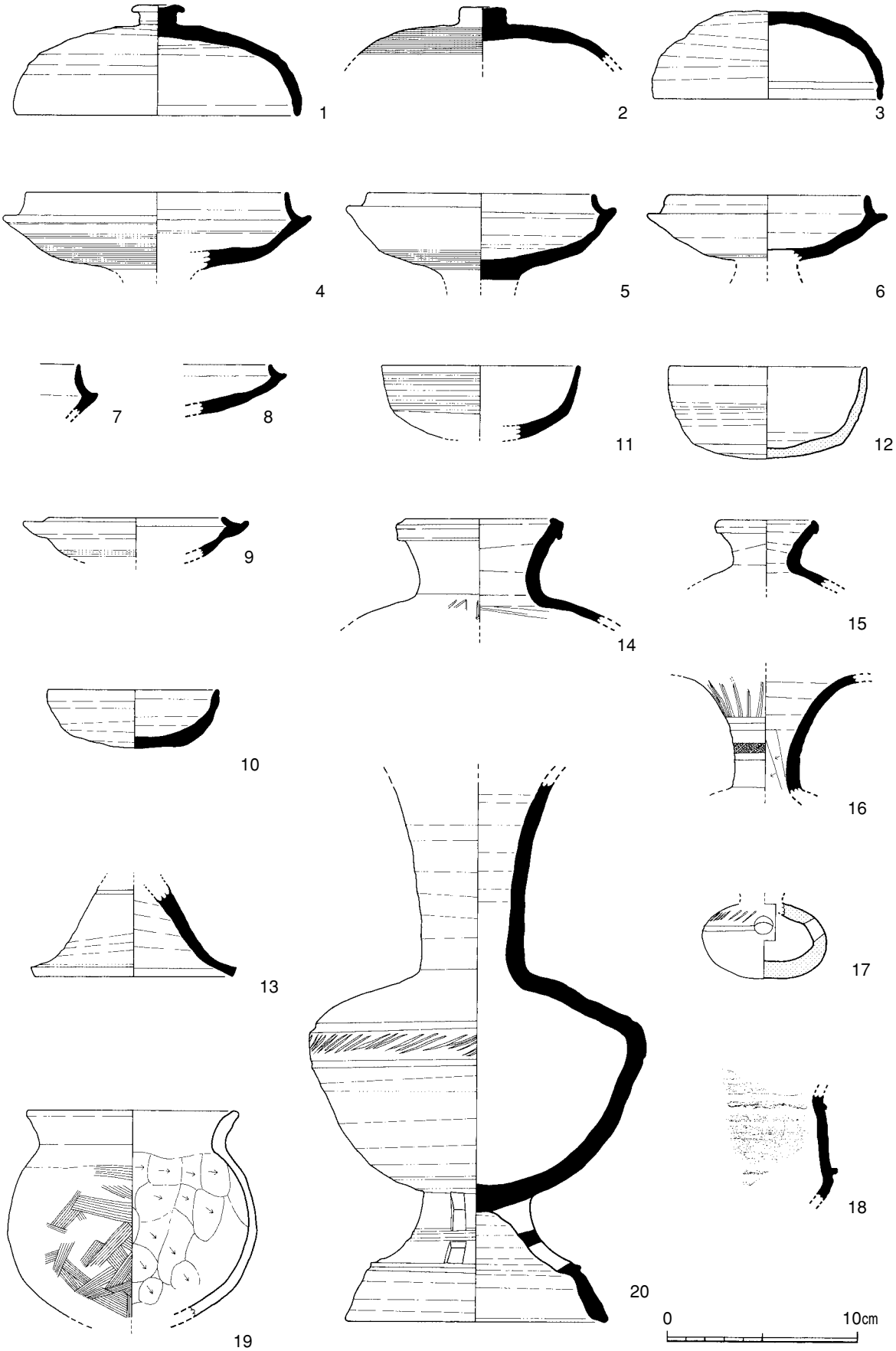
頭部のみの出土である。残念ながら胴部以下は未発見である。現在長32cm、幅23cmで、その頭の大きさからすると、ほぼ等身大である。顔面中央部が欠損しているので、詳細な表情はわからないが、左眼にあたる部分に黒く塗られたような部分が認められる。また、眼は大きく見開き、盛り上がるるように造られていたようである。しかも 左右の眼の位置がアンバランスで、上下にゆがんでいるのがわかる。また頬が盛り上がり、恐らく口はひょっとこのように、とがらせている様を表現しているのではないだろうか。全体におどけた印象をあたえる造りである。また耳の部分を境に二分するように細線が部分的に残っていることから、仮面をつけた人物を表現した可能性がある。

以上の４体であるが、いずれも阿蘇熔結凝灰岩製である。また４体の石人の中でも、石人１と他の３体は



0　20cm

第30図　石人４実測図



第31図　木柑子・高塚古墳出土遺物実測図

彫刻として表現方法に違いが認められる。石人１が石材の一面を利用した半肉彫風表現であるのに比べ、石人２・３は、ほぼ完全な肉彫となっている。その他周溝中より凝灰岩の小破片が多数出土している。本来は更に数体の石人が存在していたのかも知れない。

調査担当者は、石人１は官人・貴人であり、手には坏を持っているのかも知れない。石人２は （酒の入った）容器を抱えた人物で巫女のような存在ではないのだろうか。石人３については、裸婦で妊婦の可能性が高い。また石人４については、 ひょっとこのような仮面をつけた人物で踊りを踊る、道化のような存在ではないのだろうかと考えられている。

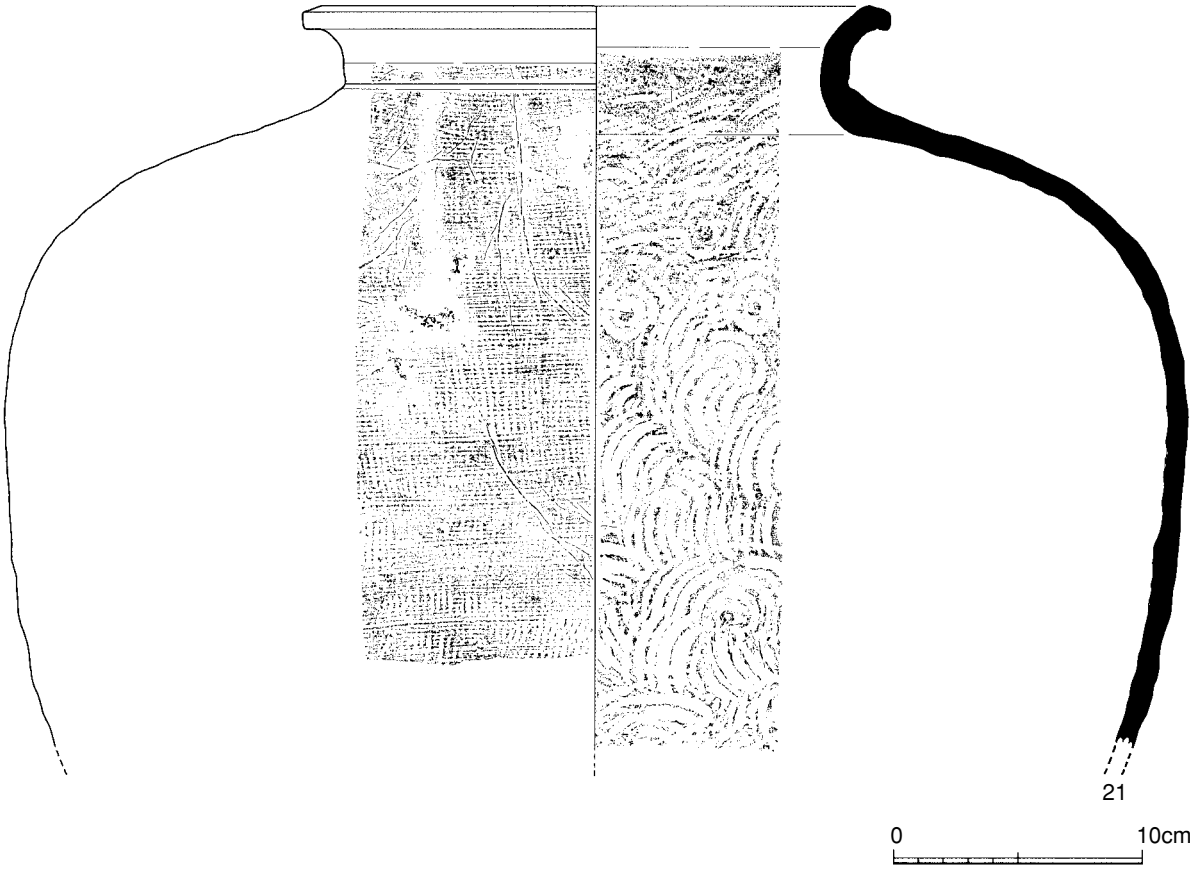
筆者も、前述したような、細かい疑義はあるものの、調査担当者の考えが妥当であると考える。

５　木柑子高塚古墳出土の須恵器・土師器（第31・32図）

調査担当者の想定どうり、古墳周溝の上部を新しい時期の溝で破壊しているとすれば、Ⅰ層（①～⑥層）から出土した古墳時代の遺物、すべてが木柑子高塚古墳出土の遺物とは言えなくなり、確実な遺物はⅡ層（⑦層）以下のものとなる。しかしながら破壊された別の古墳がすぐ側に無い限り、Ⅰ層の出土遺物も木柑子高塚古墳の出土遺物の可能性が高いと考えられること。またⅡ層以下の出土遺物との比較検討のためにもⅠ層（①～⑥層）までの出土遺物も掲載している。以下、器種ごとに記述することにする。なおⅡ層出土の遺物は、３・４・17・18・19・20であり、３・19・20は、ほぼ石人と同じレベルである。

蓋（１～３）

１は、頂部つまみから口縁部まで、ほぼ３／４が残存する。中央がわずかに窪んだつまみをもつ。また天井部と体部の境は段をなす。口縁端部は丸く仕上げている。天井部 外面はカキ日調整、体部は回転ナデ調整を



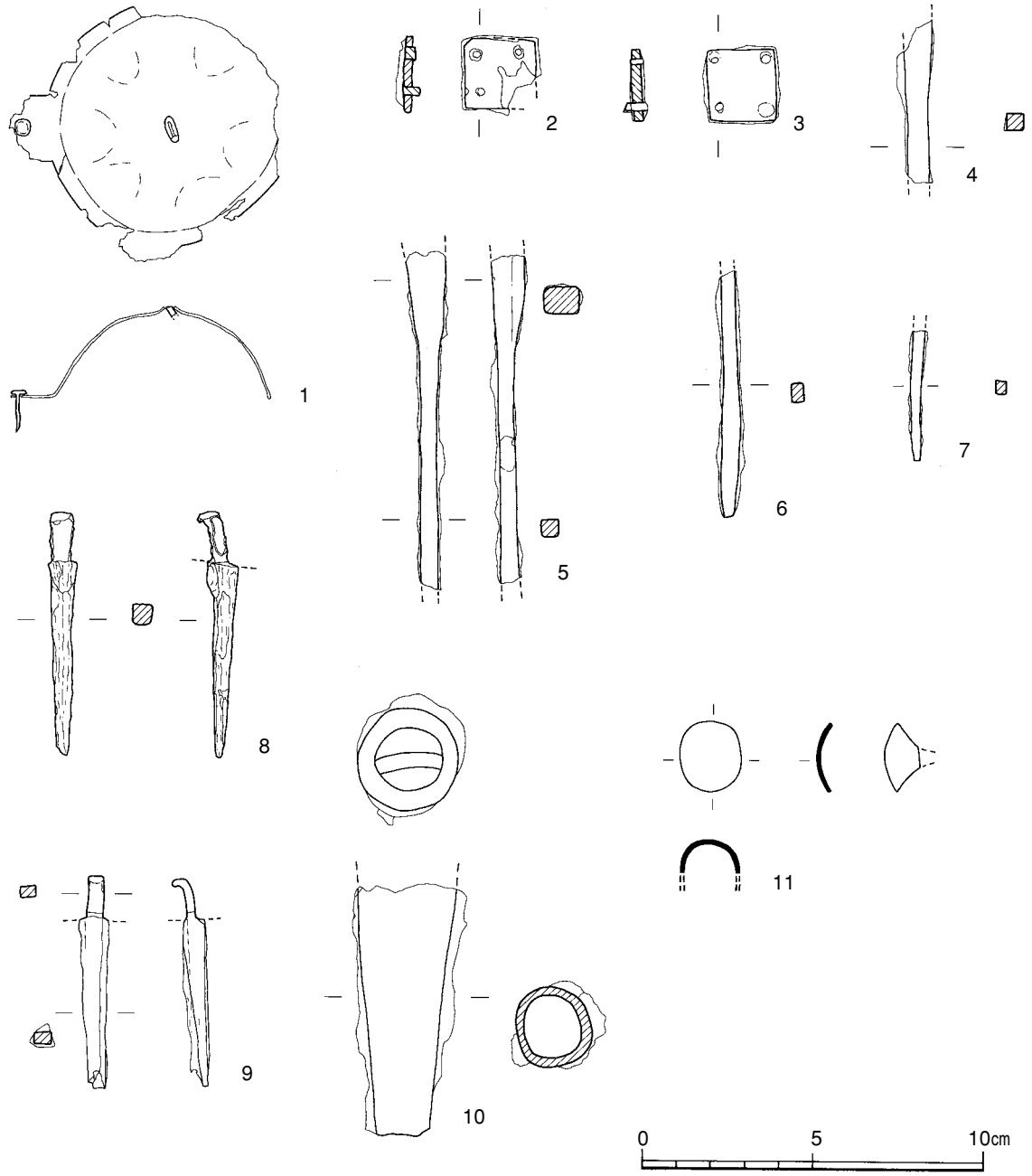
第32図　木柑子・高塚古墳出土遺物実測図

行なう。内面は回転ナデ調整を行なう。２は、中央がわずかに窪んだつまみをもつものである。口縁部分を欠損している。天井部外面はカキ目調整を行なう。内面は中央部分がナデ調整、他は回転ナデ調整を行なう。３は、口縁部をわずかに欠損するが、ほぼ完形品である。天井部の一部が窪み、かなり焼きひずみが出ている。また口縁部の内面は浅い沈線により段をなしている。天井部外面は回転ヘラ削リ後、回転ナデ調整、体部は回転ナデ調整を行なう。内面は回転ナデ調整を行なう。

坏身（４～12）

４～12までの9点であるが、４・５・６は高坏身であると思われるが、７～９、11については脚を持つかどうか不明であり、高坏を含め一括して杯身として記述する。

４は、有蓋の高坏で、脚部を欠損している。たちあがりは内湾し、端部は丸く仕上げている。底部は比較的平らである。体部下位はカキ目調整を施す。５も有蓋の高坏で、脚部を欠損している。たちあがりは４に比べると短い。内湾し、端部は丸く仕上げている。また４に比べると器高が深い。体部下位はカキ目調整を



第33図　金属器実測図

施す。６も有蓋の高坏で、脚部を欠損している。たちあがりは、直向する。また端部は丸く仕上げる。７は、たちあがりは内湾する。また短い受部が付く。８は、たちあがりは、極短く、内傾する。また極短い受部を有する。９は、たちあがりは、極短く、内に傾く。一方受部は、７・８に比べ長い。10～12はたちあがりを持たないものである。10は、底部から口縁部が緩やかに立ち上がる。11は、底部からやや外反して口縁部が立ち上がる。体部上位には、３条の浅い沈線を施す。12は「赤焼けの須恵器」で、底部から、口縁部が緩やかに立ち上がるものである。

高坏脚（13）

13は、脚部下半のみの残存である。ラッパ状に開く脚部で、上位部分に浅い沈線が施されている。残存部が少なく明確ではないが、透し窓は有さないものと考えられる。

堤瓶（14･15）

14は、口縁部から体部肩部分にかけて残存している。口縁端部は肥厚し、断面がいびつな三角形を呈する。また体部肩部にヘラ記号が認められる。15も口縁部から肩部までが残存する。14に比べ小型のものである。

甕その他（16・17･18）

16・17は甕である。16は口縁端部及び体部を欠指する。細い頸部から口縁部へラッパ状に外反する。口縁部に櫛描文を施す。また頸部中位に刻み目文を施す。17は「赤焼けの須恵器」で、体部部分のみの残存である。楕円形上の体部で、中位に浅い沈線を施し、その中位部分に穿孔を施す。また沈線より上位個所に櫛描列点文を施す。18は、器種不明のものである。

土師器（19）

球形の体部に短く外反する口縁部がつく.底部を欠損する。外面刷毛目調整、内面はヘラ削りを施す。

台付き壺（20）

20は、台付き壺で、肩部が張った体部に、ラッパ上に開く口縁部が付く。体部の最大径は やや上位に求められる。体部は２条の沈線で区画し、その間に刻目文を施す。また肩部には薄く釉がかかる。脚部は、裾部で更に屈曲する。また長方形の透し窓を上下２段３方に施す。外面は回転ヘラ削りの後ナデ調整を施す。

甕（21）

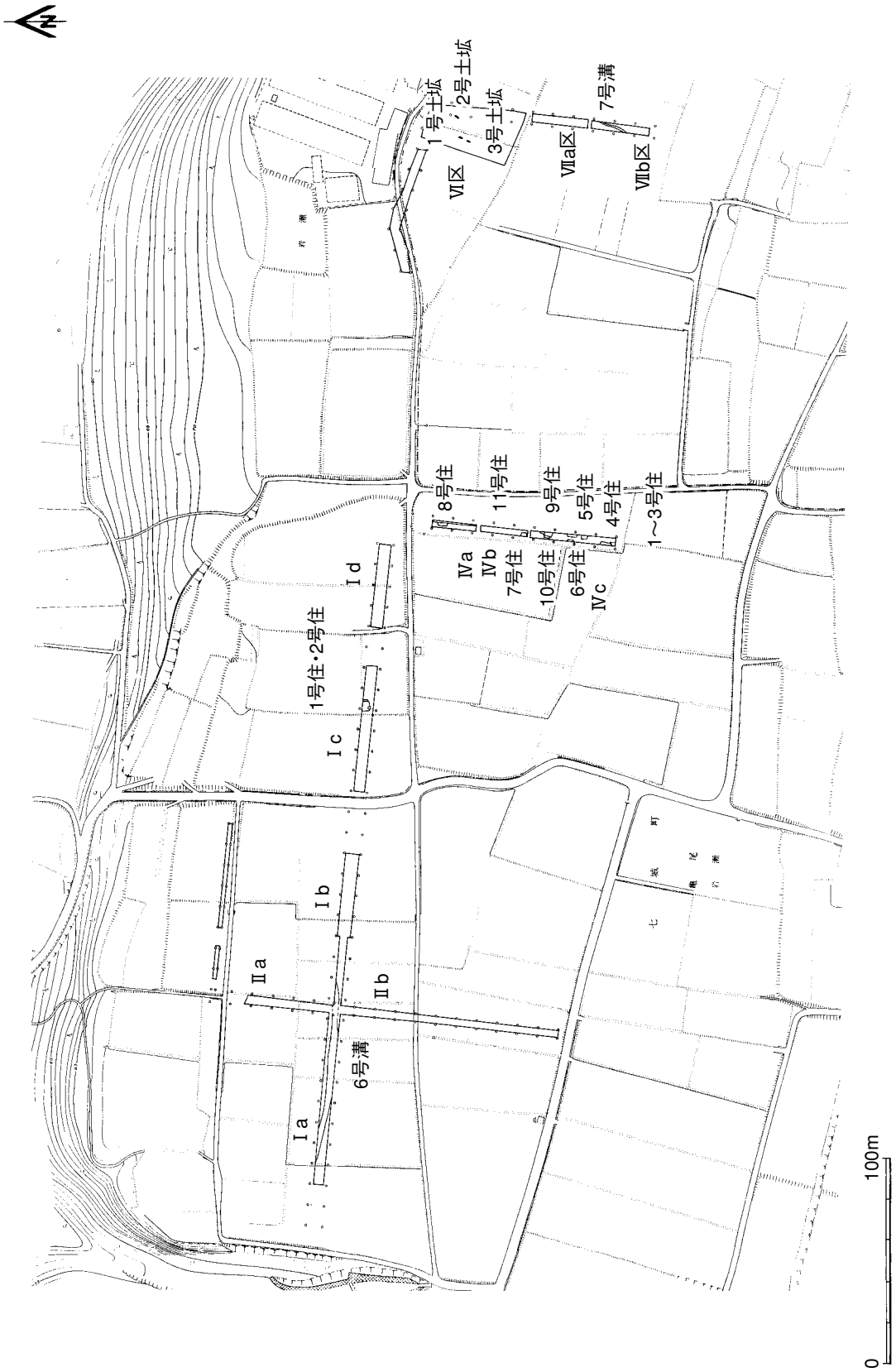
須恵器の大甕である。球形の体部に短く外反する口縁部がつく。体部外面は叩きの後ナデ調整。内面は同心円タタキの痕跡が残る。

６　金属器（第33 図）

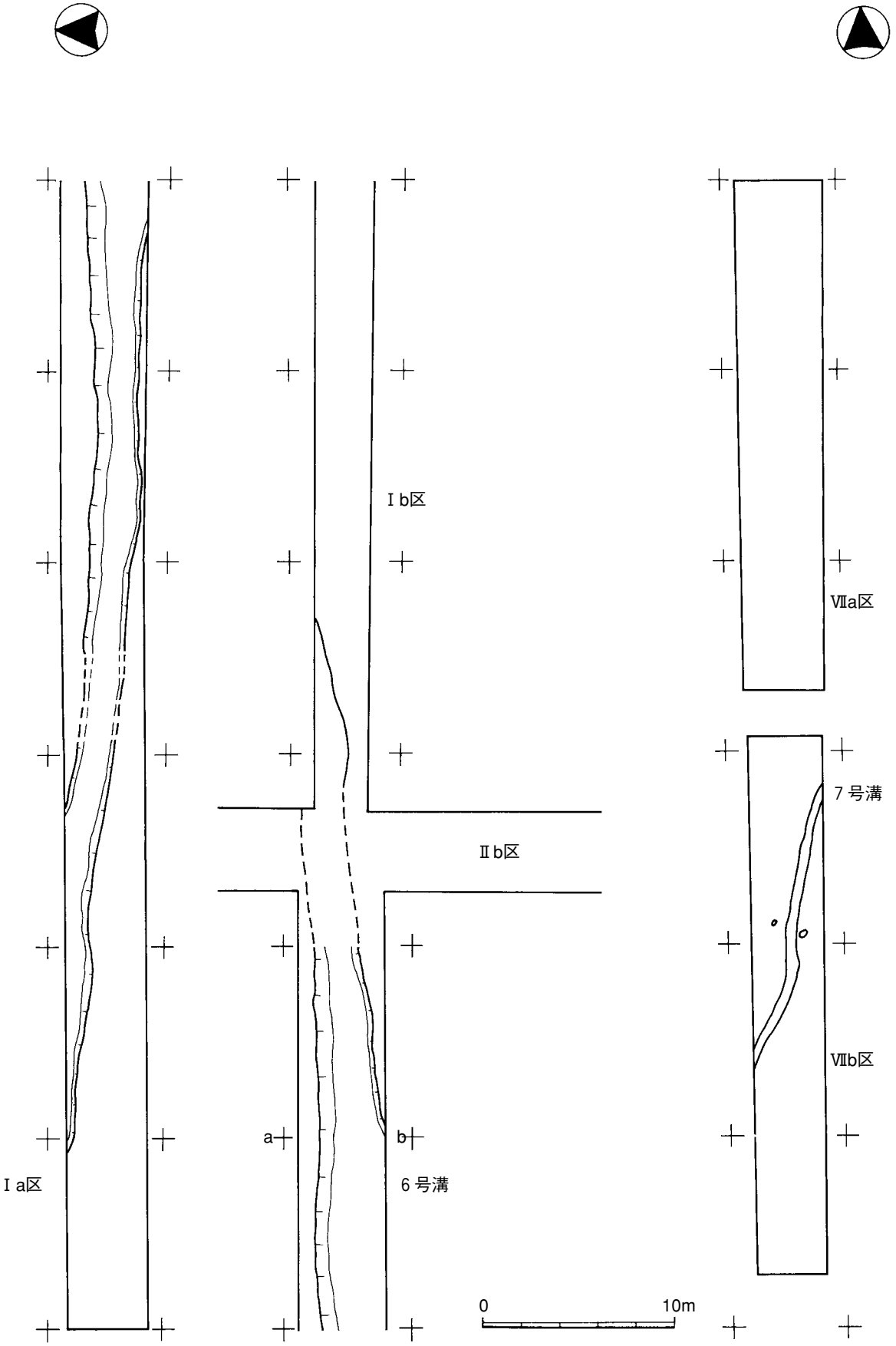
１は、雲珠で、鉄地金銅張で半球状の鉢部に脚が付く。２・３は馬具の飾り金具と思われる。正方形の形をしている。１辺の大きさは2.1cm程度である。四隅に鋲が着く。４～７は鉄鏃であると思われるが、茎の部分のみの残存である。８・９は、端部が緩やかに曲がっており、木質部分がしっかりと付着している。棺釘の可能性もあるが不明である。10は鉄製の矛の可能性があるものである。内部は空洞で、現欠損部分近くに、留め金具のようなものがついている。11は、銀メッキが施されており、側面から見ると銀杏の葉の形に似る。指輪、馬具の飾り金具等の用途が考えられるが、不明である。

７　まとめ

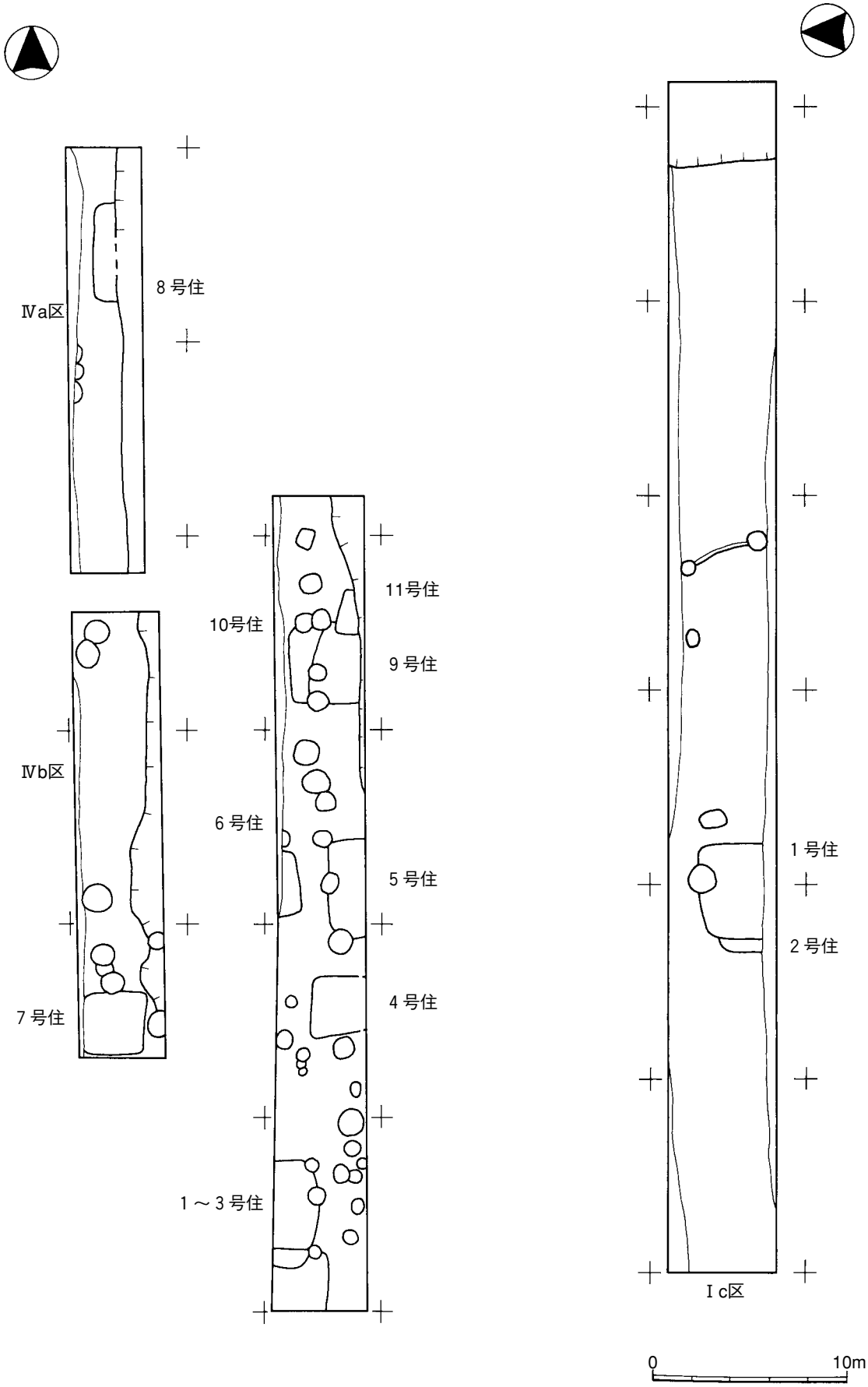
前述したように、周溝の一部分の調査であり、墳丘の形状、規模は不明であるが、周溝平面形が、調査区中央部から東端にかけてなだらかな弧を措いていることから、前方後円墳のくびれ部分にあたり、盾形の周溝をもつ古墳の可能性が高いと考えている。４体の石人も周溝内のほぼ同じ場所から出土している。また須恵器等の遺物の多くもこのあたりから出土している。この場所は後円部南側にあたり、横穴式石室の入り口



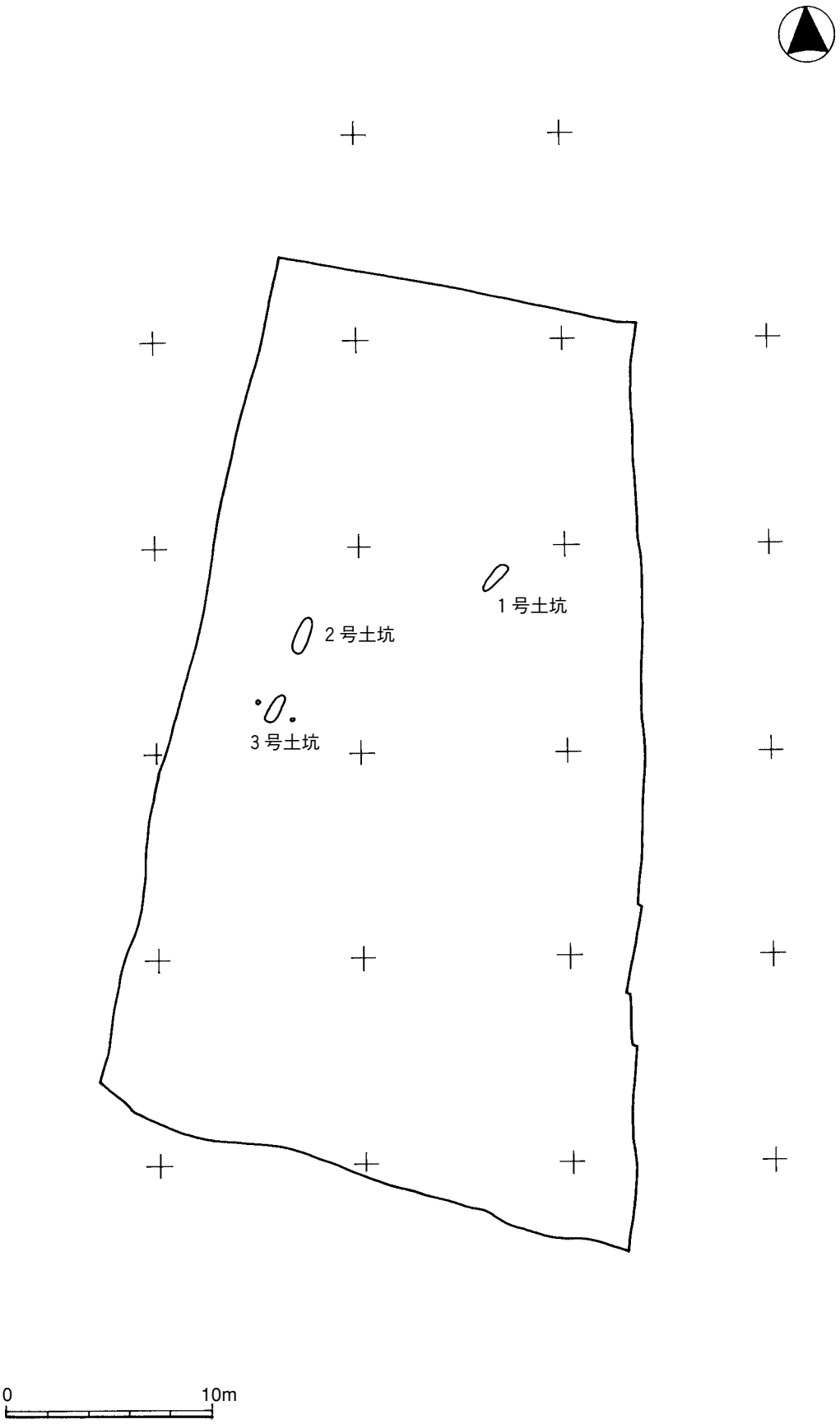
第34図　奈良時代以降の遺構配置図



第35図　奈良時代Ⅰa・Ⅰb区、Ⅶb区溝遺構（６・７号）



第36図　奈良時代以降の遺構Ⅳa・Ⅳb・Ⅳc・Ⅰc区遺構配置図



第37図　Ⅵ区遺構配置図

に通じる墓道附近の可能性が高い。周溝に落ち込んでいる遺物は、盗掘の際かきだされたものの可能性があり、石人もその時一緒に周溝に放り投げこまれたのかもしれない。石人のように重量のあるものを、わざわざ遠いところまで持っていって捨てるとは考えにくい。このことから、石人は本来の場所からさほど離れておらず、石室入り口付近にまとまって樹立していた可能性が強いと考えられる。また出土した須恵器は、田辺昭三氏による陶邑編年のMT85からTK217型式のものが見られる。ただしその多くは、TK43、TK209であり、石人が出土したレベル付近の須恵器は、TK209型式のものが多い。

今まで知られている石人の多くは福岡県八女市の岩戸山古墳や童男山古墳など一部の例をのぞいて、武装した人物を象ったものが多い。特に熊本県北部地域に見られる石人にはその傾向が顕著であると思われてきた。これは葬られた人を悪例から護るためだと言われている。静止した武装石人ではなく、高塚古墳のように動きのある個性的な造作をほどこしている石人の出土は珍しく、当時の風習や葬送儀礼の様子を表しているのかもしれない。

また、木柑子高塚古墳と古墳Ｃ（２号円形周溝）の関係については、木柑子高塚古墳の周溝により、古墳Ｃの溝が破壊されているとの調査担当者の所見であり、確かに平面形をみると木柑子高塚古墳の周溝により、古墳Ｃの溝が破壊されているように見える。しかし出土している須恵器からは、かなりの期間同時併存している風である。また土層の切り合いは、古代の溝で両者ともに破壊を受けているため、前後関係は不明であり、今回の部分的な調査では、先後関係の判断は保留したい。

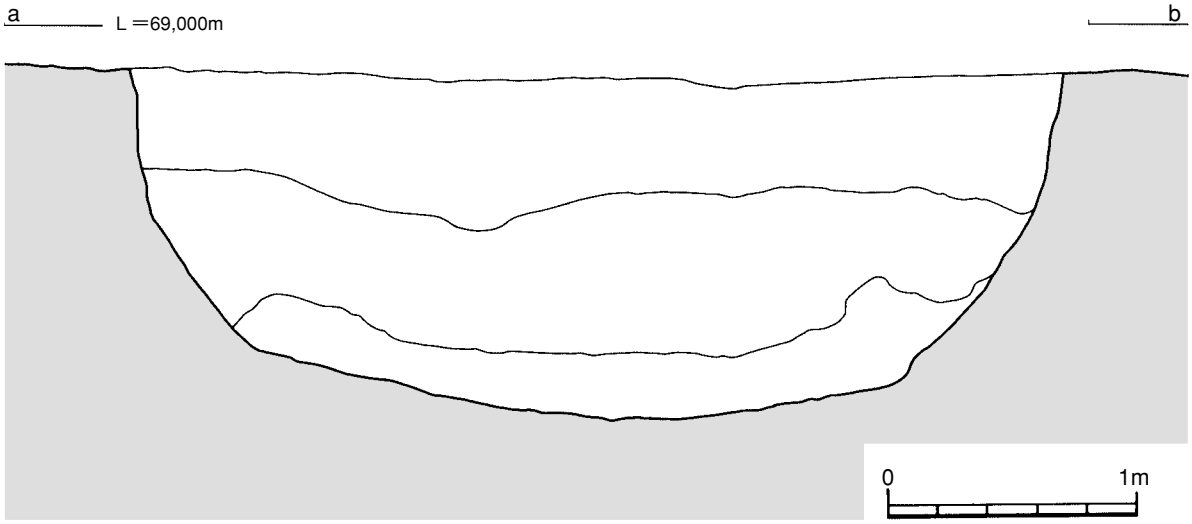
第３節 奈良時代以降の遺構と遺物

その多くは、９世紀・10世紀代に属する遺物である。遺構としては調査区のＩ区で東西に走る溝が、またⅦb区で南北に伸びる溝が検出されている。その他Ⅵ区では土坑が３基、Ｉc区及びⅣa区で竈を持っていただろう竪穴式住居跡が13基程検出されている。

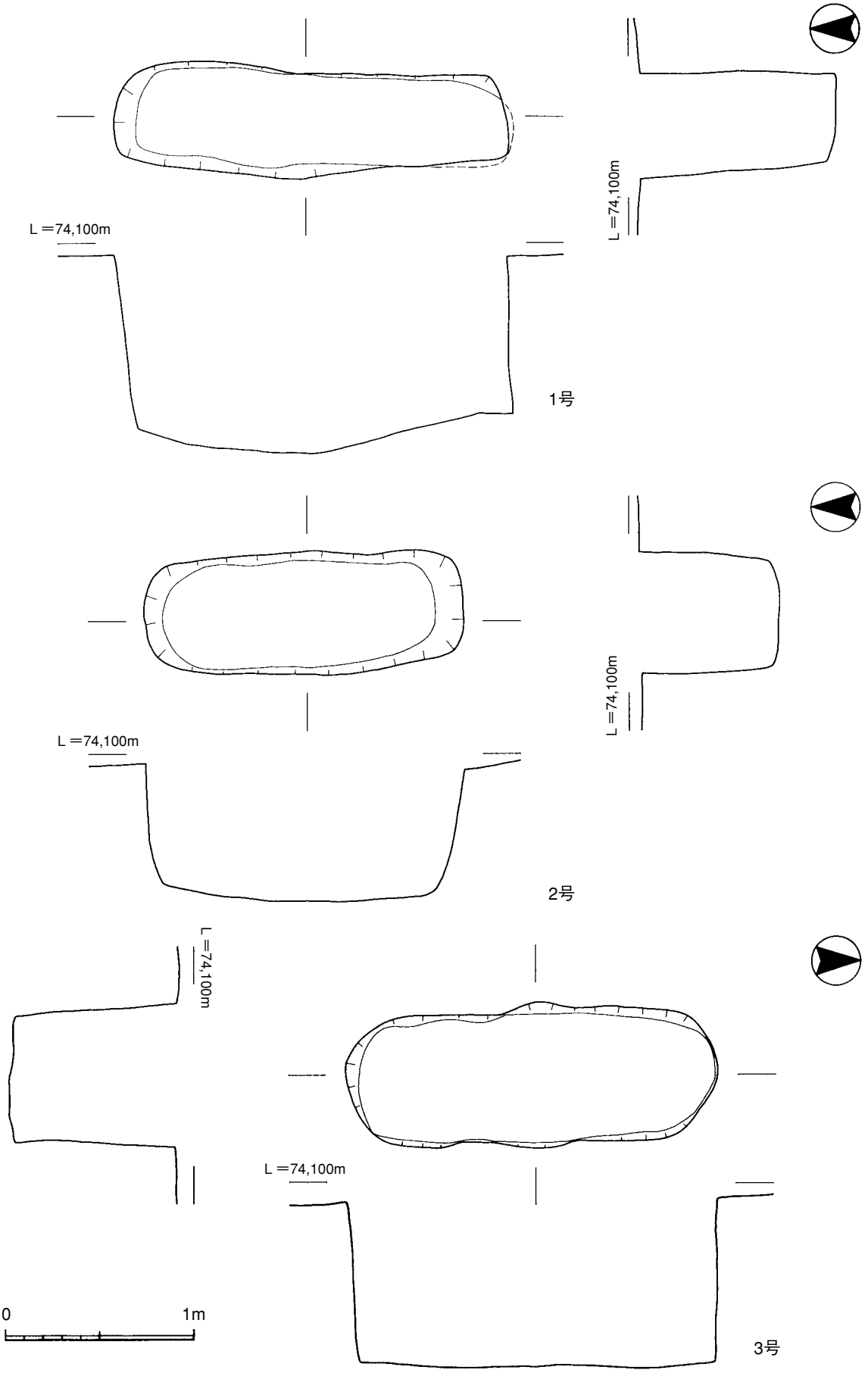
１　溝遺構

①　６号溝（第34・35・38図）

調査区Ｉa区、Ｉb区で検出されている。ほぼ東西に伸びていき、現在長90m程で、幅は２～３m程である。その断面形は浅い緩やかなＵ字形を呈す。遺構検出面はⅢ層である。検出面での溝の幅は3.5m程度である。



第38図　Ｉa区６号溝土層断面図



第39図　Ⅵ区土坑実測図

深さ1.3mの幅は2.5m程度である。土層ベルトの断面を観察した結果、溝の埋土は1.3層に分けられる。上層から順に１～３層とする。１層は、暗茶渇色土層で、30cm程度である。２層は、黒色土層で、赤土粒が混じる。厚さは30cm程である。3層も、２層と同じく黒色度であるが、不純物をあまり含まない。

遺物としては、第42図の28・36が上層より出土している。

②　７号溝（第34・35図）

調査区Ⅶb区で南北に伸びる溝が検出されている。現在長17m程で、幅は１mに満たない。残念ながら、溝の断面形及び土の堆積状況等の詳細は不明である。

2　竪穴式住居跡（第36図）

Ⅰc区及びⅣ区で竪穴式住居跡が13基確認されている。道路及び水路幅の調査であるため、住居の全容を知ることが出来ないが、1辺が４m～５mの大きさの住居跡が多いようである。住居に伴う柱痕跡は検出されていない。また遺構配置図上に住居の床面の一部を赤く塗ってあることから、竈付きの住居であった事が推察される。削平され残存状況が悪かったためなのか、その構造等詳細については不明である。住居跡からの出土遺物は、第40図に掲載しているが、墨書土器が多く見られる。

3　土坑（第37・39図）

調査区Ⅵ区において３基の土坑が確認されている。いずれも隅丸の方形プランで、長軸をほぼ南北にとる。その規模も1.5m～２m、幅0.5m～0.6m、深さ0.7m～１m程度である。残念ながらこの土坑の性格は不明であるが、深さが一般的な土坑に比べると深いというのが特徴である。埋土の色や堆積状況は残念ながら不明である。

①１号土坑（第39図１）

隅丸の方形プランで、長軸をほぼ南北にとる。その規模は、長さ約2.0m、幅約0.5m、深さ約１mである。

②２号土坑（第39図２）

隅丸の方形プランで、長軸をほぼ南北にとる。その規模は、長さ約1.7m、幅約0.5m、深さ約0.7mである。

③３号土坑（第39図３）

隅丸の方形プランで、長軸をほぼ南北にとる。その規模は、長さ約1.9m、幅約0.7m、深さ約0.85mである。

4　奈良時代以降の出土遺物（第40・41・42図）

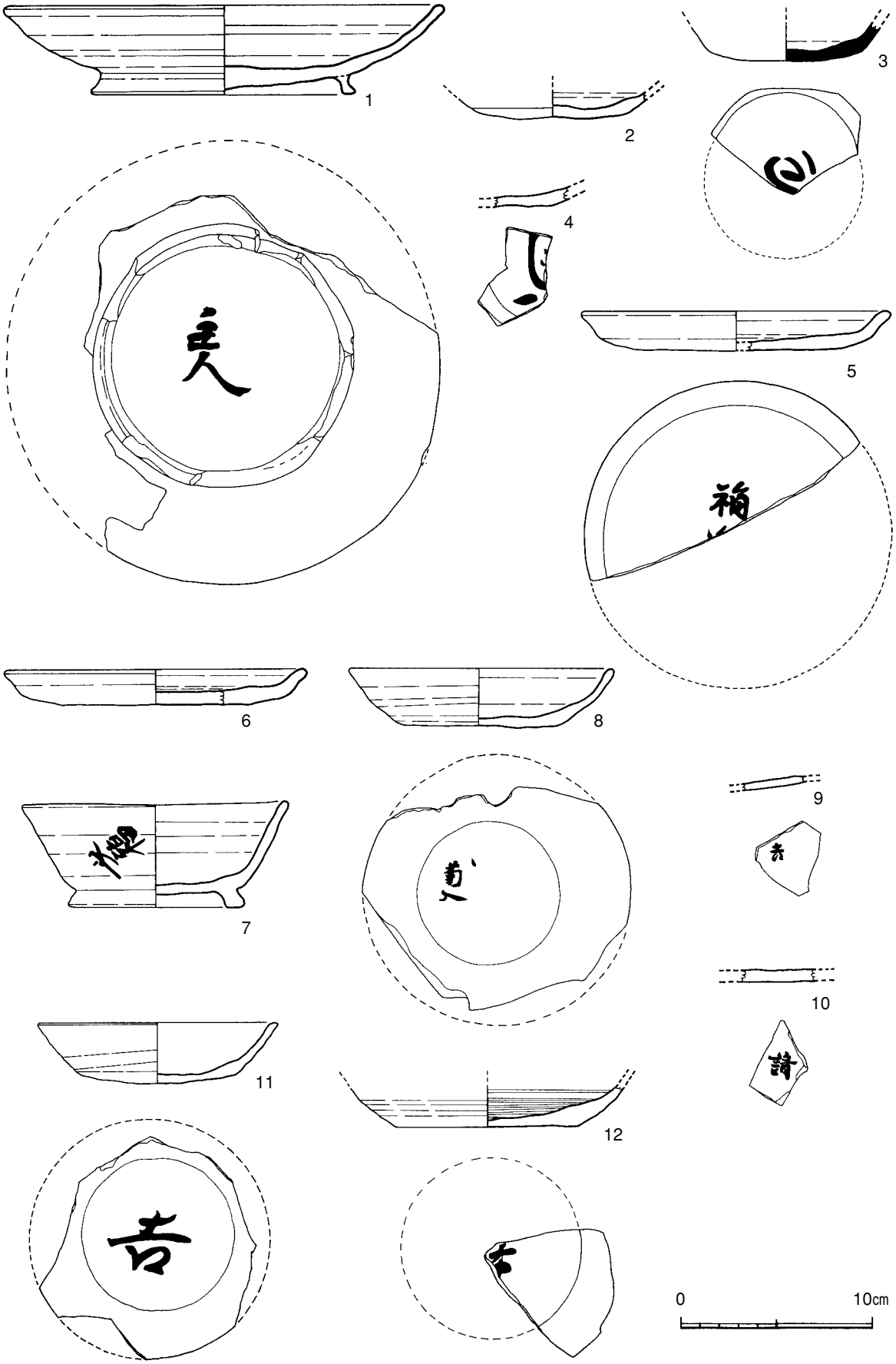
岩瀬・木柑子遺跡では、奈良・平安時代の土師器・須恵器も多数出土している。また土錘、スラグ類も出土している。その中で注目されるのは、墨書土器の多さである。また岩瀬･木柑子遺跡の南約300mの小迫遺跡（平成10年度七城町教育委員会調査）でも、多量の墨書土器が出土している。今回は、墨書土器を中心に掲載した。

大きく坏、椀、皿に大別できる。いずれも回転ヘラ磨きを施し、赤く彩色されているものが多い。

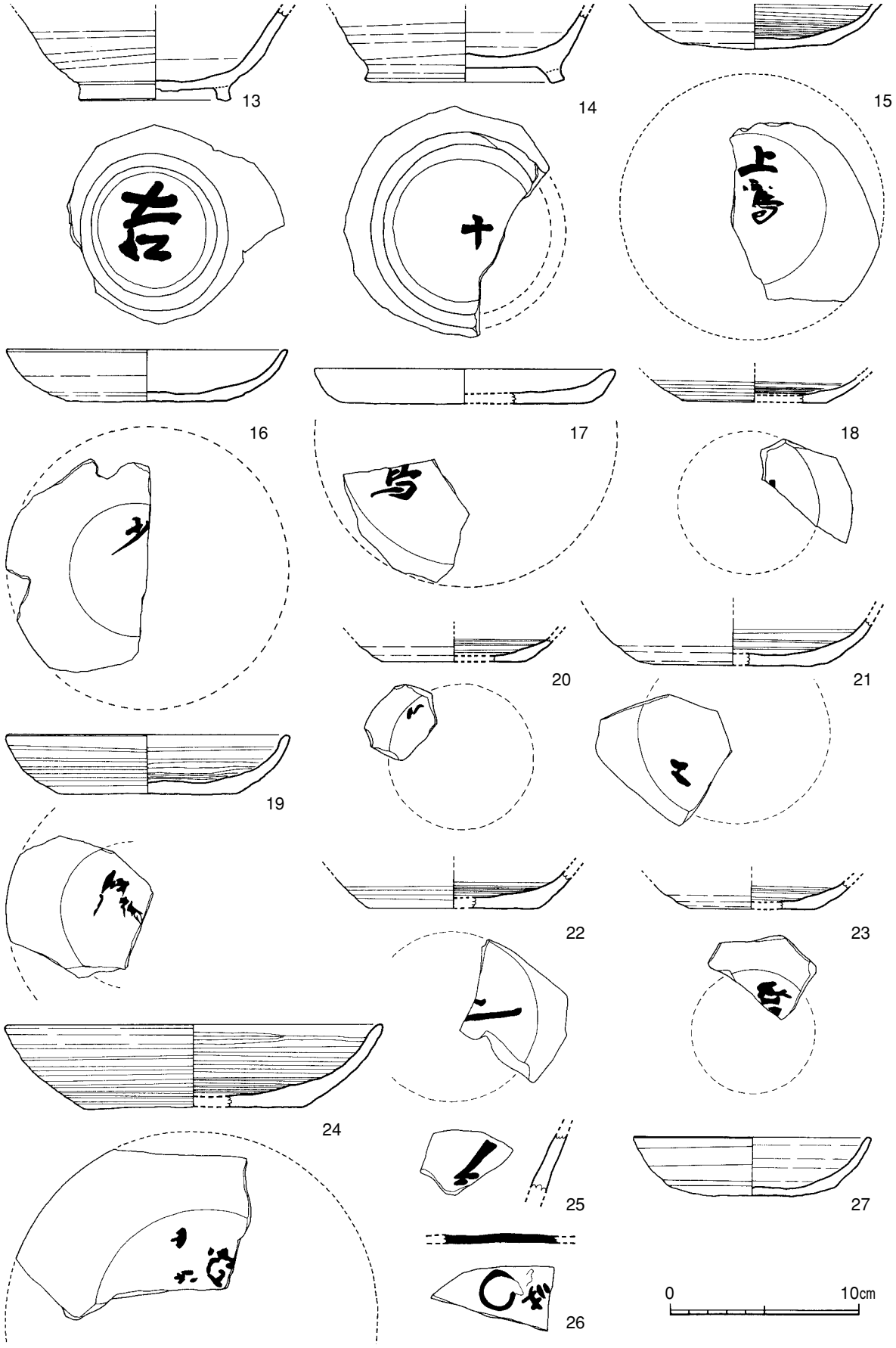
Ⅳ区Ⅰ区の竪穴式住居跡出土品以外に、Ⅰa区やⅡb区から出土している。小破片で掲載していないものも含め、確認された文字資料は46点に及ぶ。以下出土地点ごとに記述する。

竪穴式住居跡出土の土器（第40 図）

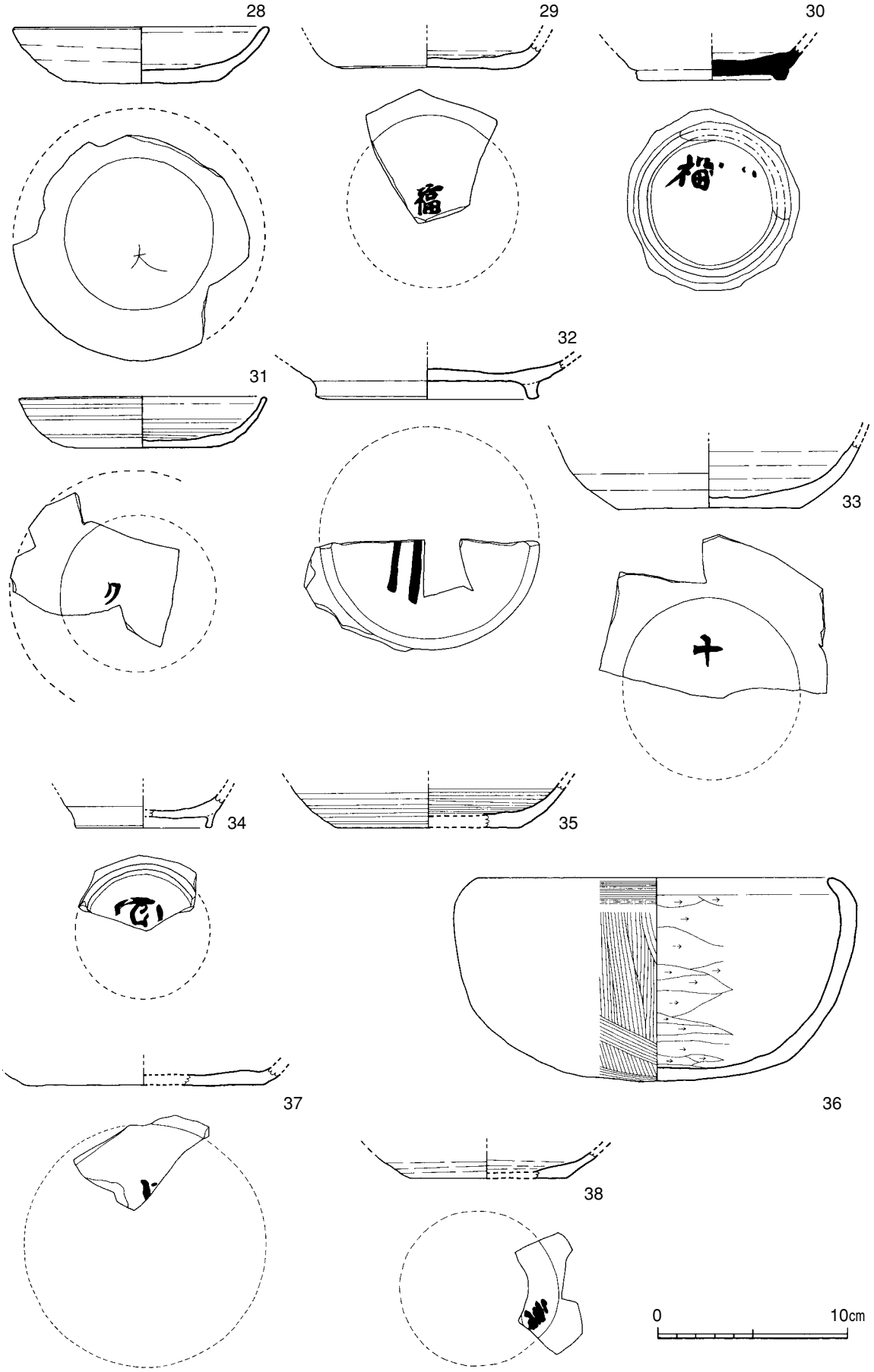
１～３は、３号竪穴式住居跡出土である。１は高台付きの椀で、底部から緩やかに立ち上がり、底部と体部の境が明瞭ではない。文字は、底部外面中央に、「主人」と記している。最大径23cmで、大形である。２は、坏で、墨書は認められない。３も坏と思われる。底部外面に墨書が認められるが､判読でできない。４～６は４号竪穴式住居跡出土である。４は､墨書土器の小破片で、恐らく底部外器面部分と思われる。回転ヘラ磨き



第40図　墨書土器等実測図



第41図　墨書土器等実測図



第42図　墨書土器等実測図

が認められる。5は、坏で、底部外面に「福○」の2文字が描かれているが、2文字目は、不明である。6は皿であるが、墨書は認められない。7高台坏椀の体部外面に「文福」と描かれている。5号竪穴式住居跡出土である。8は、坏で、底部外面の左端に、やや小文字で「菊入」と描かれている。5号若しくは6号竪穴式住居跡出土であるが、特定できない。9・10はいづれも小破片で、9は［六？］、10は「請」の文字が記載されている。9は7号、10は8号竪穴式住居跡出土。11は、坏で底部外面中央に「吉」の1文字が大きく記載されている。重複する9号10号・11号竪穴式住居跡からの出土であるが、特定できない。12は、坏で、中央に「布？」と描かれているようであるが、判読不能である。Ⅰc区の1号・2号竪穴式住居跡が重複する箇所からの出土で、特定できない。

Ⅱb出土の土器（第41図）

13は、高台付き椀で、底部外面中央に「吉」の一文字を大きく記している。14は、高台付き椀で、底部外面に「十」の文字が記されている。15は、坏で底部外面のやや上位に「上鳥（島）」の文字が記されている。16も坏で、底部外面上位に「少」の部分だけが認められる。17は皿で、底部外面に「鳥（島）」らしき文字が認められる。18は坏で、底部外面に墨書文字が認められるが、判読不能である。19～23も、坏で底部外面に墨書文字が認められるが、判読不能である。24は、やや大形の坏で、やはり底部外面に墨書文字が認められるが、判読不能である。25・26も墨書土器であるが、少破片で、判読できない。また26は須恵器である。27は坏であるが、墨書は認められない。

Ⅰa区出土の土器（第42図）

28は坏で、底部外面下位に「大」の文字が記されているが、これは墨書ではなく、ヘラ状工具により刻まれたものである。29も坏と思われ、底部外面に「福」の文字が、墨書で記されている。30は須恵器で、高台付き椀である。底部外面上位に「福」の一文字を記している。31は坏で、やはり底部外面に文字を記しているが、一部分のみで判読不能である。32は高台が付くもので、やはり底部外面に文字を記しているが、一部分のみで判読不能である。33は高台を持たない椀で、底部外面に「十」の文字をきしている。34は高台を持つもので、底部外面に文字を記しているが、判読できない。35は高台を有さない椀で、墨書は認められない。36は鉢で、6号溝中、上層からの出土である。外器面はハケ目調整、内器面は、ヘラ削り調整を施している。

Ⅶ区出土の土器（第42図）

37・38はいずれも高台を持たないものである。やはり底部外面に墨書文字が認められるが、少破片で判読できない。

以上であり、文字を判読できるものもそれ程多くはないが、その中で吉祥句を表しているものが比較的多い。第40図5の「福○」、7の「文福」、11の［吉］、第41図13の［吉］、第42図29、30の「福」などがそうである。その他地名らしいものとして第41図15の「上鳥（島）」や第40図8の「菊入」がある。また人を示すものとしては、第40図1の「主人」がある。

5　まとめ

奈良・平安時代頃の時期で特筆すべきは、墨書土器の多さである。今回は道路・水路幅の調査のため、遺構は、竪穴式住居跡のみであるが、堀立柱建物跡等の遺構も存在するはずである。また南約300mの地点を、七城町教育委員会が平成10年度に調査されている。そこでは、竈付き竪穴式住居跡、掘建柱建物跡、墨書土器が出土しており、官衙跡の可能性もある。

第Ⅳ章　総括

Ⅰ　はじめに

岩瀬・木柑子遺跡においてその中心となるのは古墳時代であろう。従来菊池川流域は、装飾古墳の集中や前方後円墳の分布など、肥後の古墳文化を代表する地域として注目を浴びてきた。その中心は現在の玉名市・菊水町を中心とした菊池川下流域の地域と、山鹿市・鹿央町を中心とした菊池川中流域であった。それに比べると菊池平野は菊池川流域のやや上流に位置し、菊池平野の前方後円墳としては、七城町の蛇塚古墳と菊池市の木柑子フタツカサン古墳のみであり、両古墳とも、詳細が不明で、フタツカサン古墳の石人が注目される程度であり、菊池川中流域である山鹿市のチブサン古墳や鹿央町の岩原古墳群を中心とした地域と比べると見劣りのするものであった。

ところが、今回の調査及び平成10～12年の菊池市教育委員会の調査で花房台地上には大規模な古墳群が存在することが判明した。フタツカサン古墳・高塚両前方後円墳を中心に方形若しくは円形の周溝墓、小円墳が広がり、菊池川に面した崖面には横穴墓群が点在する。この古墳群は七城町岩瀬から菊池市木柑子にまたがり数百メートルにわたって東西に長く伸びていると考えられる（第43図）。これはかなりの規横を持つ古墳群であり、高塚古墳調査担当者の古森氏は、これらの大字をとって「岩瀬・木柑子古墳群」と呼称することを提唱している。特に6世紀代においてこれほどの規模の古墳が存在することについて、木柑子高塚古墳を中心とした、この地域の古墳群の特色を述べ、幾つかの問題点を抽出することで総括に代えたい。

Ⅱ 木柑子高塚古墳・フタツカサン古墳について

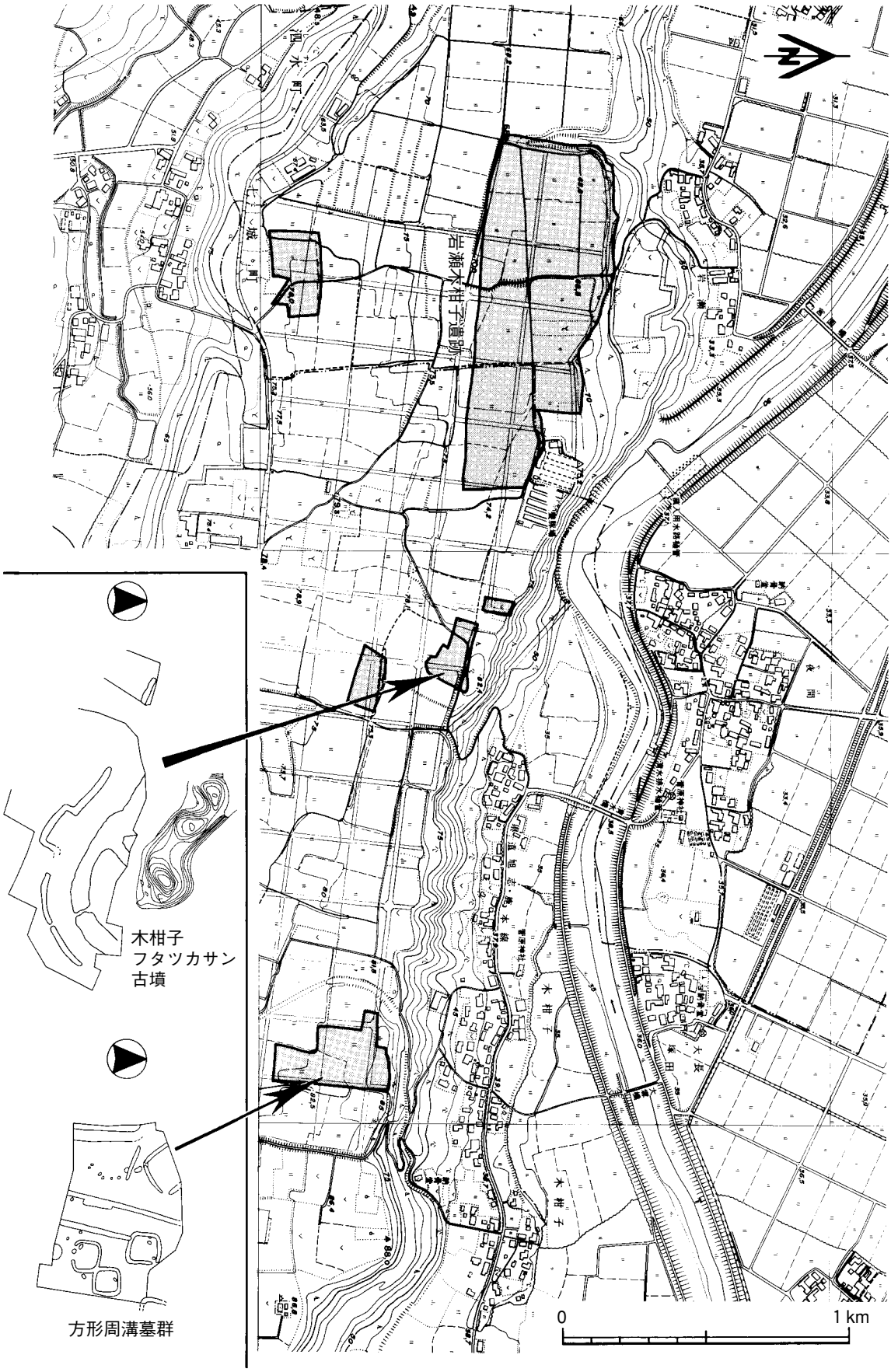
1 木柑子高塚古墳・木柑子フタツカサン古墳の概要と問題点

木柑子高塚古墳については、その周溝の一部のみの調査であり、その墳形・規模について詳細は不明であるが、周溝が緩やかな弧を描くことから盾形の周溝を持つ前方後円墳と想定している。出土した須恵器は、赤焼けの須恵器を含めて、肉眼的特徴より、八女産の須恵器の可能性が高いと言う（註）。出土した須恵器は、田辺昭三氏による陶邑編年のMT85からTK209型式にかけての時期であり、6世紀後半の築造と考えられ、他の菊池川流域では、前方後円墳の築造が停止する時期に当たる。また石人が4体出土することも異例であり、その造詣はきわめて特徴的である。

一方木柑子フタツカサン古墳は、二重の周溝を巡らし、全長約65m、周溝を含めると総長100m前後になる前方後円墳で、石人と蓋形の石製表飾を有し、出土する須恵器はTK10型式のものが主体を占めており、６世紀前半頃の築造と考えられている（阿南 2000）。この時期の菊池川流域の前方後円墳としては、下流域では、大坊古墳（全長42m）、中流域では、チブサン古墳（全長44m）があるくらいである。

以上のことから、次のようなことが問題点として浮かびあがってくる。

まず第１点目は、菊池平野では６世紀以前は、前方後円墳は蛇塚古墳（全長約21m）１基のみであり、その他には、やはり５世紀代の初期横穴式石室である長明寺坂古墳群（円墳）があるくらいで、同じ菊池川下流域･中流域の古墳群と比べかなり貧弱なものであった。ところが６世紀代に入ると、木柑子フタツカサン古墳（全長65m）のような二重周溝をもつ前方後円墳が出現し、菊池川の下・中流域で前方後円墳の築造が停止する６世紀後半以降になっても、木柑子高塚古墳が築造されており、菊池川流域の他地域を圧倒するようになってくるということである。柳沢氏によると、前方後円墳集成編年の9期頃に、明確な首長系譜がなかった地域に新たに首長墓が出現するとされており、豊後日田、肥前鳥栖、肥前壱岐などを例としてあげられている（柳沢 2000）。菊池平野の例はこれに該当するか否か。仮に該当するとすれば、その背景はどのようなものであるのだろうか。特に豊後日田地域では、ほぼフタツカサン古墳と同時期に、やはり石人が出土し、二



第43図　岩瀬・木柑子古墳群遺構配置図

重周溝もつ日田市天満2号墳（墳長60m）が出現していることは注目される。

２点目としては、須恵器や石製表飾に見られる八女地域との密接な関係が認められることであり、その意味付けである。特に八女地域は、磐井の墓といわれている岩戸山古墳が存在する地域である。木柑子高塚古墳の築造は６世紀後半と考えられ、それは磐井の乱後のことである。文献史において「磐井の乱」後に「火」君の勢力が拡大することを指摘されているが、それらとの関連がどうなっているのか、興味深い。

残念ながら、今回の部分的な調査で、そこまで論じることは出来ないし、その能力もないが、その手がかりとして、木柑子高塚古墳から出土した石人４体と木柑子フタツカサン古墳から出土し、県北で初めての出土例となる蓋形の石製表飾及び石人を材料として考えてみたい。

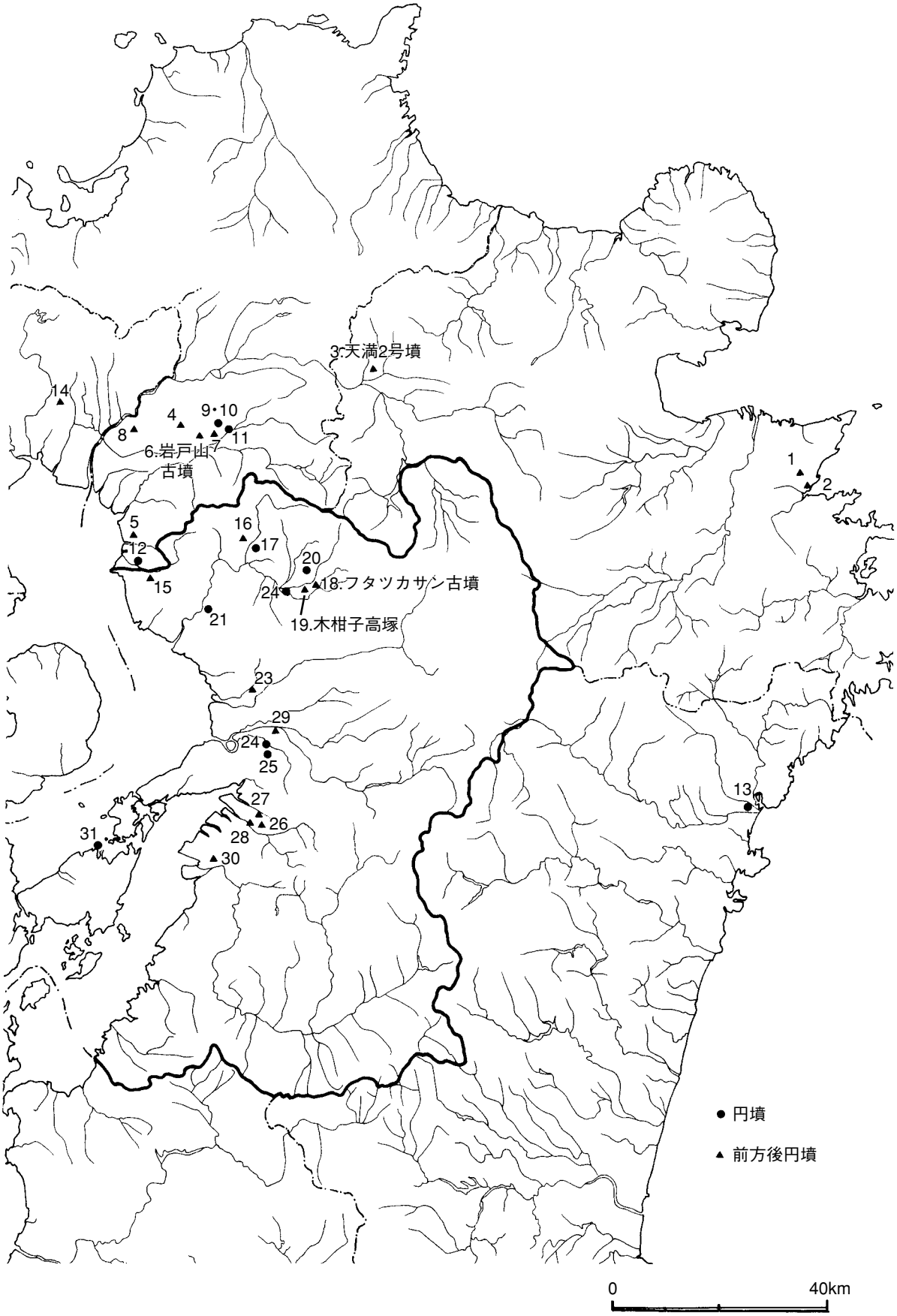
２　石製表飾から見た木柑子高塚古墳

①　石製表飾の消長（第２表）

従来石人・石馬と呼称され、形象埴輪ないし木製葬具をモデルに製作され、古墳の墳丘上や墳丘周囲に樹立された石製造形物である。石製表飾は5C前半代から導入され始め、６C前半代の岩戸山古墳・野津古墳群・菊池川流域で最盛期をむかえる。有明海沿岸を中心に分布し、埋葬施設、装飾文様と共に、同地域が共通の墓制の様相を有していた証拠と考えられ、政治的「連合体」の存在を想定されている（小田　1974、柳沢1987）。石製表飾の変遷は大きく３期に区分される（柳沢　1992）。それによると１期（５世紀初頭～中葉）は、短甲（臼塚・下山古墳）及び甲冑形石製品（石人山・石神山古墳）のみで構成される。この時期には、短甲・甲冑形の石製品に防御と示威の表示を認めている。次の２期（５世紀中葉～６世紀前葉）は、短甲・甲冑形のほかに、椅子形・家形・舟形・蓋形・石見型盾形などの品目が加わる。肥後でも製作が開始され、菊池川流域の清原台地や小野崎遺跡で家・椅子形・舟形石製品など器財形の石製表飾が作られるようになる。その意義は、形象埴輪の世界を石に刻み込んだものと考えられているが、現在までのところ単発的出土であり、形象埴輪の一部のみを石に置き換えた程度であったのかもしれない。最後の３期（６世紀前葉～後葉）になると、岩戸山古墳において80体以上の多種多様な石製表飾が製作され、以前になかった各種人物・動物・盾・靫形が加わる。形象埴輪の表示する祭式を写しとった可能性が高く、形象埴輪に見られる首長霊継

第２表　石製表飾の消長

年代	区分	集成時期区分	特　色	古　墳　例	意　識
400	１期	5	○石製表飾の出現	短甲形（臼塚・下山古墳）	・防御・威嚇
		6		甲冑形（石神山・石人山古墳）	
450	２期	7	○甲冑形石製品以外に、器財形石製品目が加わる。 ○肥後で石製表飾製作開始。	西原古墳（蓋形・石見型盾） 清原台地（短甲・家・椅子？）	・器財形埴輪を石で表現。 ・形象埴輪の世界を石に刻む。
		8		三ノ宮古墳（甲冑形・蓋形？） 小野崎遺跡（舟？）	
500		9			
	３期		○岩戸山古墳において多種多様な石製品目（各種人物・動物・靫・盾形）が加わる。 ○特に、腕の表現がある人物形石製品が加わる。	岩戸山古墳（80体以上） チブサン・臼塚・フタツカサン古墳 野津古墳群	・形象埴輪の祭式を石で表現。 ・首長権継承の儀式、首長生前の祭祀を表示
550		10		木柑子高塚古墳 童男山古墳3･22号	
600					



第44図　石製表飾出土　分布図

第 3 表　石製表飾出土地名表（九州管内）

番号	地域	古墳名	墳形	全長	時期		石人		動物	器財									備考
						短甲	武装	武装以外		蓋	石見型盾	盾	靫	刀	家	椅子	舟	不明	地域
1	大分	臼塚	◎	87	5	○													
2	大分	下山	◎	65	5	○													
3	大分	天満２号	◎	60	9		○？												
4	福岡	石人山	◎	120	6		○												
5	福岡	石神山	◎	54	6		○												
6	福岡	岩戸山	◎	138	9		○	○	○	○	○	○	○	○					
7	福岡	伝乗場	◎	70	10													○	
8	福岡	伝御塚	◎	78	8													○	
9	福岡	童男山３号	円	16	10			○											
10	福岡	童男山22号	円	16	10			○											
11	福岡	豊福					○？												
12	福岡	弥平山				○													
13	宮崎	野地						○？											
14	佐賀	西原古墳	◎	55	7					○	○								
15	熊本	三ノ宮	◎	47	8		○			○？									県北部
16	熊本	チブサン	◎	44	9			○											県北部
17	熊本	臼塚	円	29	9		○												県北部
18	熊本	フタツカサン	◎	65	9		○？			○									県北部
19	熊本	木柑子高塚	◎	？	10			○											県北部
20	熊本	袈裟尾高塚	円	18	10								○						県北部
21	熊本	清原			8 ？	○？									○	○？			県北部
22	熊本	小野崎			8 ？												○？		県北部
23	熊本	富ノ尾	◎		9			○											県中央部
24	熊本	北原１号	円									○							県南部
25	熊本	石之室	円	30	8					○									県南部
26	熊本	天堤	◎							○									県南部
27	熊本	姫ノ城	◎	86	9					○	○		○						県南部
28	熊本	中ノ城	◎	102	9					○									県南部
29	熊本	今城大塚	◎	42.5	10													○	県南部
30	熊本	八代大塚	◎	55.7	9													○？	県南部
31	熊本	竹島	円		6													○	県南部

参考文献；第3回九州前方後円墳研究会資料集　九州の埴輪その返還と地域性　2000年
時期は、前方後円墳集成編年10期区分による。　◎；前方後円墳、円：円墳

承儀礼祭式を石製品に置き換えたものと考えられている。肥後においては、人物形は、肥後北部の菊池川流域の古墳に見られ、蓋形、石見型盾などの器財形石製品は、肥後南部に多く認められる。

② 人物形石製品の変遷（第４表、第45図）

大きくは第４表のような変遷になるが、今回報告した木柑子高塚の石製品及び木柑子フタツカサンの石製品は、３期に属する。菊池川流域において３期の特徴としては、人物像が多く見られると言うことである。特に今回報告した木柑子高塚古墳の人物像は特徴的であり、動きを伴うものとしては、岩戸山古墳や童男山３号墳の赤子を背負う女性像があるくらいであり、指先に至るまで表現しているものは、岩戸山古墳（下帯をつかむ石人）とフタツカサン古墳の人物像くらいである。また同一古墳から２体以上の人物像が出土する例は他に岩戸山古墳のみである。そこで人物像について人物形石製品の変遷を見ていきたい。第４表は変遷をまとめたものである。ほぼ各古墳は時代順に並べてある。

その流れは、当初短甲形（第45図１）のみの表現だったのが、冑とセットで表現するために頭部をつけたもの（甲冑形・第45図2・3）が出現する。２期において、清原台地の短甲形石製品や三ノ宮古墳の甲冑形石製品など、かなりデフォルメされたものも出現する。しかし、いづれも、腕や脚は表現されておらず、厳密には人物像としては捉えられない。ところが３期の岩戸山古墳になると、甲冑形に上腕をつけた（奴凧形）もの、脚を表現したもの、甲冑の表現が無いもの、女性像など、本来的な人物像が登場する。

その岩戸山古墳とほぼ時を同じくするか、わずかに後出する時期に、菊池川中流域のチブサン古墳（奴凧形・甲冑の表現無し）、臼塚古墳（奴凧形・甲冑・靫表現有り）や県央の富ノ尾古墳群（奴凧形・女性）が出現する。従来石人と言えば甲冑を身に纏った人物が古墳の被葬者を守護するイメージであったが、甲冑の表現があるものは岩戸山古墳以外には、確実なものは山鹿市の臼塚古墳位であり、稲荷山古墳にいたっては乳房を表現した女性像であり、少なくとも邪悪なものから被葬者を守護する目的で樹立したものではないようである。また木柑子高塚古墳では、武装人物は認められず、文人と思われる人物（石人１）や、首のない前かがみに壷を抱えた人物像（女性？・衣服表現有り、石人２）、妊婦（石人３）、ひょっとこのような仮面を被った人物（石人４）であり、木柑子高塚古墳においても、悪霊から守護するといった要素は認められない。特に首のない人物像、妊婦は他に類例がないのではと思われる。しかし、腕、脚の表現、性器の表現等個々の要素はすべて岩戸山古墳に認められ、静止像でないものも岩戸山古墳、童男山古墳に認められる。特に岩戸山古墳の別区から出土している石製品には、正座する人物、短甲表現のない人物、女性像、性器を露出させたり褌をつけた人物像、酒容器の坩等が有り、柳沢氏は、正座する人物は、新首長に誅を奉上し忠誠を誓う姿、短甲表現のない人物は文人像に、女性像は供膳を司る一群に、性器を露出したり、褌をつけた人物像は田舞＝祭宴に関連する姿態を表現、坩は祭宴に供される酒容器等に比定され、首長霊継承の祭祀を想定されている（柳沢　1987）。木柑子高塚古墳においては、石人１の出土状況や造詣の違い、首のない人物像や、妊婦の存在の意味付けなど釈然としない部分はあるものの、岩戸山古墳の別区の人物像との共通性が認められることは確かであろう。木柑子高塚古墳においては、貴人（石人１）が、女性（石人２）から酒を注いでもらい、その周りで仮面をかぶった人物（石人４）が踊りを舞っているような祭祀が想像できる。それらは、首長権継承のための祭祀または被葬者の生前の祭祀を表したものであろう。

以上人物形石製品について述べてきたが、その一番の画期は、岩戸山古墳で始めて本来的な人物形の石製品が出現すると言うことである。もちろん岩戸山古墳においても、武人や盾・靫等の石製品が存在することから、癖邪の思想が全く無くなってしまった訳ではないのであろうが、それまでの癖邪を目的とした短甲形石製品・甲冑形石製品の樹立から、形象埴輪で表示していた祭祀を石に置き換えたものを樹立する方向に変化したと言えるであろう。その系譜は同じ八女地域の童男山古墳群、菊池川中流域の古墳に引き継がれていく。岩戸山古墳に続くと言われている善蔵塚古墳や乗場古墳に石製表飾が伴うかどうか等詳細が不明である

第 4 表　人物形石製品の変遷

古墳名	特　色	頭部有無	頭部表現		胴部の表現					下半身		石製表飾時期区分（1～3）	備考
			冑	その他	腕表現の有無	上腕のみ表現（奴凧）	腕全体を表現	甲	靫	立脚	座		
臼塚	短甲	×			×			○				1 期	
下山	短甲	×			×			○					
弥平山	短甲	×			×			○					
石人山	甲冑形	○	○		×			○					
石神山	甲冑形	○	○		×			○					
三ノ宮	甲冑形	○	○		×			○				2 期	
清原台地	短甲	×			×			○					
岩戸山												3 期 短甲形・甲冑形ではない人物形石製品の出現	
大形品													
裸の石人		○		○	?								①
甲冑を着けた石人	頭部分残存	○	○		?			○					①
短甲を着けた石人	脚部分残存	?						○		○			①
靫を負う石人	扁平石人	○			○	○			○				①
文人	下半身残存				?					○			②
跪座した石人	下半身残存										○		①
性器を露出	下半身残存										○		②
下帯をつかむ石人	下半身残存				○		○			○			①
小形品													
裸の石人	下半身残存									○			③
横座りする人物	下半身残存										○		②
豊福		○	○			○		○				3 期	
天満 2 号													
チブサン	文人？	○		○		○							
臼塚	武装人物	?				○		○	○				
富ノ尾	女性	○		○		○							
フタツカサン	武人？	?					○	?		○			
木柑子高塚													
石人 1	文人	○		○			○				?		
石人 2	女性	×					○				○		
石人 3	女性？	?					○				?		
石人 4		○		仮面									
童男山 3 号	子負い	○		○	?		?						
童男山22号	裸形跪座像												
野地		○		?		?							

岩戸山古墳出土の石人名称については①；森　貞次郎 1983「図版 8　筑紫君磐井の墳墓」『九州の古代文化』、②柳沢一男 1987「石製表飾 196頁」『東アジアの考古と歴史』下 ③小田富士雄 1974「埴輪と石の造形 79頁」『古代史発掘』7 の名称を参考とした。

が、現時点では、岩戸山古墳の石製表飾の意味合いを、より忠実に継承しているのが、菊池平野の木柑子フタツカサン古墳と高塚古墳であると言えよう。

3　6世紀の八女地域と菊池川流域

これまで、石製表飾を中心に述べてきたが、5～6世紀の有明海沿岸地域において石製表飾と伴に特徴的に見られる諸要素は他に埋葬施設や装飾がある。この度の調査で確認されたのは石製表飾の存在のみであったが、6 世紀の菊池川流域の一般的な埋葬施設について見ていきたい。

6 世紀代の肥後の横穴式石室について、大まかには、県北地域（菊池川流域）は複室構造で平面プランは方形、後室に石屋形を備え、装飾を有すものが多い《複室（方形プラン）＋石屋形＋壁画系装飾》という特色があり、県央地域（白川下流域）は、方形プランの単室構造で、石屋形を備え装飾を有すという特色があ

1 .臼塚古墳（菊田1985）

2 .石人山古墳（小田1985）

3 .三ノ宮古墳
（三島1984）

4 .岩戸山古墳（小田1985）

5 .臼塚古墳（原口1956）

6 .富ノ尾古墳（松本1996）

7 .木柑子フタツカサン古墳
（本田博久原因）

8 .木柑子高塚古墳
（石人２）

第45図　各種石人

る《単室（方形プラン）＋石屋形＋壁画系装飾》、県南地域（宇土半島基部・氷川下流域）では、宇土半島基部に単室構造のもの、氷川下流域に複室構造のものが存在する。平面プランはいづれも長方形で、石屋形を備えたものから石棚に変化するという特色がある。装飾については、直孤文系の装飾を有するものが認められるものもある。《単室・複室（長方形）＋石屋形・石棚》である（古城 2000）。

その 6 世紀には、筑後の八女地域（八女古墳群）と肥後の氷川下流域（野津古墳群）の 2 つの大古墳群が形成される。6 世紀前葉段階、肥後的要素と言われている、「複室構造」、「石屋形」、「壁画系装飾」が、九州各地に広がっていく。これについて、文献史において「磐井の乱」後の「火」君の勢力が拡大することが指摘されおり、これらの事象は、その証拠と考えられている。ただし一般的に「火」君とは氷川下流域の野津古墳群と考えられている。ところが「複室構造」「石屋形」「壁画系装飾」と言った要素は、肥後でも県北地域（菊池川流域）の要素である。これについて、蔵富士寛氏は、菊池川流域の古墳の規模が氷川流域・八女地域より見劣りする点、菊池側流域において八女産の埴輪、須恵器が流入していることより、勢力を拡大する集団は、「菊地川流域集団」単独の勢力拡大ではなく、八女―菊池川流域の血縁関係を含めた緊密な集団として捉えられている（蔵富士　2000）。

ただ大きな問題として、八女地域は磐井の奥津城であり、磐井の乱で敗北したにも関わらず、その地域の特性である「複室構造」「石屋形」「壁画系装飾」と言った要素、特にその中の「複室構造」「壁画系装飾」が拡大するのかと言う問題がある。「複室構造」の拡散については、土器副葬と言う葬送儀礼の変化によって生じた可能性が高いのかもしれない（重藤　1999）。また磐井の乱後も八女古墳群においてもその敗北の影響が出ていないと言う指摘（佐田　1980）もある。あるいは「複室構造」「壁画系装飾」と言った要素は、当時のステータスシンボルであり、磐井から許されたものしか構築できなかったのが、磐井の乱の敗北により、広くに築造可能となったと言う解釈も可能ではなかろうか。それらは石製表飾のように外部から見えるものでは無かったことも普及した一因なのかも知れない。

ともあれ菊池川流域と八女地域の密接な関係は、埋葬施設や須恵器･埴輪などの遺物からも認められる。その中でも石製装飾の面からも、より密接な関係が認められるのが、菊池平野の木柑子フタツカサン古墳、木柑子高塚古墳である。この菊池平野地域が、6世紀代になると他の菊池川流域の古墳を凌駕するようになるのも、八女地域とのより密接な関係が出来たことによるものと思われる。またそれは豊後日田地域においても同様だったのかも知れない。また磐井の乱後の6世紀後半になっても八女地域との密接な関係を持ち続けているのが、木柑子高塚古墳であろう。

4 終わりに

以上「岩瀬・木柑子古墳群」内におけるフタツカサン古墳・高塚古墳の調査により得られた成果と、それによって生じた問題点をあげてみた。木柑子高塚古墳は、菊池川流域の他地域では前方後円墳の築造が停止した時期の前方後円墳である。また磐井の乱以降石製表飾の風習は廃れてゆくと言われているが、その時期になっても石製表飾を持っている。まさに特異な存在の古墳である。本来の墳形、埋葬主体を明らかに出来ないのが惜しまれる。木柑子高塚古墳から、菊池川をはさんで 6 km程離れた対岸に、鞠智城が存在する。それは木柑子高塚古墳築造の約100年も後のことではあるが、それは、八女地域と菊池平野の間に楔を打つかのようでもある。

本来、岩瀬・木柑子遺跡の調査報告書は、平成9年度木柑子高塚古墳の調査担当者であった古森が平成8年度分の調査も含めて担当していたが、11年度末の定期異動により異動してしまったため、急遽古城が担当することとなった。与えられた期間は6ヶ月足らずであり、筆者の能力不足も重なり、特に平成 8 年度の調査については、概報に留まってしまったことをお詫びしたい。

註

　植木町教育委員会　中原幹彦氏、熊本大学　木村龍生氏の御教示による。

参考文献

阿南　亨　2000　「木柑子高塚古墳・フタツカサン古墳の調査とその意義」『継体大王と 6 世紀の九州』　熊本古墳研究会

市川浩文　1998「佐賀」『前方後円墳の終焉』第43回埋蔵文化財研究集会　埋蔵文化財研究会

今田治代　1993　「野津古墳群Ⅱ」　竜北町教育委員会

小田富士雄　1974　「石人･石馬の系譜」『古代史発掘』 7　講談社

小田富士雄　197 0　「磐井の反乱」『古代の日本』 3　角川書店

小田富士雄編　1985「石人石馬」

岸本　圭　1998　「八女古墳群の動態」『八女古墳群の再検討』　第1回九州前方後円墳研究会

九州前方後円墳研究会　2000　「九州の埴輪　その変遷と地域性一壷形埴輪・円筒埴輪・形象埴輪・石製表職―」

菊田　徹　1985「海部の古墳」『えとのす』29号　新日本教育図書

蔵富士寛　2000　「環有明・八代海地域の古墳動態からみた政治変動」『継体大王と 6 世紀の九州』　熊本古墳研究会

佐田　茂1980　「筑後における古墳の動向」『鏡山猛先生古稀記念古文化論考』

重藤輝行　1999「北部九州における横穴式石室の展開」『九州における横穴式石室の導入と展開』第2回九州前方後円墳研究会資料集

高木恭二・蔵富士寛　1998「肥後における古墳文化の特性一筑後八女古墳蝉との比較－」『八女古墳群の再検討』第1回九州前方後円墳研究会

高木恭二　1994　「肥の石製品と古墳文化―装飾古墳文様との関連を中心として－」『石人・石馬―里帰り展―』八女市教育委員会

高木正文　2000　「装飾古墳の地域性」『継体大王と 6 世紀の九州』　熊本古墳研究会

高木正文　1984　「熊本県下の古墳石製表飾の分布と一覧」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』

高橋克壽　1996　「埴輪の世紀」『歴史発掘』 9　講談社

田中裕介　1998　「豊後地域の中後期の動向」『八女古墳群の再検討』　第1回九州前方後円墳研究会

田中裕介　1998　「大分」『前方後円墳の終焉』第43回埋蔵文化財研究集会　埋蔵文化財研究会

原口長之　1956　「臼塚古墳調査報告」『山鹿高等学校考古学部報』

古城史雄　2000　「肥後型横穴式石室の定義とその意義」『継体大王と 6 世紀の九州』　熊本古墳研究会

古森政次　1998　「肥後考古学会発表資料」

松本健郎　1992　「富の尾古墳群における石人」「市史研究くまもと」第3号

松本健郎　1994　「石製表飾」『熊本大学文学部考古学研究室研究報告』第1集

松本健郎　1996　「冨ノ尾古墳群」『新熊本市史　資料編考古資料』

三島　格　1994　「三ノ宮古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』

柳沢一男　1987　「石製表飾考」『東アジアの考古と歴史』下

柳沢一男　1995　「岩戸山古墳と磐井の乱」『継体王朝の謎』　宇治市教育委員会編　河出書房新社

柳沢一男　1992　「石人石馬」『古墳時代の研究　』 9　古墳Ⅲ埴輪　雄山閣

柳沢一男　2000　「九州における首長系譜の変動と有明首長連合」『継体大王と 6 世紀の九州』　熊本古墳研究会
山尾幸久　1999　「筑紫磐井の戦争」新日本出版社

岩瀬・木柑子遺跡出土遺物観察表(１)

挿図	番号	器種	口径 cm	器高 cm	胴部最大径 cm	底径 cm	色調	胎土	焼成	遺物番号	備考
7		深鉢	31.8		32.0		外)暗黄褐色 内)黄褐色	長石等小石を含む	良好	Ⅱ-1・9	埋甕1
8		深鉢	44.4		46.4		外)黄褐色 内)灰黄褐色	長石・輝石等小石を含む	良好	Ⅱ-2・5G	埋甕2
12		壺			28.2		外)淡黄褐色 内)淡灰黄色	砂粒をわずかに含む	良好	Ⅱ-2・6、1号周溝	3号溝
15	1	坏蓋					外)暗オリーブ 内)灰色	砂粒をわずかに含む	良好	1-2、円墳周溝内	
	2	坏蓋	12.0	4.2			外)灰色 内)黄褐色	長石・石英を含む	良好	1-2、円形周溝墓	
18	1	坏蓋	10.5				灰色	砂粒を少量含む	良好	1-3、1号周溝	
	2	坏身	(11.8)				黄灰色	砂粒をわずかに含む	良好	1-3、1号周溝 No.12・15	
	3		(11.0)				外)黄灰色 内)黒褐色	長石・石英を含む	良好	1-3、1号周溝No.84	
	4		(13.6)				橙色	細砂粒を多く含む	良好	1-3、1号周溝No.19	
	5		(15.2)				橙色	長石・石英を含む	良好	1-3、1号周溝No.25	
	6		11.0	4.9		8.6	灰色	長石・石英を含む	良好	1-3、1号周溝No.22	
	7	高坏	(16.0)				灰色	砂粒をわずかに含む	良好	1-3、1号周溝No.47	
	8	高坏	10.6	8.9		6.5	赤褐色	長石・石英を含む	良好	1-3、1号周溝No.9	
	9		18.0	16.4		14.0	橙色	角閃石・石英を含む	良好	1-3、1号周溝No.81	
	10		14.8				橙色	角閃石・石英を含む	良好	1-3、1号周溝No.80	
	11	提瓶	7.0				外)赤褐色 内)灰褐色	細砂粒を多く含む	良好	1-3、1号周溝 No.30・31	
19	12	甕	(44.4)				灰黄色	長石・石英を含む	良好	1-3、1号周溝No.26	
	13	甕	(45.0)				灰色	長石・石英を含む	良好	1-3、1号周溝 No.70・73	
	14	脚？	(40.2)				橙色	長石・石英を含む	良好	1-3、1号周溝No.11	
	15	台付鉢	38.8				外)橙色 内)褐色	長石・石英を含む	良好	1-3、1号周溝 No.3・4	
31	1	坏蓋	(14.8)	5.8			灰褐色	長石・石英を含む	良好	二ツ塚周溝5・8層	
	2						黄灰色	長石・石英・輝石を含む	良好	Ⅰ-3溝状遺構一括	
	3		12.0	4.6			赤褐色	長石・石英を含む	不良	二ツ塚周溝No.6	
	4	高坏	(16.2)				灰褐色	長石・石英を含む	良好	二ツ塚周溝8層	
	5	高坏	(12.0)				灰色	長石・石英を含む	良好	二ツ塚周溝1～5層	
	6	高坏	(10.4)				灰色	長石・石英・輝石を含む	良好	Ⅰ-3溝状遺構一括	
	7	坏蓋					灰色	細砂粒を含む	良好	二ツ塚周溝1～5層	
	8						外)白灰 内)灰色	細砂粒を含む	良好	二ツ塚周溝1～5層	
	9		(9.2)				褐色	細砂粒を含む	良好	Ⅰ-3溝状遺構一括	
	10		9.0			5.0	灰色	長石・石英を含む	良好	二ツ塚周溝8層	
	11		(10.4)				灰色	長石・石英・輝石を含む	良好	二ツ塚周溝4層	
	12		(10.4)				橙色	長石・石英・輝石を含む	良好	二ツ塚周溝8層	
	13	高坏				10.2	灰色	細砂粒を含む	良好	Ⅰ-3溝状遺構一括	

（　）内は推定値。

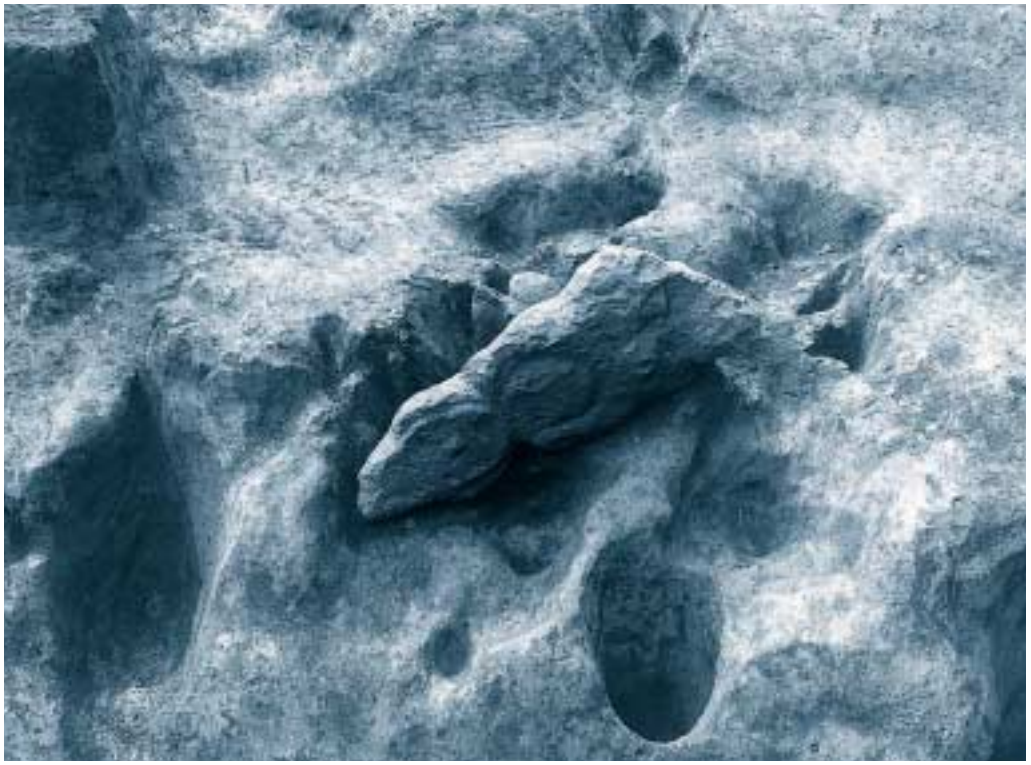
岩瀬・木柑子遺跡出土遺物観察表(２)

挿図	番号	器種	口径 cm	器高 cm	胴部最大径 cm	底径 cm	色調	胎土	焼成	遺物番号	備考
31	14	提瓶	8.8				灰色	長石・石英を含む	良好	二ツ塚周溝1～5層	
	15		5.4				灰色	長石を含む	良好	二ツ塚周溝1～5層	
	16	ハソウ					灰色	細砂粒を含む	良好	二ツ塚周溝8層	
	17						橙色	長石・輝石を含む	良好	二ツ塚周溝8層	
	18	不明					灰色	細砂粒を含む	良好	二ツ塚周溝8層	
	19	壺	11.0				黄褐色	長石・石英を含む	普通	二ツ塚周溝5層	
	20	台付壺			17.8	13.9	灰色	細砂粒を含む	良好	二ツ塚周溝土坑1	
32	21	甕	17.6				外)暗褐色 内)灰色	長石・石英・輝石を含む	良好	二ツ塚周溝	
40	1	椀	23.2	4.7		14.0	橙色	角閃石・輝石・石英・長石を含む	良好	岩瀬1-3、住p1	
	2	坏				8.4	橙色	長石を含む	良好	岩瀬1-3、住p4	
	3	坏				(8.2)	灰オリーブ	長石・輝石を含む	良好	岩瀬1-3、住	
	4	坏？					赤褐色	長石・輝石を含む	良好	岩瀬1-1、4号住	
	5	坏	16.2	2.1		14.0	橙色	長石・石英・輝石を含む	良好	岩瀬1-1、4号住p4	
	6	皿	(15.8)	1.9		(3.2)	橙色	長石・輝石を含む	良好	岩瀬1-1、4号住p5	
	7	椀	14.0	5.5		9.0	橙色	長石・石英・輝石を含む	良好	岩瀬1-1、4号住p9	
	8	坏	13.9	3.0		7.4	橙色	長石・石英・輝石を含む	良好	岩瀬1-1、5・6号住p8	
	9	坏？					黄橙色	角閃石・石英を含む	良好	岩瀬1-1、7号住	
	10						橙色	長石・輝石を含む	良好	岩瀬1-1、8号住	
	11	坏	(12.6)	3.2		8.0	赤褐色	長石・雲母・輝石を含む	良好	岩瀬1-1、9・10・11号住	
	12	坏				(9.4)	橙色	長石・石英・輝石を含む	良好	岩瀬1-5、1・2号住p2	
41	13	椀				8.0	赤褐色	長石・石英・輝石を含む	良好	木柑子Ⅱ-2、1号溝状遺構	
	14	椀				10.6	橙色	石英・輝石を含む	良好	Ⅱ-8、6Ⅱ層	
	15	坏	14.0	2.9		8.0	橙色	長石・輝石を含む	良好	Ⅱ-2、3Ⅲ層	
	16	坏	(15.0)	2.8		7.2	橙色	長石・石英・輝石を含む	良好	Ⅱ-2、4Ⅲ層	
	17	坏	(16.0)	1.8		13.6	橙色	長石・金雲母・輝石を含む	良好	Ⅱ-2、Ⅱ層	
	18	坏				(7.5)	橙色	石英を含む	良好	Ⅱ-2、Ⅱ層	
	19	坏	(15.2)	3.2		8.4	赤褐色	長石・輝石を含む	良好	Ⅱ-2、Ⅱ層	
	20	坏				(7.8)	橙色	長石・角閃石を含む	良好	Ⅱ-2・3Ⅱ層	
	21	坏				(10.0)	橙色	石英を含む	良好	Ⅱ-2・3Ⅱ層	
	22	坏？				(9.0)	橙色	長石・石英を含む	良好	Ⅱ-2、Ⅱ層	
	23	坏				(6.4)	橙色	長石・石英を含む	良好	Ⅱ-2、Ⅱ層	
	24	坏	(20.0)	4.5		(11.6)	橙色	石英・輝石を含む	良好	Ⅱ-2・1Ⅱ層	
	25						赤褐色	石英・輝石を含む	良好	Ⅱ-2・3Ⅲ層	
	26						灰色	石英・輝石を含む	良好	Ⅱ-2・4Ⅱ層	
	27	坏	(12.6)	3.2		9.0	橙色	長石・輝石を含む	良好	Ⅱ-2・2Ⅱ層	
42	28	坏	13.4			8.0	橙色	長石・石英・輝石を含む	良好	Ⅱ-1・3、溝内上部	
	29	坏				(9.0)	橙色	長石・輝石を含む	良好	Ⅱ-1・3、Ⅱ層	
	30	椀				7.8	灰白色	細砂粒を含む	良好	Ⅱ-1・9、Ⅱ層	
	31	坏	(13.0)	2.7		8.2	橙色	長石・石英を含む	良好	Ⅱ-1・4、Ⅲ層	
	32	椀				11.8	橙色	長石・石英・輝石を含む	良好	Ⅱ-1・4、Ⅱ層	
	33	坏				(9.6)	橙色	長石・石英・輝石を含む	良好	Ⅱ-1・4、Ⅱ層	
	34	椀				7.2	赤褐色	石英・輝石を含む	良好	Ⅱ-1・8、Ⅱ層	
	35	坏？				9.6	赤褐色	長石・輝石を含む	良好	Ⅱ-1・3、Ⅱ層	
	36		19.1	10.7			赤褐色	長石・石英・輝石を含む	良好	Ⅱ-1・3、溝	
	37	坏？				(12.7)	赤褐色	石英・輝石を含む	良好	Ⅱ-2・1、Ⅱ層	
	38	坏				(8.2)	橙色	長石・石英・輝石を含む	良好	Ⅰ-1、一括	

（　）内は推定値。

写 真 図 版

木柑子高塚古墳周溝



石人 1　検出状況

図版 2

石人 2 ～ 4 及び
遺物出土状況

須恵器20出土状況

遺物出土状況（雲珠他）

図版 4

正面

側面

石人 1

正面

側面

石人 2

図版 6

石人 3

石人 4

1 号埋甕

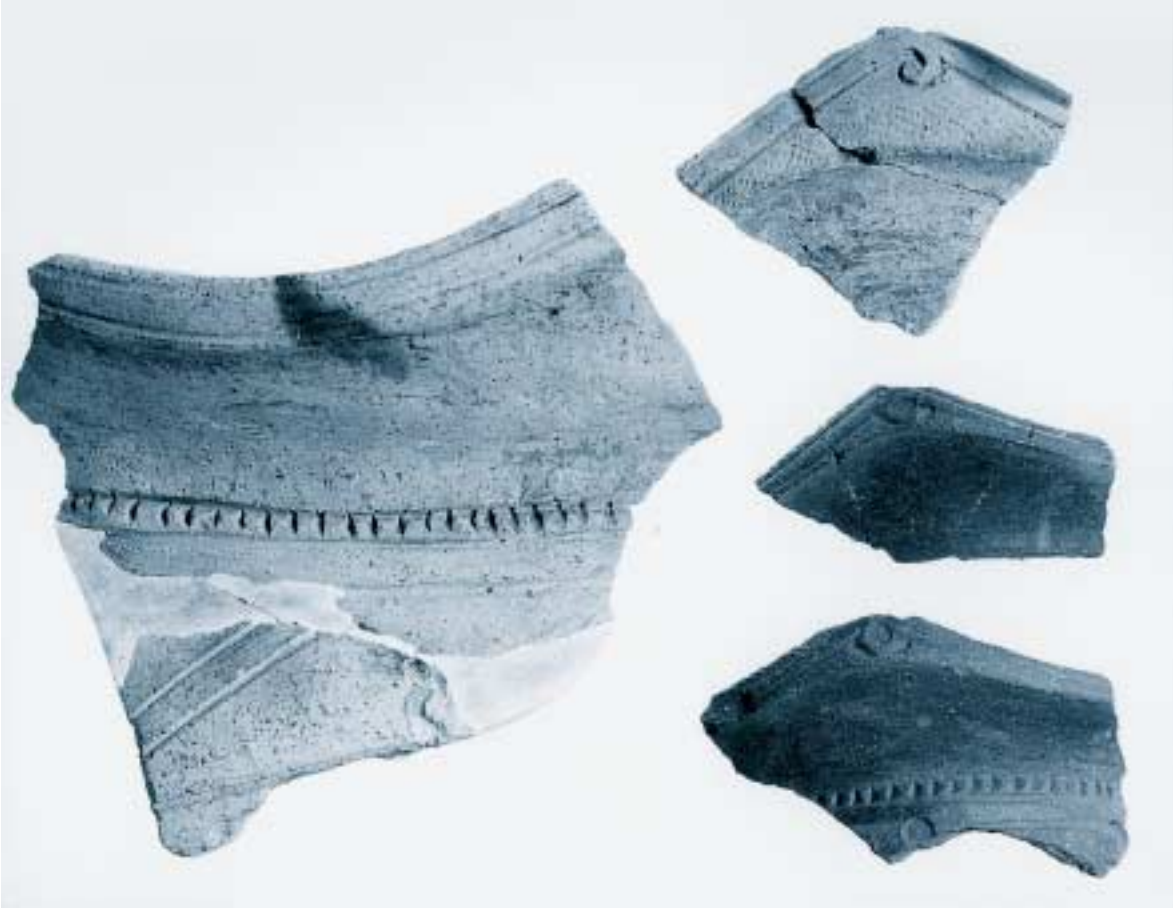
2 号埋甕

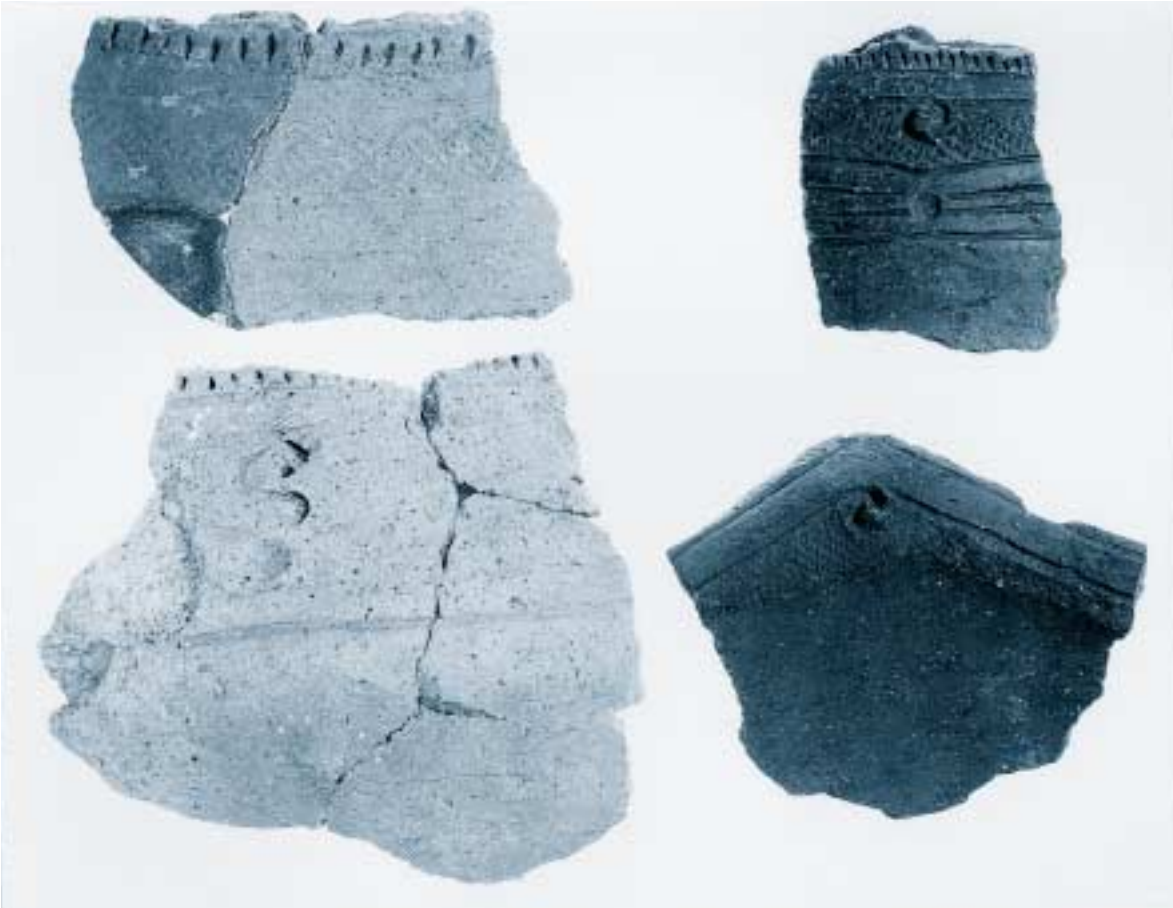
図版 8

包含層出土の縄文時代の遺物（１）

包含層出土の縄文時代の遺物（２）

図版10

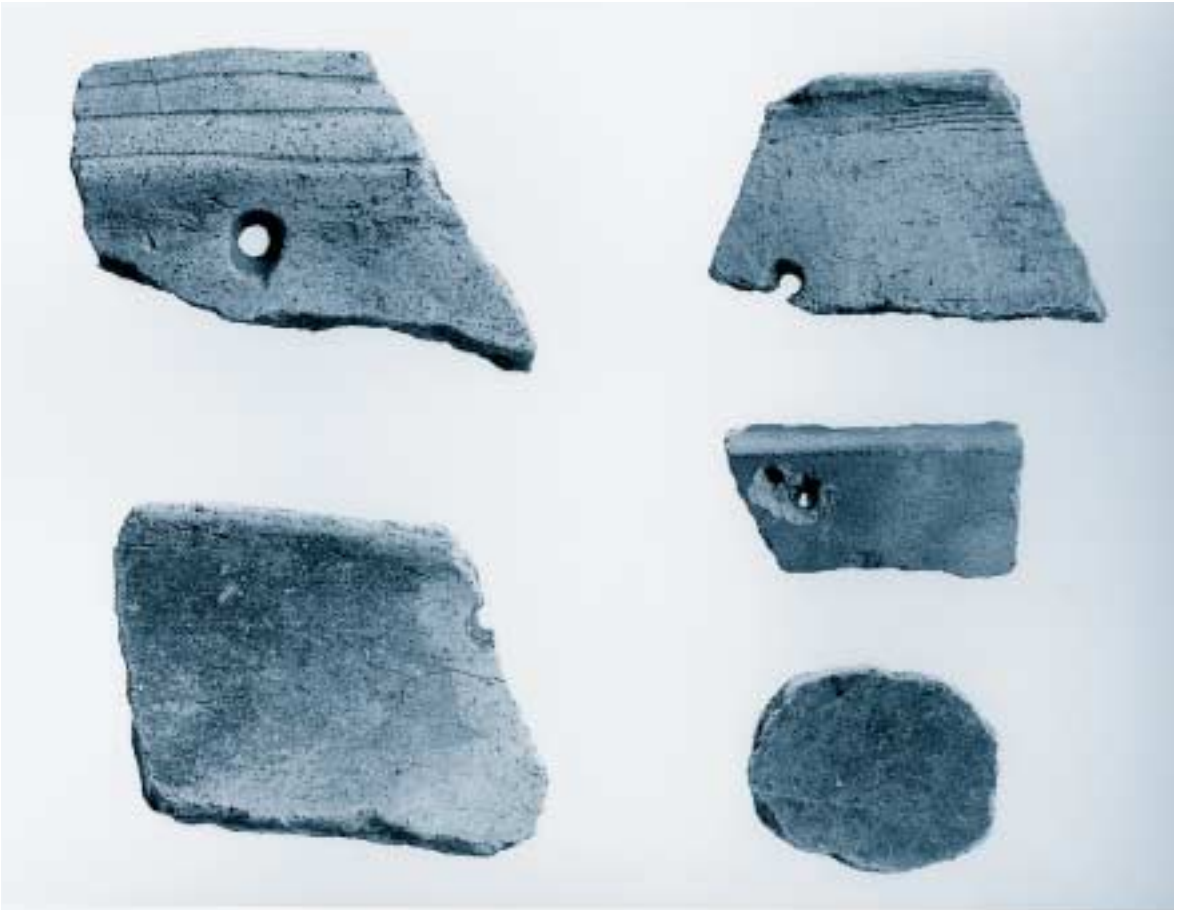




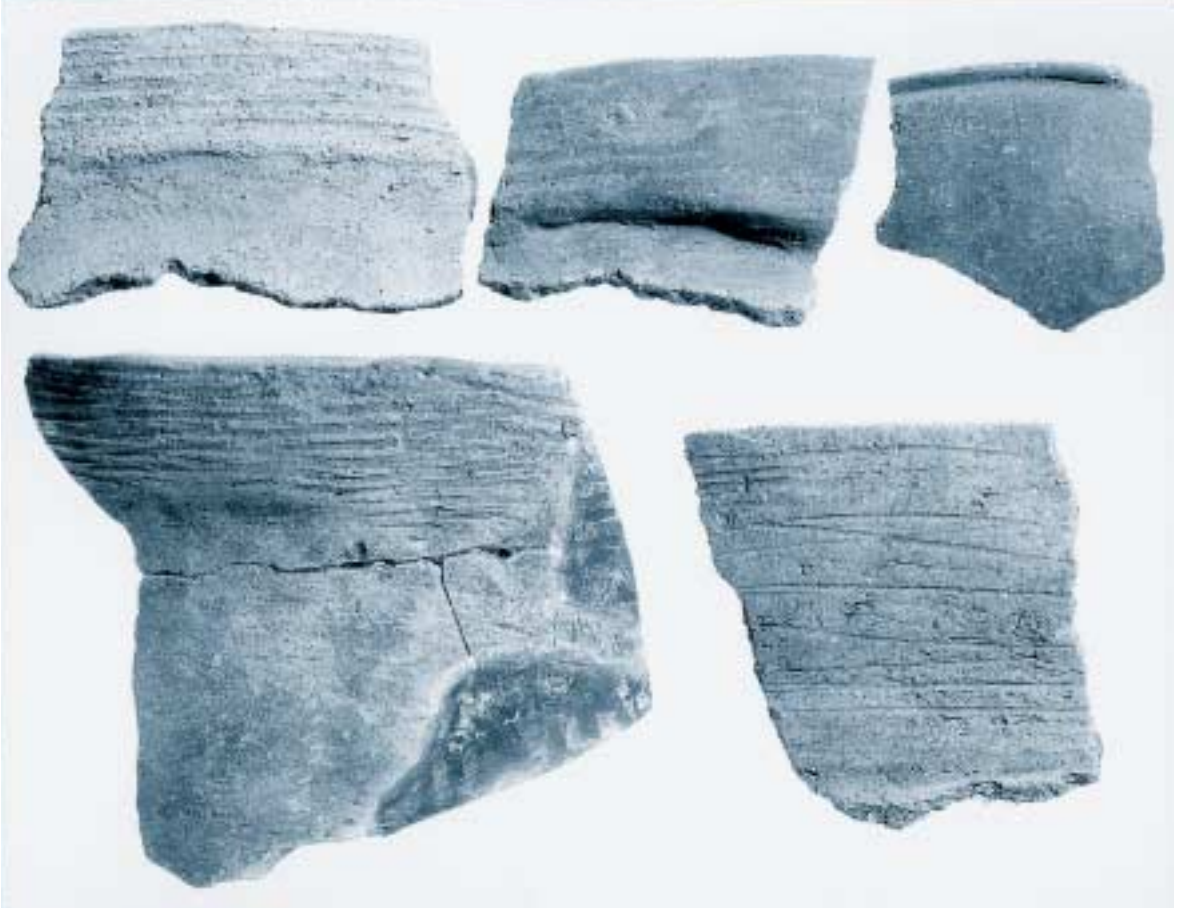
包含層出土の縄文時代の遺物（３）

包含層出土の縄文時代の遺物（４）

図版12

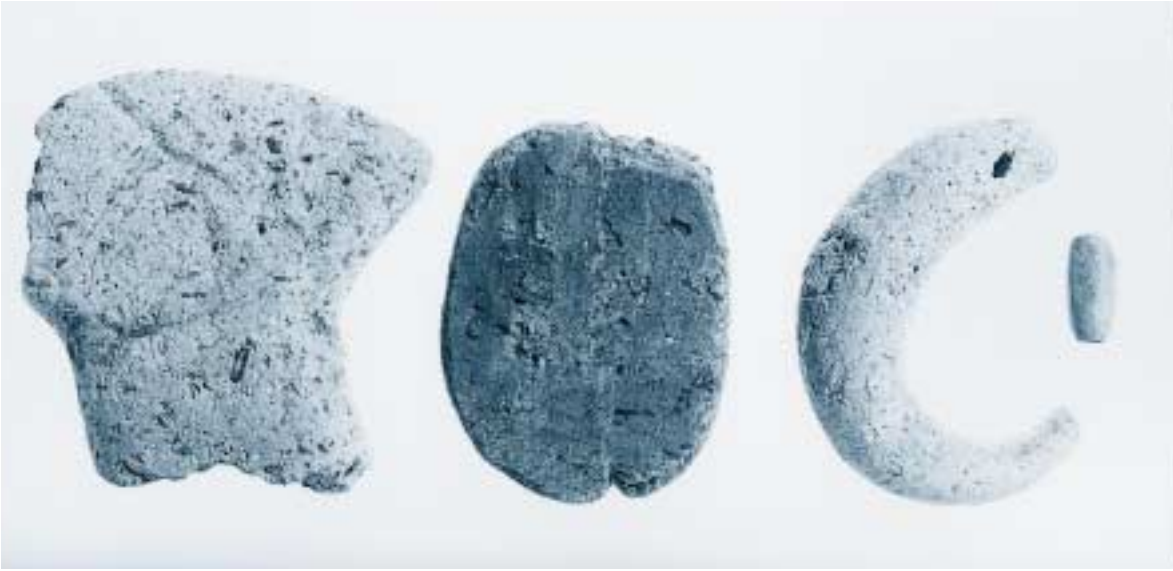


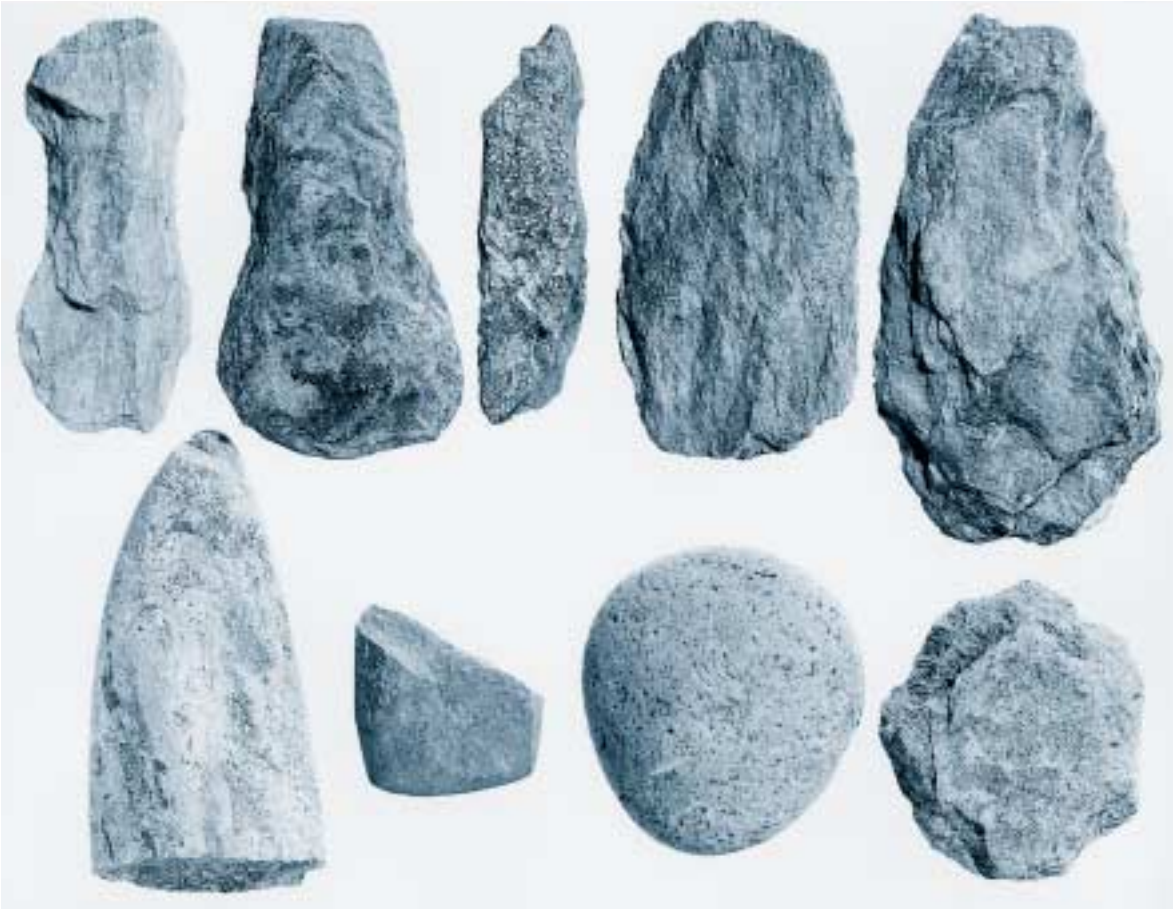
包含層出土の縄文時代の遺物（５）



包含層出土の縄文時代の遺物（６）

図版14





包含層出土の縄文時代の遺物（７）

3 号溝出土遺物

5 号溝出土遺物

2 号円形周溝（古墳Ｃ）出土遺物

図版16

9

10

11

11

13

14

15

2号円形周溝（古墳Ｃ）出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

8

10

11

12

木柑子高塚古墳出土遺物

図版18

13

14

15

16

17

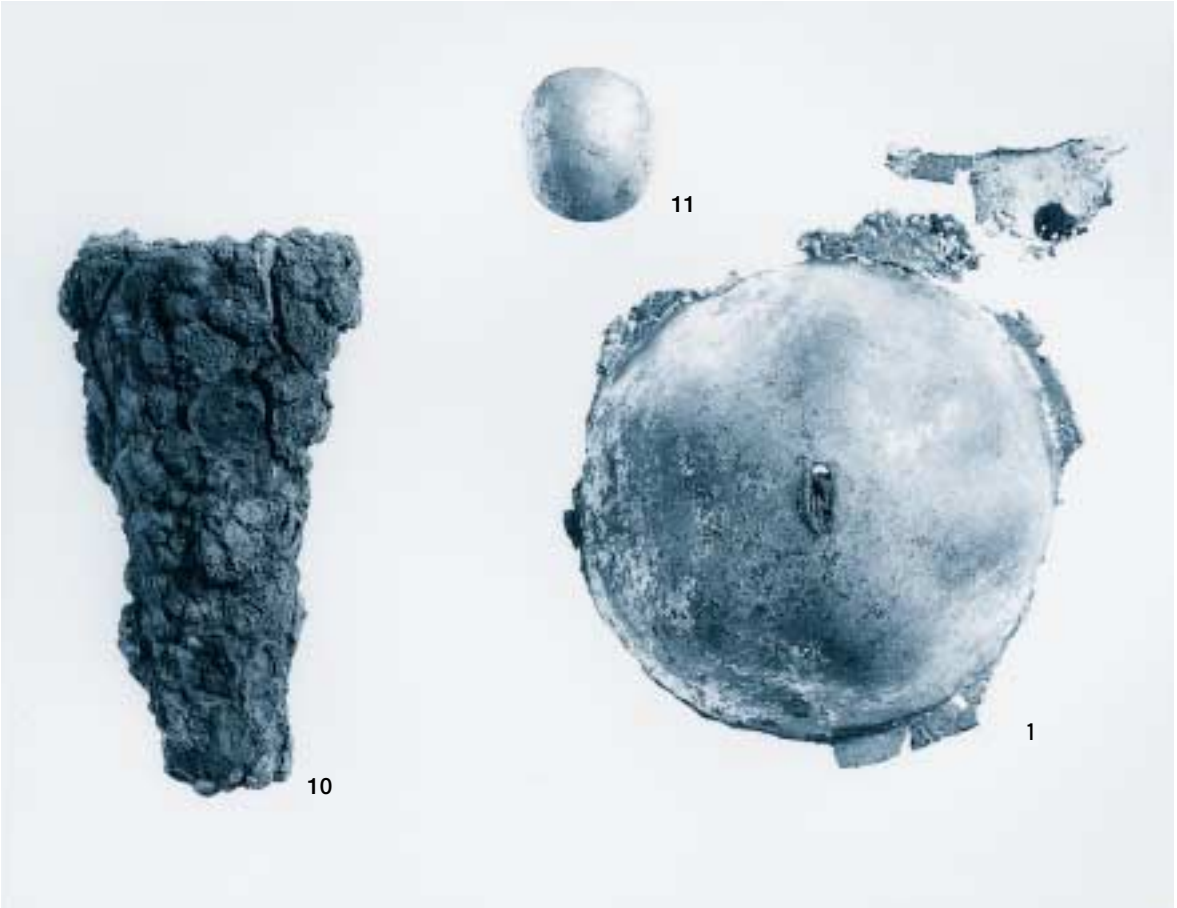
18

20

19

21

木柑子高塚古墳出土遺物



木柑子高塚古墳金属器

図版20

墨書土器他

墨書土器他

図版22

墨書土器他

付　　編

十　五　社　石　棺　群

―防災ため池整備事業に伴う文化財調査―

目　次

目次
例言

Ⅰ　十五社石棺群調査について

Ⅰ　調査・整理組織…… 1
Ⅱ　周辺の地理的環境・歴史的環境…… 1
Ⅲ　調査の成果…… 4

例　　言

1　本書は、平成 6 年度に熊本県教育委員会が、防災ため池整備事業に伴う埋蔵文化財「十五社石棺群」発掘調査の記録である。

2　本書に掲載した「十五社石棺群」は、熊本県宇土郡不知火町高良に所在する。

3　現地調査は平成 7 年 2 月より実施し、古城史雄が担当した。

4　本書で使用した地図は、建設省国土地理院発行の地形図(1:25,000)をもとに作成した。

5　遺構の製図は、林ゆり、古閑満代が行った。

10　本書の編集は、熊本県教育委員会が行い、古城が担当した。

13　調査に関する記録類は、一括して熊本県教育委員会が保管している。

凡　　例

1　本書に使用した地形図の一部は、熊本県宇城事務所耕地課から提供を受けたものを基礎にしている。

2　遺構の深さは、断りがないものは検出面からの深さである。

3　現地での遺構実測は、1/10 又は1/100 の縮尺で行い、本書収録の際には、1/30 、1/600の縮尺となっている。

挿図目次

第１図　　十五社石棺群周辺遺跡分布図…… 2
第２図　　十五社石棺群周辺地形図…… 4
第３図　　十五社箱式石棺実測図…… 5

写真目次

図版１　　上；十五社５号石棺検出状況
　　下；土壙検出状況
図版２　　５号蓋石除去状況
図版３　　上；西側壁
　　下；石材抜取後の状況

十五社箱式石棺群の調査について

1　所在地　　宇土郡不知火町高良
2　調査原因　　県営防災ため池整備事業に伴う発掘調査
3　調査年月日　平成７年２月22日～平成７年３月15日
4　調査主体　熊本県教育委員会
5　遺跡の概要　古墳時代・箱式石棺

Ⅰ　調査・整理組織

[本調査]

調査責任者　桑山裕好(文化課長)　丸山秀人(課長補佐)

調査総括　　島津義昭(調査第一係長･主幹)

調査担当　　古城史雄(主任主事)　本松亜希子(臨時職員)

[整理･報告書作成]

整理責任者　阪井大文（文化課長）　島津義昭（課長補佐）

整理総括　　江本　直（調査第二係長･主幹）

報告書作成　古城史雄（参事）　林　ゆり（嘱託）　古閑満代（臨時職員）

調査指導及び協力者

高木恭二（宇土市教育委員会）、浦田信智（西合志町教育委員会）宇城事務所耕地課、不知火町教育委員会

Ⅱ　周辺の地理的環境・歴史的環境

（１）　地理的環境

熊本県のほぼ中央部、北の有明海と南の八代（不知火）海を分断するかたちで西に突出した宇土半島は、主峰大岳（478m）から派生した幾つもの丘陵が海岸線まで迫り複雑な地形をなす。そのため、宇土半島基部を除き大規模な平野部はなく、小河川沿いに形成された半島部の小平野は、江戸時代以降の干拓によるものが大半を占める。

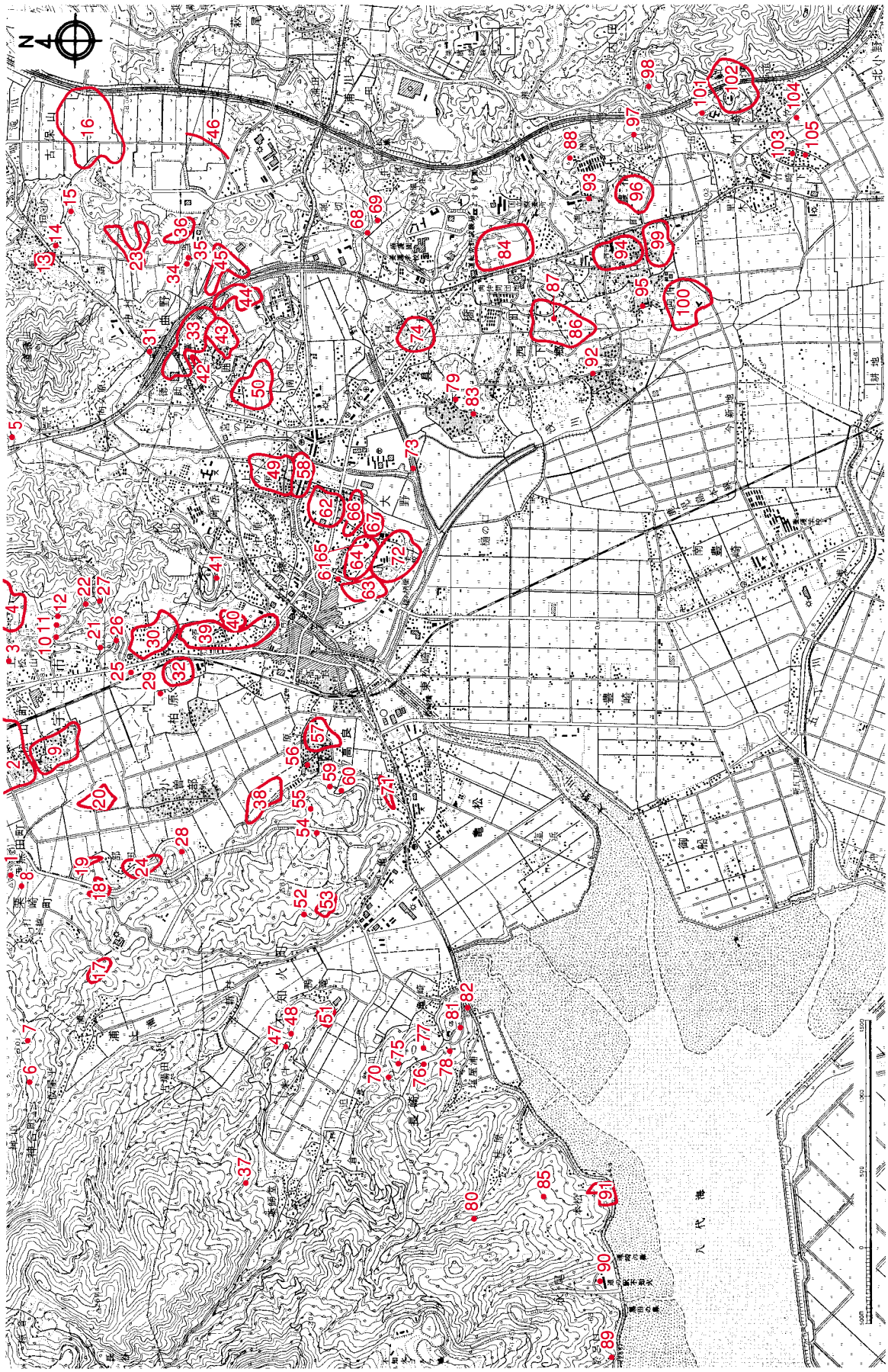
宇土半島の基部地域は、西側には半島側からのびる丘陵があり、東側には雁回山（314m）をはじめとしていくつかの小山塊が点在する。このため、宇土郡不知火町と下益城郡松橋町それに、宇土市の境界付近では平野部の幅は極端に狭くなっている。この地域は、熊本平野と八代平野とを結ぶ交通の要衝であり、古墳時代の前方後円墳が多数存在している。また現在でも国道3号線とJR鹿児島線が南北に走る交通の要衝である。

十五社石棺は、この半島基部側山塊の南西端に位置する高良丘陵の南端部に所在する。

（２）　歴史的環境

十五社石棺群が所在する宇土半島基部の古墳時代の遺跡について概観してみたい。古墳時代の宇土半島基部地域で特筆されるのは、まず九州中南部では早い時期に前方後円墳が造られていることである。十五社石棺の西南西約2kmには弁天山古墳、北西約2．5kmには迫ノ上古墳があり、いずれも狭長な竪穴式石槨に木棺を納める。迫ノ上古墳と同一の丘陵にはスリバチ山古墳と三角縁四神四獣鏡が出土した城ノ越古墳がある。また、北東約2kmにある向野田古墳は竪穴式石槨に舟形石棺を納めている。また向野田古墳の東には、御手水古墳もある。

中期になると、有明海側に県下最大級の天神山古墳が造られ、中期後葉には十五社石棺群の西側約1.5kmの



第１図　十五社石棺群周辺遺跡分布図

十五社石棺群周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地	時代
1	伊無田の御堂	宇土市　伊無田	近世
2	下松山	〃　松山町　巌島・二橋	弥生
3	内藤病院内巨石墳	〃　〃　桶底	古墳
4	山内	〃　〃　北山内	縄文～中世
5	西潤野古墳	〃　立岡町　西潤野	古墳
6	すり鉢山古墳	〃　神谷町　水谷	古墳
7	迫の上古墳	〃　〃　水谷	古墳
8	久保古墳	〃　栗崎町　久保	古墳
9	北園	〃　松山町　八反田	縄文～中世
10	茶臼山古墳	〃　〃　南山内	古墳
11	南山内箱式石棺群 （南山内古墳）	〃　〃　南山内	古墳
12	高城跡	〃　〃　南山内	中世
13	古保山廃寺跡	下益城郡 松橋町　古保山 池尾	古代
14	古保山霊運寺跡	〃　〃　古保山 五反田	中世
15	池尾古墳	〃　〃　古保山	古墳
16	古保山古墳群		
	〃　池尾第１号古墳	下益城郡 松橋町　古保山 池尾	古墳
	〃　池尾第２号古墳	〃　〃　古保山 池尾	古墳
	〃　畑中古墳	〃　〃　古保山 池尾	古墳
	〃　中の原古墳	〃　〃　古保山 乱橋	古墳
	〃　真の辻古墳	〃　〃　古保山 乱橋	古墳
	〃　鳴滝古墳	〃　〃　古保山 乱橋	古墳
	〃　三本木戸古墳	〃　〃　古保山 丸山	古墳
	〃　大道夫婦塚男古墳	〃　〃　古保山 東谷	古墳
	〃　大道夫婦塚女古墳	〃　〃　古保山 大道	古墳
	〃　笹原夫婦塚男古墳	〃　〃　萩尾 笹原	古墳
	〃　笹原夫婦塚女古墳	〃　〃　萩尾 笹原	古墳
	〃　中原古墳	〃　〃　萩尾 中原	古墳
17	浦上	宇土郡　不知火町浦上	弥生・古墳
18	大平横穴群	宇土市　伊無田町大平	古墳
19	沖田	宇土郡　不知火町小曽部 沖田	古墳～古代
20	北園	〃　〃　小曽部 北園	弥生～古代
21	向野田石蓋土壙	宇土市　松山町　向野田	古墳
22	御手水古墳2号	〃　〃	古墳
23	びわだ窯跡	下益城郡 松橋町　曲野 びわだ	古墳～古代
24	北請	宇土郡　不知火町小曽部 北請	古墳～古代
25	キリギス山古墳	〃　〃　御領 東原	古墳
26	向野田古墳	宇土市　松山町　向野田	古墳
27	御手水古墳	〃　〃　御手水	古墳
28	仁王塚古墳	宇土郡　不知火町小曽部	古墳
29	柏原古墳	〃　〃　柏原 野田	古墳
30	嫁坂B	〃　〃　御領 東原	縄文
31	丸山の古城	下益城郡 松橋町　曲野 丸山	中世
32	柏原	宇土郡　不知火町柏原 野田	縄文
33	曲野	下益城郡 松橋町　曲野	旧石器～中世
34	ガローバル第1号古墳	〃　〃　曲野 山田	古墳
35	ガローバル第2号古墳	〃　〃　曲野 山田	古墳
36	当尾窯跡	〃　〃　当尾	古墳
37	元米の山窯跡	宇土郡　不知火町長崎 元米の山	古墳
38	南請	〃　〃　小曽部 南請	古代
39	出町	〃　〃　御領（通称出町）	弥生
40	御手洗	〃　〃　御領 東原	弥生・古墳
41	宇賀嶽古墳	下益城郡 松橋町　松橋 岩谷	古墳
42	曲野貝塚	〃　〃　曲野	縄文
43	曲野城跡	〃　〃　曲野 橋川	中世
44	囲	〃　〃　曲野（通称囲）	縄文～中世
45	寺尾	〃　〃　当尾	古代
46	当尾の穴井手	〃　〃　古保山 外当尾	近世
47	鴨篭古墳 （城の越古墳）	宇土郡　不知火町長崎 城の越	古墳

No.	遺跡名	所在地	時代
48	城の越東古墳	宇土郡　不知火町 長崎 城の越	古墳
49	上野原	下益城郡 松橋町　松橋 上野原	縄文・弥生
50	曲野神社	〃　〃　曲野 宮の下	縄文～中世
51	朱斗叶松窯跡	宇土郡不知火町　長崎 叶松	古墳
52	栗崎1号墳	〃　〃　高良 栗崎	古墳
53	塚原古墳群	〃　〃　高良 坊の平	古墳
54	栗崎2号墳	〃　〃　高良 栗崎	古墳
55	大迫1号墳	〃　〃　高良 大迫	古墳
56	大迫2号墳	〃　〃　高良 大迫	古墳
57	塚原貝塚	〃　〃　高良 塚原平	縄文
58	大野	下益城郡 松橋町　大野 前田	縄文～古墳
59	柳迫古墳	宇土郡　不知火町 高良 柳迫	古墳
60	塚原古墳群	〃　〃　高良 塚原平	古墳
	（塚原平古墳）		
61	山伏塚	下益城郡 松橋町　松橋 前田	中世
62	松橋大野貝塚	〃　〃　大野 前田	縄文
63	熊野権現社	〃　〃　松橋 前田	縄文～古代
64	上畑	〃　〃　松橋 前田	縄文～古代
65	大塚城	〃　〃　松橋 前田	中世
66	松橋貝塚	〃　〃　松橋 大道	縄文
67	松橋前田	〃　〃　松橋 前田	古墳
68	薩摩渡しの眼鏡橋	〃　〃　浦河内	近世
69	豊田城跡	〃　〃　浦川内 古城	中世
70	八久保古墳	宇土郡　不知火町 長崎 八久保	古墳
71	十五社石棺群	〃　〃　高良 神の元	古墳
72	大塚台地	下益城郡 松橋町　松橋 前田	縄文・弥生
73	寄田の底井樋	〃　〃　大野	近世
74	上久具貝塚	〃　〃　久具 堂前	縄文
75	久保古墳	宇土郡　不知火町 長崎	古墳
76	道免古墳	〃　〃　長崎 道免	古墳
77	国越古墳	〃　〃　長崎 国越	古墳
78	東塩屋浦古墳	〃　〃　長崎 東塩屋浦	古墳
79	久具廃寺跡	下益城郡 松橋町　久具	古代・中世
80	弁天山箱式石棺	〃　〃　長崎 弁天山	古墳
81	弁天山古墳	〃　〃　長崎 弁天山	古墳
82	弁天山箱式石棺	〃　〃　長崎 弁天山	古墳
83	河野通有の墓	下益城郡 松橋町　久具	中世
84	豊福	〃　〃　九具	弥生～古代
85	桂原古墳 （白玉古墳）	宇土郡不知火町長崎桂原・白玉	古墳
86	狐塚	下益城郡 松橋町　豊福	弥生～古代
87	狐塚古墳	〃　〃　両仲間 狐塚	古墳
88	豊福古墳	〃　〃　豊福 栗迫	古墳
89	永尾ノログチ古墳	宇土郡　不知火町 永尾 野呂口	古墳
90	黒田製塩	〃　〃　永尾 南黒田	
91	二本松箱式石棺墓	〃　〃　永尾 二本松	弥生
92	三福山廃寺跡	下益城郡 松橋町　西下郷	古代・中世
93	作徳明神	〃　〃　豊福 下城	中世
94	豊福神社境内	〃　〃　豊福 下町	中世
95	梶原景季の墓	〃　〃　西下郷	中世
96	豊福城跡	〃　〃　豊福 下城・上城	中世
97	長伝寺廃寺跡	〃　〃　西下郷	古代・中世
98	内田の眼鏡橋	〃　〃　内田	近世
99	仲間貝塚	〃　〃　両仲間 仲間	縄文
100	宮島貝塚	〃　〃　両仲間 掛崎	縄文・弥生
101	了徳寺廃寺跡	〃　〃　竹崎	古代・中世
102	竹崎城跡	〃　〃　竹崎 陣の内	中世
103	竹崎の六地蔵幢	〃　〃　竹崎	中世
104	年の神古墳 （竹崎古墳）	〃　〃　竹崎 年の神	古墳
105	竹崎古墳	〃　〃　豊福 竹崎	古墳

台地上に松橋大塚古墳が造られている。前方後円墳の築造に限れば、前期と比較するとやや衰退した印象を受ける。この時期の古墳の主体部に眼を向けると、半島基部の周辺地域においては複数埋葬を想定した石障系横穴式石室を採用した古墳が数多く出現するのに対し、基部地域においては、主体部は石棺が中心である。この時期には半島基部における石棺の製作がピークを迎え、周辺地域の古墳だけにとどまらず、遠くは近畿地方にまで運ばれて、古墳に納められていることが指摘されており、当地古代人の特殊性と広範囲に及ぶ活発な活動が偲ばれる。

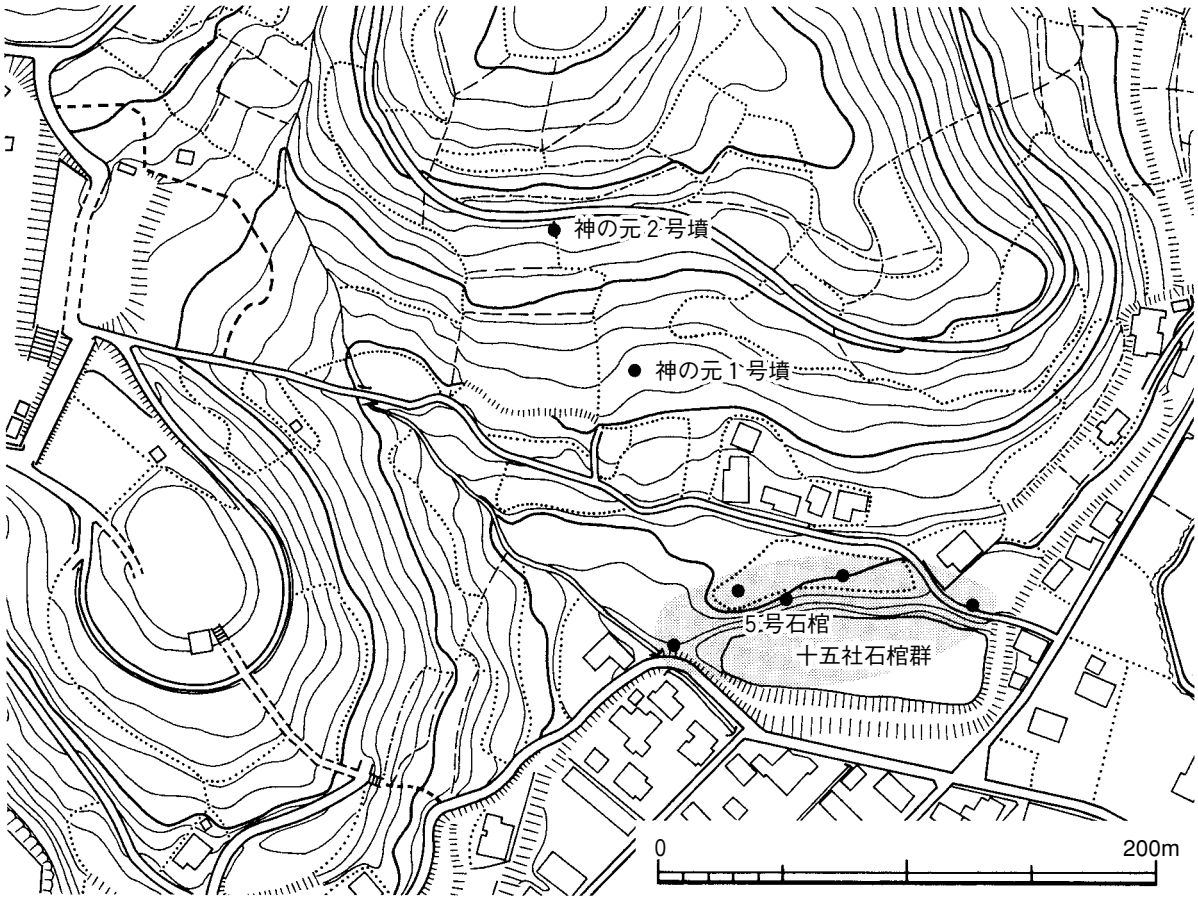
後期の前方後円墳も数基知られている。塚原丘陵の西に対峙する亀崎丘陵にある国越古墳は6世紀初頭から前半の築造と考えられ、基部地域では最も早く横穴式石室を採用している。石室内部には平入りの家形をした石屋形を納め、鏡3面・銅碗などの豪華な副葬品が出土した。北北西約1kmには基部地域で最終段階の前方後円墳とみられる仁王塚古墳がある。

またこの地域の特色として装飾古墳の存在も挙げられる。鴨籠古墳は刳抜の舟形石棺に直弧文を描き、前述した国越古墳は直弧文・鍵ノ手文などを線刻し彩色を施す。また桂原古墳・塚原1号墳・仮又古墳などは、舟の線刻をもつ後期から終末期にかけての古墳である。舟の線刻は、当地の装飾古墳における特徴ともいえ、ほとんどの古墳が海を望める丘陵上に位置していることもより、当地における古代人の海洋性を示しているといえよう。その他、元米ノ山窯跡や、朱斗叶松窯跡などの須恵器窯跡も存在する。

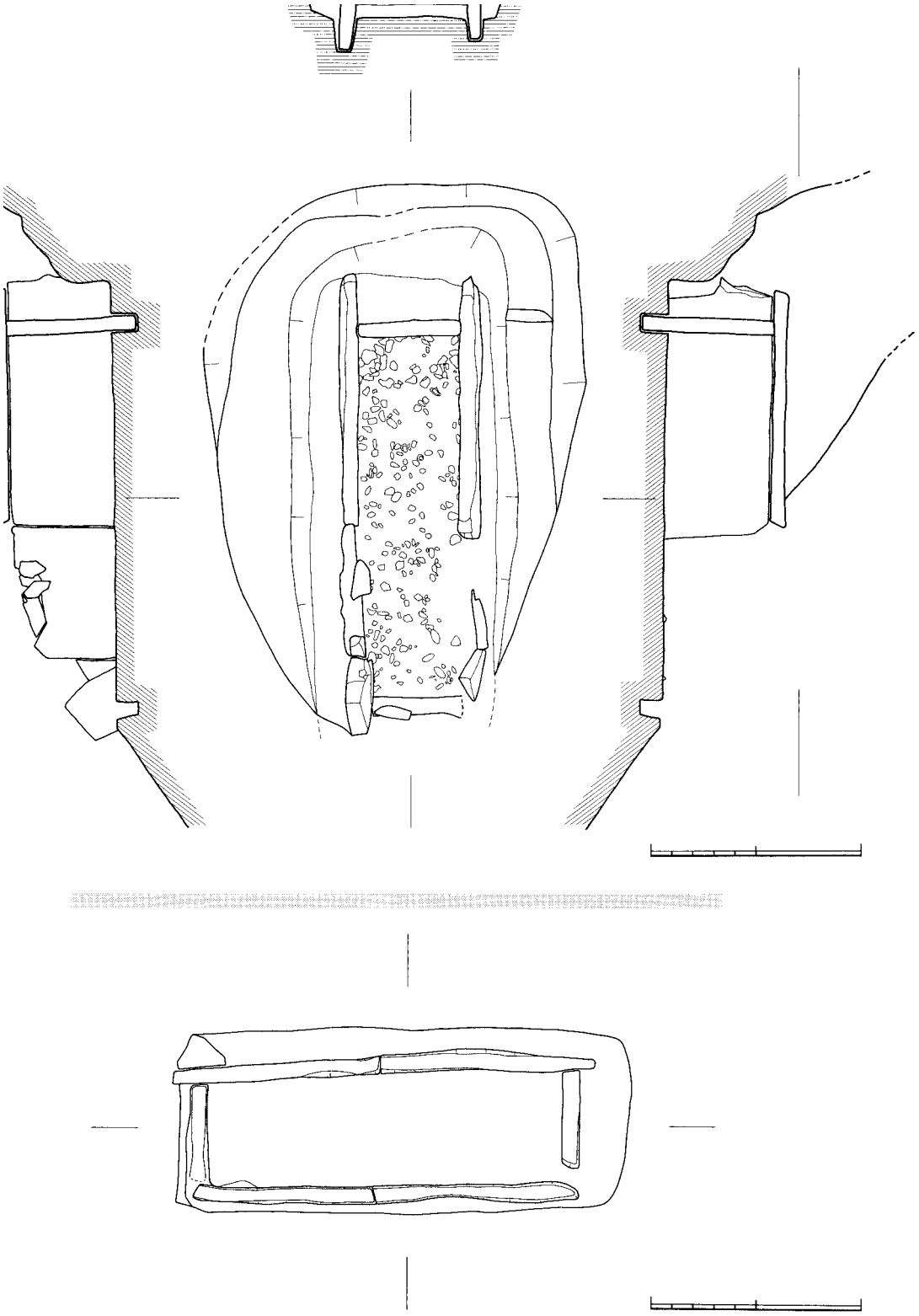
Ⅲ　調査の成果

（1）　はじめに

十五社石棺群については、既に古くから知られていたようで、すでに数基の石棺については調査がおこな



第2図　十五社石棺群周辺地形図



（石材抜きとり後）

第３図　十五社箱式石棺実測図

われている。しかしその正式な報告は無く、正確な基数や分布は不明である。今回周辺の分布調査も併せて実施したが、露出している石棺は発見できなかった。筆者の知る限りでは、今回の発見が５例目であると思われ、十五社５号箱式石棺として報告する（中岡　1992)。調査終了後に、隣接した地点でまたもや石棺が工事中に露出した。現地に再度出向いたが、この石棺は、以前に調査をされたものらしかったが、何号石棺であるか特定することは出来なかった。この石棺については、協議の結果、法面角度を変更し、現地で保存されることになった。

なお。今回報告した５号石棺については、石材はすべて水道センター（旧不知火公民館）に保管されている。

（２） 十五社５号箱式石棺の調査の成果

今回報告する５号石棺は、防災ため池事業の法面工事中に発見されたものである。南側の蓋石及び側石は既に破壊されていたが、現地にそのままの形で蓋石等の石材も保管されていたため、ほぼその概要を知ることが出来た。

まず、1.5～２ｍの厚さの客土があるため、それを除去し、旧地表面を検出することから調査を始めた。旧地表面を露出させ、石棺土壙ライン検出のための清掃に取りかかった。

主軸をＮ－14°－Ｓにとる組合式石棺で使用石材は砂岩である。棺蓋は2枚からなる。蓋裏面は赤く彩色されていたが、特に溝等の掘り込みは認められなかった。また粘土による目張り等はなされてない。蓋石を除去すると、棺内には5cm程度の厚さで土が流入していた。

棺身を構成する主要な板石は長側壁が各１石、短側壁が各1右の4石である。内法は棺身上面で長辺約160cm、短辺は西側約45cm・東側約50cm・中央部約48cmである。いずれも内面を赤く彩色されていた。

床面は棺身上面からの深さ約40cm、長辺約158cm、短辺は西側約44cm・東側約48cm・中央部で約47cmをはかる。床には玉砂利が見られるが、一面に敷き詰めていると言う感じではなく、ややまばらな敷き詰め方である。

加工しやすい砂岩を用いており、その造りは精緻で、身の組み合わせ部分には、溝を施しピッタリと組み合わされるようにできている。また東側壁石にはノミの痕跡がはっきりと残っていた。また南西端に、約20㎝大の加工された扁平な石が存在する。石棺の補助材のようなものと推測される。

土壙の平面形は、一部北西側に後世の掘り込みにより破壊されているものの、190cm×80cmの隅丸長方形を呈している。二段堀りで、探さは旧地表面から、一段目までが約45cm、床面まで約70cmである。底には棺材を据えるために更に深さ13cm程度の溝が掘られている。

土壙の埋土は、大きくは３つに分けることが出来る。第Ⅰ層は、上層のa・b層で、石棺蓋石を覆う。褐色土で黄褐色の粘質土をブロック状に含み固くしまる。また拳大程度の小礫を少量含む。Ⅱ層は、ほぼ土壙の一段目までの掘りかたで、ｃ～hまでの層である。暗褐色土で、一部棺の身の上面に砂の層が認められる。石棺を現地で加工した際の粉末屑の可能性もあるが、断定出来なかった。Ⅲ層は、土壙二段目までの掘りかたまでで、ｉ～ｋまでの層である。渇色土で、粘性に富む。その埋土はすべて水洗したが、遺物は発見されなかった。また墳丘の有無については、不明である。

（３） まとめ

今回調査した５号石棺は、組み合わせ部分に溝を掘るなど精緻で、箱形石棺と呼ぶほうがふさわしいものである。石材に砂岩を使用し、組み合わせ部分に溝を施す箱式石棺（箱形石棺）は、天草大矢野町維和島の千崎古墳群（箱式石棺24基)、同広浦の箱式石棺や、松島町阿村大戸鼻古墳群、八代市大鼠蔵島古墳群、小鼠

蔵島古墳群など、宇土半島及び天草、八代地域など、環不知火海地域に多く分布する。またこれら箱式石棺（箱形石棺）の分布は、宇土半島基部を除くと、初期横穴式石室（石障系古墳）の分布と重複する。言い換えれば、宇土半島基部を除くと、前方後円墳の分布と重複しない。

そのうちの幾つかの石棺には円文等の装飾文様が施されている。装飾のある箱式石棺と装飾を持たない箱式石棺の差異が何に起因するか不明であるが、装飾ある箱式石棺に隣接して初期横穴式石室が存在しており、装飾を持たない箱式石棺は、数基が群集することが多いと言う傾向は見出せる。

これらの箱式石棺は、時期を決める遺物に恵まれないが、装飾を有す箱式石棺は、その装飾のモチーフが、隣接する初期石障系横穴式石室と同じであり、石障系横穴式石室の出現と同時かやや先行する時期と考えられる。また装飾を有する箱式石棺と持たない箱式石棺の差異は、少なくとも時期差では無いと考えており、その出現の時期は、石障系横穴式石室の出現と同時かやや先行する時期である可能性が高い。

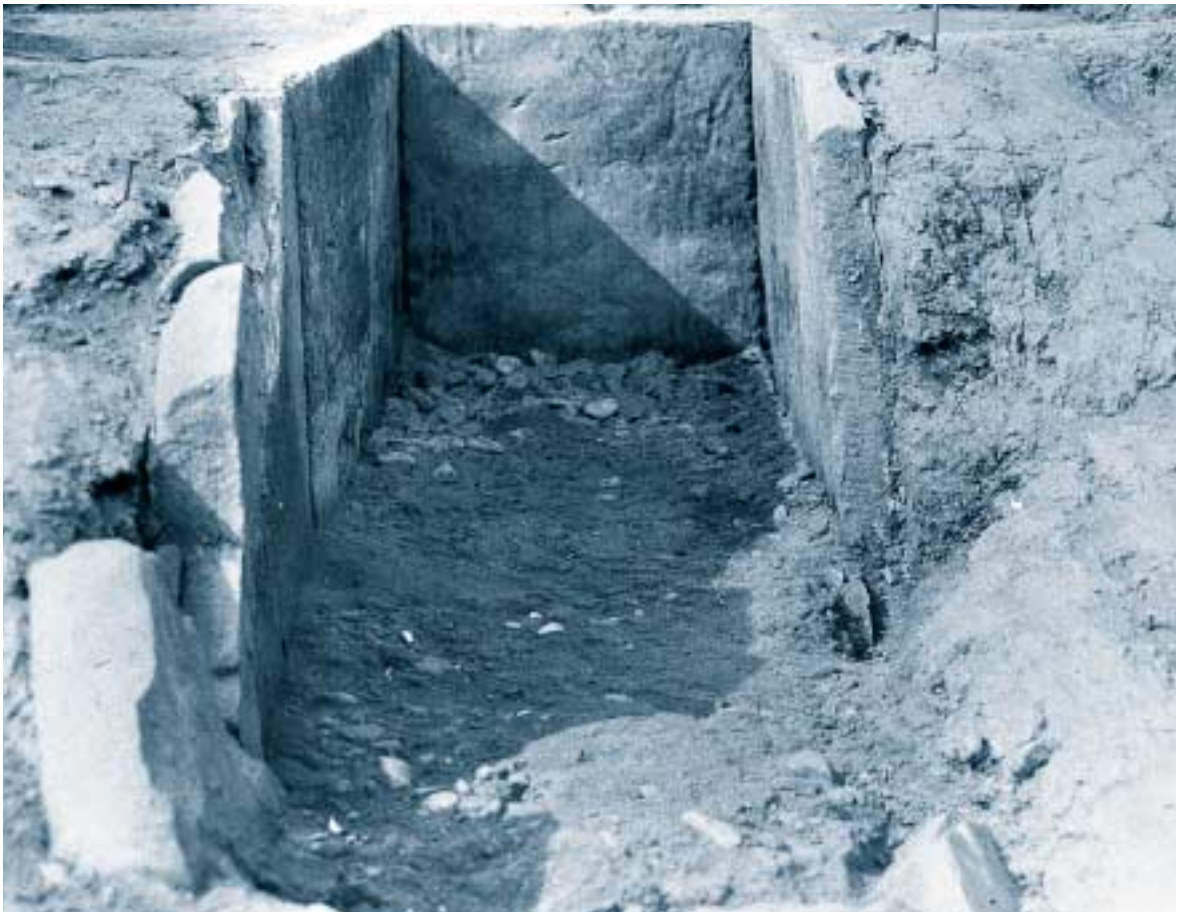
参考文献

中岡　昇　1992　「神の元１号墳」『熊本県文化財調査報告書』第122集

塚原平古墳発掘調査団　1999　「塚原平古墳」不知火町教育委員会

上：十五社 5 号石棺検出状況　下：土壙検出状況

図版 2



5 号蓋石除去状況

上：西側壁　　下：石材抜取後の状況

報　告　書　抄　録

書　　名	岩瀬・木柑子遺跡
副　書　名	花房中央地区県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財調査
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第１９８集
編著者名	古城　史雄・古森　政次
編集機関	熊本県教育委員会
所　在　地	熊本市水前寺６丁目18－１
発行年月日	平成１３年3月30日

所収遺跡名	所　在　地	コード 市町村：遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
岩瀬･木柑子 遺跡	熊本県菊池市木柑子 菊池郡七城町岩瀬	：	1997,02,01～ 1997, 9,30	4,000㎡	農業関連

遺　跡　名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩瀬・木柑子	縄文時代後期, 晩期 古墳時代 奈良･平安時代	埋甕 円形周溝墓 古墳周溝 竪穴式住居跡	須恵器 石製表飾〔石人〕	１つの古墳より、石人が４体出土するのは、県内初。

熊本県文化財調査報告　第198集

岩　瀬・木　柑　子　遺　跡

平成13年３月30日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市水前寺６丁目18番１号

印刷　コロニー印刷
〒860-0051　熊本市二本木３丁目12番37号

１２　教委　教文
②　　００８

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 198 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 岩瀬・木柑子遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/